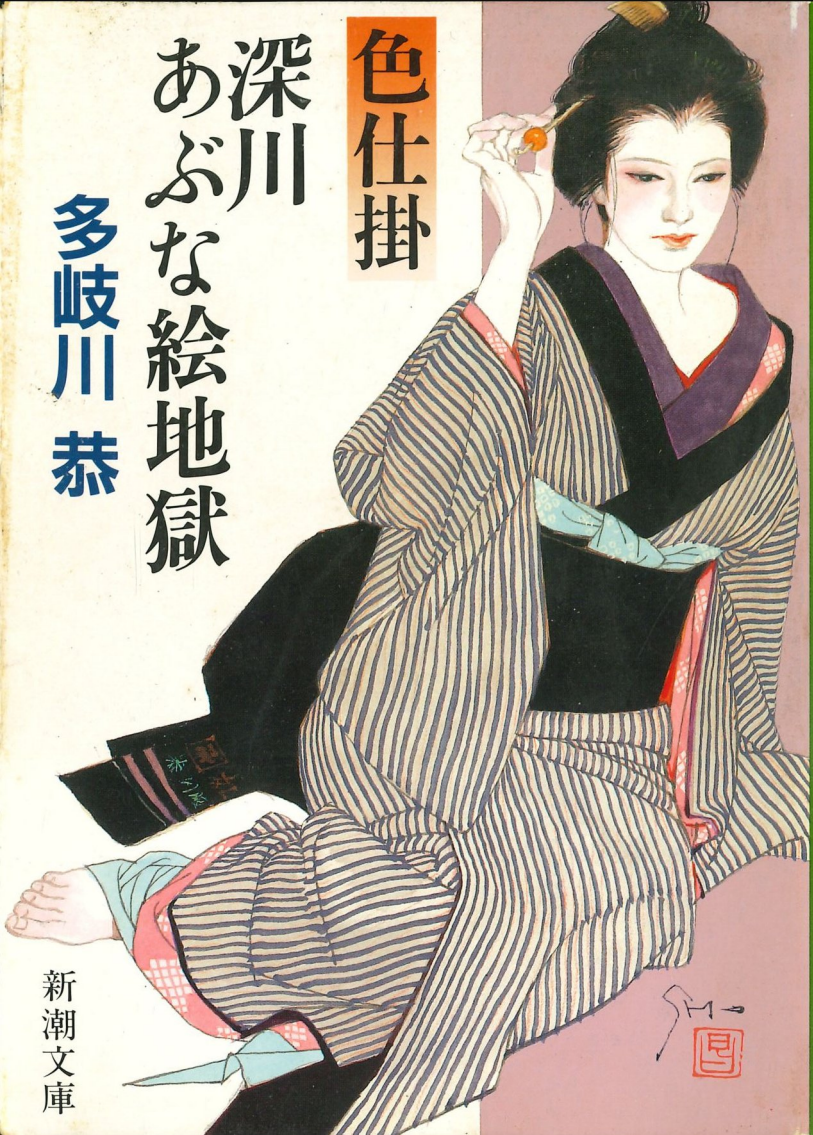
色仕掛

深川あぶな絵地獄

多岐川恭



新潮文庫

新潮社のハードカバー

春色天保政談
多岐川恭

風来坊の旗本次男坊が、自らが描く春画さながらの生活から一転して体験するスリル満点の世界。邪淫寺、闇討、牢内の危機一髪！

カバー　堂昌一

色仕掛 深川あぶな絵地獄

多岐川恭

新潮文庫

色仕掛 深川あぶな絵地獄 多岐川 恭

た 48 3 新潮文庫 440

江戸は深川で、平凡な絵草紙屋を営みながら、裏ではご禁制のあぶな絵を売り捌く巽屋孫兵衛、お京の夫婦。男女の淫らな絡みを描いた秘画と、妖しい色香を滲ませるお京めあてに、今日も色欲に狂った男どもがやってくる。孫兵衛、お京と配下の悪党たちが、剣と悪知恵にモノを言わせ、鮮やかな手口で彼らを欺き、身代残らずまきあげる。痛快無比の八編を収めた色仕掛シリーズ第二弾！

ISBN4-10-109913-8 C0193 P440E　定価440円（本体427円）

新潮文庫

多岐川恭の作品

用心棒
色仕掛 闇の絵草紙
色仕掛 深川あぶな絵地獄

カバー印刷　錦明印刷

今月の新刊

巽屋孫兵衛一党が、色欲に狂った男どもを欺き、身代残らずまきあげる。シリーズ第二弾！

想像力と数百円 **新潮文庫**

新刊
た 48 3
新潮文庫
440

今月の新刊16冊
＊価格はいずれも消費税込みの定価です

わが青春に出会った本	三浦綾子	440
酔いどれ次郎八	山本周五郎	440
裏声で歌へ君が代	丸谷才一	640
不安の周辺	辻井喬	320
マンボウの素人乗馬読本	北杜夫	360
色仕掛 深川あぶな絵地獄	多岐川恭	440
ファディッシュ考現学 2	田中康夫	360
黄泉の王	梅原猛	480
ただの歌詩じゃねえか、こんなもん '84—'90	桑田佳祐	520
カラー版 作曲家の生涯 ワーグナー	三光長治	440
星（ほしむし）虫	岩本隆雄	480
月のしずく100%ジュース	岡崎弘明	440
三日月銀次郎が行く	武良竜彦	440
リブレイ	K・グリムウッド 杉山高之訳	600
反逆者に死を	S・M・カミンスキー 田村義進訳	440
スパイvs.スパイ	R・ケスラー	640

色仕掛 深川あぶな絵地獄

新潮文庫

色仕掛 深川あぶな絵地獄

多岐川 恭 著

新潮社

色仕掛 深川あぶな絵地獄 多岐川 恭 著

新潮文庫

色仕掛　深川あぶな絵地獄

多岐川　恭　著

新潮社版

4501

目　次

第一話　箱入娘はお目の毒……七
第二話　女が回る水車……四七
第三話　死んだ夜鷹が福の神……八七
第四話　夢路の果ては地獄の図……一二七
第五話　行き暮れて雀のお宿……一七三
第六話　心の闇に狂い花……二一一
第七話　極楽浄土を逆落し……二五三
第八話　怨みの的は生人形……二九五
解説　宮部みゆき

色仕掛（いろじかけ）

深川（ふかがわ）あぶな絵地獄（えじごく）

第一話　箱入娘（はこいりむすめ）はお目（め）の毒（どく）

一

四十年輩、ほろ酔いの男が、暮れ方の油堀のほとりを歩いていたが、岸にひとりたたずむ女があって、その後姿の腰付きがただならず艶で、網を張った夜鷹とでも見て取ったか、つんのめるようにして寄って行った。深い秋、つるべ落しに赤い陽が沈むと、すーっと暗くなり、風が冷たくなっていた。

肩を並べて、右手は何気なく女の腰へ。

「姐さん、おめえも酔い醒ましか？　ドブっ臭え風に、あんまり吹かれていると、毒気に当るぜ」

「そりゃあご親切に……おや、お前さん、厭だよ。亀さんてえ人だろう？」

こちらを向いた、ぽったりした顔が、舟まんじゅう、お新だった。

「こいつは驚いた。お前さんはたしか、お新さん……いつか会った時に、そう思っちゃあいたが、いい女だなあ。つい二、三日前、卯平さんに会ったぜ」

「そうだってねえ。わたしも聞いたよ。いいご機嫌で、どこへ？」

「なあに、あてはなしさ。宵の口というのに、帰って寝るのも気が利かねえから、一杯やって、いい女を探していたところだ。運よく、ふるい付きてえようなのをつかめえたと思ったら……これだ」

「おだてっこなしさ。こっちは婆ぁだ」

「そんな婆ぁと、一晩でも添寝ができりゃあ本望だが、亭主持ちの、それも卯平じゃあ、指をくわえるほかはねえ」

「ばからしい。卯平なんざあ、居候の穀潰しさ。亭主なんぞと立てちゃあいねえよ。亀さん、本当にわたしと寝たいかえ？」

そこは年季の入った男たらしで、ややうつむけた顔から、探るように見上げた瞳に、妖しい滑らかな光が宿っている。濃化粧の顔は夕顔のよう。薄明りが七難をかくしてくれた。

「本当も何も」

男はお新の両肩をわし摑みにした。

「……お新さん、おめえがこれほどの女だとは思わなかった。じらしておいて、さようならは罪だろうぜ」

「じらすのなんのと、おいらは回りくどいことは嫌いさ。おいでな、うちへ」

「うちへって……」

「化物が出そうなあばら家だが、静かで邪魔はねえよ。卯平は、よそからちょいと小金が入

ったから、今夜はお定まりで、どこぞへお泊りだ。あしたは元通りの空っ尻で舞い戻るやつさ。気兼ねはねえよ」

お新の丸っこい笑い声が川面に消えた。

それから一刻。因速寺裏手の墓守小屋の中は、光の乏しい行灯の、灯芯の焦げる音がジジジ……家の囲りでも、生き残った虫の音が微かだった。

男は敷布団の上に大の字。肌は生っ白いが毛深いやつで、ヒヒが組み敷かれて、降参したようにも見える。しかも魂を抜かれでもしたような面持で、茫乎とした目をみごとな裸のお新に向けていた。お新は男の腹にしっかり腰を据え、こちらを向いた両の肢を放胆に男の肩先に投げ出し、上体は反り加減、うしろにやった左手は、男の太腿に突張って体を支え、右手に持っているのは朱羅宇のキセルで、スパリスパリと煙を吐いている。一服吸い終ると、灰を男の黒い胸毛の上に吹き落し、横にのせた新しい煙草を丸めて、落したやつから火を吸いつけるのだが、灰は男の胸毛を焦し、熱い！　と思う瞬間に、消えてくれることになっている。

「うっ、チチチ……」

と男は身もだえをするが、お新は知らぬ顔だ。ただ、お新の体は、絶えず小浪でも立つように、ふるえているのだ。それは男の肌にしか伝わってこない、微妙な痙攣じみたもので、強くなり弱くなり、そのたびに男は弱々しいうめき声を立てる。

お新は平気なのかというと、そうでもなく、時々、キセルの吸口が唇から離れ、唇は開きっ放しになり、目を閉じて、眉根がキュッと寄ることもあるが、波が静まると、またスパスパだ。

「もうかなわねえ。お新さん、勘弁してくれ」

「おや、弱音かい？　それじゃあ一休み、一杯やろうかねえ。卯平の飲み残しがあるはずだ」

お新はようやく、ふんわりと男の上にかぶさって、なんとなく、フフフと笑う。

それからさらに半刻。万が一、卯平が戻ったらと怖れをなしたのか、男は身仕舞いをして酒を飲んでいた。お新は着物を肩から羽織ったばかり、惜しげもなく男に肌身をさらして見せながら、その膝に寄りかかって鼻唄だった。

「お新さん」

「お新と呼び捨てにしとくれ。水臭い」

男はヤニさがって苦笑し、

「それじゃあお新、こいつは少ねえが取ってくれ」

「おや？　金は引込めな。客じゃあねえんだ。お前、おいらをちょんの間、買ったつもりでいたのかえ？」

「そ、そうじゃねえが、邪魔にはなるめえ。取っておいてくれ。おれはお新、心底ほれた

ぜ」

「そうかい。それじゃあ気持に甘えて……こいつは二分だ。お前、よっぽど金回りがいいね。それだけ、男の出来がいいんだ。卯平と来た日にゃあ、甲斐性がなくって、箸にも棒にもかからないよ。あれでも昔は、隅に置けねえところもあったんだが……切れ時かねえ」

「年だからなあ。なあお新、おめえさえそのつもりなら……」

「いいのがいるのじゃないかい、亀さん」

「いるもんか。おれがほれたと言ったのは嘘じゃねえ。卯平と話を付けたら、おれのうちへ来てくれるか？」

「こっちもほれ加減だ、お前なら願ってもないけれど、あとになって逃げを打たれるのもばからしい。おいらの本性を知っているのかえ？」

「と言うと、舟での稼ぎかなんぞのことか？　とっくに承知の上で言うのよ」

「悪い世渡りもたんとするお姐さんだ。それもご存じかえ？」

「そいつはいっそ頼もしい。それじゃあかくすこともねえ。こちとらも同類だ。こりゃあ神様のお引合せかもしれねえぜ」

「驚いた。そうは見えなかったが……金回りがいいのも、その道でひと儲けかい？」

「こいつは序の口。金が入るのはこれからだ。小さな仕掛けじゃねえ」

「聞きたいねえ。……なに、言いたくなけりゃあ構わねえのさ」

「なんだ、怒ったのか？」

「怒りゃあしないさ。そりゃあお前の仕事だもの」

「お新、必ず卯平と切れ、おれのものになるか？」

「念には及ばねえよ。卯平には、おいらからキッパリ引導を渡しゃあ済むのさ。お前が少々色をつけてくれりゃあ、なお綺麗に片が付く」

「よし、それで決った。水臭えとふくれっ面をされちゃあ閉口だ。……もうちょいと、こっちへ寄りな」

「あの二本棒野郎、吐きやがったか」

「吐いた。思いのほかに性根のねえ馬鹿だよ。それにしても、お前の鼻はまだ、なかなか利くようだ」

「気になる言い方をしやがったな」

と卯平は塩からい笑顔を見せた。

「……持ちつけねえ金を、空威張りだかおっかなびっくりだか、あちこちでバラ撒いている様子を見りゃあ、目星はつくってもんだ。どこからか、思いもかけねえ金が入って、そいつを使い尽しても、まだあとがあるようなそぶりだ。元来亀吉って野郎は、善にも悪にも手の出ねえ間抜けだから、どうせ、何か悪事のおこぼれ頂戴だろうとは思っていた。存外大仕事

だなあ。軍師はだれだかわからねえが、うめえことを考えやがる」

男の名は亀吉、天台の末寺で正光寺という寺が、俗にいう浜通り、大川口に臨む熊井町にあって、住持が良円、納所坊主が光念。良円のだいこくがお安、この女は近くに小家をもらって住んでいるが、お安の弟が亀吉で、毎日正光寺に出て雑務をやっている。掃除や墓守の下男は別に彦兵衛という年寄りがいるから、因速寺の墓守卯平より、格は上のようだが、実は大して仕事もない。新仏の湯灌、埋葬の折に人足を指図するくらいのものだ。お安の縁で食わせてもらっている役立たずなのだが……

「こいつは孫兵衛に知らせるがいい」

と卯平。貧乏徳利を振ってみて、底でわずかに音がするのを、グイと一飲みしてほうり出した。

「うまくゆすりゃあ、たんまり入るね」

とお新。これはゴロリと横になり、大あくびをして目を閉じた。

「……馬鹿は馬鹿だが、あの味はそれほど悪くもなかったよ、卯平」

卯平は耳にも入れぬ様子で、何やら思案顔になった。

サアッとやってきたのが時雨。屋根やひさしを派手に叩いていたが、それはほんのひとときで、嘘のように雨脚が絶えた。

二

「ほう、絵草紙屋さんで。それはそれは」

正光寺の住持良円は巽屋孫兵衛が脇に置いている風呂敷包みにジロリと目をやった。

「……で、そこにお持ちなのが、美人画、役者絵のたぐいかな？」

「まあ、そのようなもので。こちらへお詣りに参りましたついでに、お得意様で近くにお住まいのお方へ、お持ちしようと存じましてね」

「わたしも絵は好きでね。ちょいと見せていただけまいか」

「いえいえ、お見せするようなものじゃあございません」

「いいじゃありませんか。気に入ったのがあれば求めますよ」

「これは、弱りましたな。実を申せば、あまり大っぴらには持ち出せぬ代物で……」

「つまり、例のやつじゃな。それならば、なおさら拝見したいて」

良円は細い目を、さらに細くした。顔はまんまる、福々しい。一見色白、上品なのだが、唇だけはやけに赤く、娘のそれのようにふくらんで、まくれ上っているのが坊主らしからず、難だ。年は四十半ばだろうか。なまぐさい匂いを嗅ぎ取るのは、わけもない。

正光寺の庫裡。本堂より大きくて、造りが立派という妙な寺で、孫兵衛、お京が招じられ

たのは、狭いが手をかけた小座敷だった。森閑として、秋陽を受けた障子に、庭樹の影が映っている。

床柱を背に良円、脇に少し退いて控えているのが、納所坊主の光念で、これがまるで嘘のような美男だった。瓜実顔、通った鼻筋、クッキリとやや武張った眉に涼やかな目、キリリと締った唇。頬にほんのり血の色。

伏目になって神妙に控えているようだが、チラチラとお京を盗み見ているのは、まつげのそよぎで、それと知れる。

お京は巽屋の女房然として、堅苦しく端座していた。色合いも地味な縞のあわせの、襟を窮屈につくろって、黒地の帯は胸高。白粉っ気はあるかなしの、凛とした顔には、もと武家女房の気品が漂っているようだ。

良円も光念も、女の目利きはおそろしく巧者らしい。色気抜きの世話女房と見過すどころか、良円までが何やらソワソワと、お京の膝頭や腰の辺りに、視線を這わせていた。

そのお京が、身じろぎを始め、上体も少し、かがまってきた。

「お京、どうかしたのかい？」

と、孫兵衛がのぞき込んだ。

「なんだか胸が……いえ、すぐ直ります」

お京は頬笑んでみせたが、顔に苦痛の色がある。

「そりゃあいけない。横になられるがよい」

良円が、待っていたように及び腰になって、

「光念、次の間にお連れして……」

と言うのを、お京がさえぎった。

「本当に、何でもございません。申しかねますが、気付けのお薬でもございましたら」

「ありますあります。それじゃあ光念、薬と水をお持ちしなさい。おかみさんは膝でも崩して、お楽になさい。他人行儀にすることはありませんぞ」

「ありがとう存じます」

と、孫兵衛が受けて、

「お京、お言葉に甘えて、横坐りになるがいい」

お京ははずかしげにうなずくと、言われた通りに横坐り、左手を畳についてさしうつむいた。そこへ光念が、盆に薬と水をのせて運んでくる。光念の世話のしっぷりは尋常でない。その目はお京の目鼻や唇、さてはうなじ、耳たぶに食い入るようだ。良円はその光景を横目に、

「巽屋さん、勿体ぶらずに、絵を見せた見せた」

「それではお見せ申しますが、かならずご内聞に」

さて、孫兵衛が取り出したあぶな絵は、むろん宇陀川芳国の彩管に依るが、女の相手は人

間でないのが趣向だった。大蛇にギリギリと巻かれ、巨大な鎌首からくり出す炎の舌で犯される女、蜘蛛の糸でがんじがらめ、大鎌に似た足で秘所をグサリ、苦悶にのたうつ女、さては大猩々に股裂きにされ、鮮血淋漓たるところを犯される女の断末魔、といったところ。さらに山犬、虎、大鷲など十枚ばかりで、芳国の筆は奔放軽快である。

「ふうん……こりゃあみごと。有りふれたもんじゃない。巽屋さん、わたしが買おうじゃないか」

「と、申されても、これは注文の品でございましてな。あちら様で何枚お買い上げになるかは存じませんが」

「いいじゃありませんか。わたしは気に入った。金なら、先様の二倍は出しましょうよ。みなほしいと言うのじゃなし。ほかにもあるようだな。ジックリ見せてほしいね」

「それではこういたしましょう。わたくしはこれから、用事がありますので、おいとまいたしますが、お京とお話し合い願いましょう。これは万事、わかっておりますので。……お京、頼んだよ。お前はいま少し、休ませていただいたほうがよくもあるからね」

お京はいささか心細げだが、あるじの言い付けだから仕方がないとあきらめた風情で、うなずいた。孫兵衛はさっさと引揚げる。

「お前さん、お京さんと言いなすったね。うら若い女の身でありながら、こういう絵を見て、なんともないのかい？」

「いいえ、商売でございますから」

「と言って、ろくろく見もせず、目を逸らすようだがね。さあ、わたしといっしょに、よく見ておくれ。品定めをするんだから」

と、良円は絵を吟味するのと、そいつをお京にさしつけ、反応をうかがうのとが半々、ずるずるとそばにいざり寄り、いまにもお京の肩に手を掛けそうな気配だ。

お京は目を閉じ、顔をそむけて、消えも入りたそう。血の色が頬を染め、息遣いも乱れていたが、とうとうたまりかねたように、畳の上に突伏してしまった。

「これはいけない。また気分が悪しくなったそうな。お京さん、体の力を抜いて、じっと寝ているがいい。なあに、間もなく楽になるさ。光念、上から掛けるものを、何か持ってきなさい。そうしてさがっているんだ。あとはわたしがお世話をする」

命じられた光念は、片頬でニヤリとしたが、何とも言わず、次の間から薄目に綿を入れた夜着を持ち出し、くの字なりに長くなっているお京の上にさらりと掛けると、

「わたしに用は？」

「ない」

と良円は睨みつけた。光念が出て行くと、小座敷はお京と良円の二人っきりだ。

「帯をゆるめぬと、胸苦しさはなくならんて」

とつぶやきながら、良円はせっせと帯解きにかかる。

「こう、襟をつくろっては苦しいはず。さあじっと、じっと」

良円はお京をあおむけにし、帯は十分にゆるめてあるので、グイと襟をくつろげると、もう両の乳房がこぼれそうになっている。肌は淡い小麦色で、すべすべと陶器の堅さがあるようでもあり、柔らかく溶けそうな綿雲のようでもあり、感嘆の吐息をついた良円は、手付きも荒々しく、さらに合せ目を広げた。お京の乳房は大きくもなく、小さくもなく、ほっかり盛り上った形が崩れない。乳首は薄紅の色。

「世にまれな女だとは思っていたが、これほどとは……わしの眼鏡に狂いはなかったて」

良円は身もだえするお京の上にガバと身を伏せ、

「お京さん、悪いようにはせぬ。お金ならいくらでもあげる。絵もみんな買おう。だから観念しておくれ。ご亭主には黙っていれば済むこった。……さあさあ、あばれるとまた苦しくなるよ。おとなしく、身を任せてくれたら、なんでも買ってあげる……よしよし、おとなしくな」

あまりのことに、虚脱したと良円は思ったらしい。お京の胸に顔をくっつけ、さんざ舐めたり口に含んだりしたあげく、そろそろと裾前に取りかかった。

だが良円は、お京のすらりと伸びて引き締った足から、みごとに肉付いてゆく太腿へと、わずかな感触を楽しんだにすぎず、かぐわしい春草をかいま見たと思った瞬間、トンとうしろから突き転ばされていた。

「その辺で手を引込めてもらおうか。見料は大分高くつくぜ」

巽屋孫兵衛が、いつの間にか、足音も立てずに舞い戻っていたのだ。良円はそろそろと起き上り、これも曲者で、計られたと知っても、あわてはしない。

「……ゆすりだったか」

「人聞きの悪いことは言いっこなしだ。おれは正直真面目な絵草紙屋、お京は亭主孝行の女房だ。人の女房を手ごめにしたのが寺の和尚となりゃあ、ただじゃあ済まねえぜ」

「無駄口はいい。金高を言いな」

と、良円の口調は伝法になった。

「百両くれりゃあ、黙って引きさがるがね」

「ふふふ、吹っかけるにも程がある。出来ない相談だ。十両出そうよ。不承知なら勝手にするがいいが、お二人とも、無事に帰れようかね」

良円がそう言った途端、次の間からズイと現われたのが、背高のっぽの浪人者だった。用心棒に飼っているのだろう。

三

「この寺には変ったのがいる。若え坊さんも変っていたが、この浪人さんも、そこらの人と

は違うようだ」

と孫兵衛が言った。実は、浪人者がいることは、お新の話になかった。コケ脅しならいいが、孫兵衛の見るところ、よほどの使い手なのだ。ただひょろりと突立っているだけのようだが、一瞬の抜打ちができるだろう。

「こいつは考え直すのが利口のようだなあ、お京」

お京はすでに、身づくろいをして坐っている。苦しんだという様子はどこへやら、澄まし返って、口許にはあるかなしかの笑い。

浪人者はお京を見ていた。その目には表情がない。ないままに見入っているところが不気味だった。肩の怒った赤ら顔の男で、三十そこそこだろうが、浮世の垢がしみついたのか、ばかに老けている。

「良円さん、お京のことは忘れようよ。その代り、こんどの仕事に一口のせてくれねえか。ちいと手が足りねえようだから、助けになるだろうぜ」

「仕事とはなんのことだね？」

「とぼけるのはおそまきだ。亀吉の口からみんな聞いている」

「亀吉……ちくしょう。なんて薄のろだ」

と良円が舌打ちした。

深川では指折りの油屋で、永代寺門前東町の信濃屋に、お駒という箱入娘がいる。年は十七、京人形に命が宿ったようだという。あるじが参右衛門で四十の声を聞いたばかり。女房をおこうと言い三十半ばだが、これは後妻で、お駒はおこうの連れ子だ。

番頭が藤兵衛、銀六と二人いるうち、年若の銀六が悪いやつで、しつっこくお駒を口説きにかかっていた。色と欲の二股をかけ、婿になれたらしめたものだが、色も欲も見込みはなかった。予ての行跡宜しからず、店の金も使いこんだらしいとあって、婿どころか、いつ叩き出されるかもしれない。お駒はお駒で、銀六を見るとゲジゲジでも這ってきたような顔をする。

ここに銀六は覚悟を決め、毒食わば皿までの計略を練る。かどわかしは、たやすくできようが、追われ追われた末にお縄になるのが落ちだろう。そこで銀六はお駒を「殺す」ことを思い付いた。死ねば追手はかからない。

可愛さ余って憎さも憎い、死びとお駒を、さんざなぐさんだ末に、売り飛ばす……。

銀六は参右衛門の女房おこうを抱きこんだ。おこうには、厭と言えぬわけがあった。よくある浮気沙汰で、相手はお得意のひとり、呉服屋の伊助という若旦那だった。ちょいとした火遊びのつもりが、ずるずると続いて、銀六に勘付かれた。勘付いたのがもうひとり、娘のお駒だ。

元来、親子のくせに、おこうとお駒は不仲だ。おこうは姥桜と呼ぶのが気の毒なほどに若

く、みずみずしい。また気も若く、お駒お駒と男たちが騒ぐのがしゃくにさわる。それに、参右衛門が、義理の仲なのにお駒ばかり溺愛し、女房のおこうを、あまり構ってくれないという事情もあり、いっそお駒なんぞ居ないほうが……と銀六の誘いに乗ってしまったのも無理はなかった。本当に殺すのではなし、万が一、お駒が参右衛門に告げ口でもしたら、三行半は必定だ。

お駒にいいなずけ同然の男がいて、袋物屋の次男長二郎という。これが仲間に加わったのだからおかしいが、わけを知れば不思議ではない。長二郎には女がいた。下駄屋の若後家で、もとは芸者というから、手練手管で長二郎を腑抜けにしたのも、彼が大店の息子ゆえの欲得ずくだろうが、長二郎は無我夢中で、親のすすめを無理強いと取り、お駒を小便くさいねんねえだと毛嫌いしていた。お駒さえいなくなればと、二つ返事で企みに加わった。そういう事情を、当の長二郎の口から探り出したのは、抜け目のない銀六である。

正光寺は信濃屋の菩提寺で、良円と銀六は悪所で知り合った仲だった。おまけに、おこうがはじめて呉服屋の伊助と忍び会ったのも正光寺なのだ。大そう立派な庫裡も、一皮むけば待合茶屋同然で、いま一つ、お女中連の淫楽の場でもある。お詣り、祈禱にかこつけて、やってくる女は、武家の奥女中から町家の女房、町娘から水茶屋の姐さんまで多種多様で、彼女らのお相手は、まず水も滴る美男の光念、次に老巧を誇る良円だが、用心棒の浪人も、案外いかもの食いにはたまらないかもしれない。

浪人者の名は柳逸平。孫兵衛の印象で、この男に一番似ているのは、猛獣である。

この正光寺が、大事な舞台になる。礼金がたんまり、となれば、良円が一味への加担を承知せぬわけがない。

いま一人のグルが町医者の宝部春庵。札付きのたいこ医者で、熊井町と隣り合った相川町、大川端に住んでいる。これは長二郎が知っていて、しかじかのわけだからと、金を握らせた。このように、亀吉はお新に骨の髄までとろかされ、何から何までしゃべっていた。

「和尚、こやつは斬ったほうがいい」

浪人、柳逸平がブスッとした口調で言った。こやつとは孫兵衛のことらしい。

「おやおや、大根でもぶった斬るように」

と孫兵衛が言いかけた時、柳の腰がスッと沈むかに見えたが、瞬間、白い一本の横筋が、小座敷を上下に両断したようだった。柳の刀が腰に戻り、音を立てて鞘に納まった時、良円やお京の目に、白い筋の残像がまだ鮮やかだった。

孫兵衛は畳の上に伏せていた。間一髪、おくれていれば、首が宙を飛んでいたろう。

起き上った孫兵衛の顔色は、さすがに変っていた。

「ひでえあいさつだぜ」

と孫兵衛が言ったのを、柳は何事もなかったように聞き流し、お京を見ている。お京はこ

んどは、柳を直視した。お京の目にも、冷たく水のような色があるだけだ。……柳の顔に、ゆるい笑いがのぼった。

「む、無茶をしちゃいけないよ、柳さん。わたしは血なまぐさいことは嫌いだ」

と、良円がふるえ声で言った。

「斬るつもりなら斬っている。いずれは本当に斬るがね」

と言い捨て、柳はどかりと坐ってあぐらをかいた。

「……どんな手助けをするつもりだ。聞こうか」

十日後。信濃屋の前から、お駒を乗せた駕籠が出た。朝からの雨がようやく止んだ昼過ぎ、空はまだ泣き出しそうで、夕方のような暗さだった。

母親のおこうが送り出し、駕籠脇についたのは番頭銀六だ。佐賀町の親類の娘で、お駒と同年なのに、このごろ縁組が整った。その祝い物を届けかたがた、娘同志で積る話もあろうというので、お駒をさし向けたわけになる。

駕籠は永代寺、富岡八幡宮の鳥居前を通って、門前町の大通りを一路西へ。乗っているのが、か弱いおぼこ娘とあって、決して急がない。一の鳥居を過ぎると黒江町。八幡橋、福島橋を渡って富吉町にかかる。佐賀町の親類へは、突き当って右に折れ、永代の橋袂を左に見て、二町ほど行けばいいのだが、もうじき永代橋というところで、物陰から飛び出したのが、

柳逸平と孫兵衛。どちらも尻端折りの頬被り、柳は町人に身をやつしていた。

「おとなしく、言う通りにしろ。さもないと、命はねえぞ」

孫兵衛はすくみ上った銀六の脇にピタリと付き、よそからは見えぬように、匕首を突きつけた。柳は先棒の前に立ち、睨みを利かせている。口を利かず、顎で差し示したのは、大川に向う小道で、道の両側は薄ぎたない家並みだ。多くは漁師、日傭取り、担い売りの住いで空巣同然だから、ほとんど人っ気もなかった。駕籠はその道に入った。

「おめえは何だ？」

と銀六がささやいた。孫兵衛は薄笑いで、

「加勢さ。言わずとも知れていよう」

と答えた。気に入らねえやつだ、と言うように、銀六はそっぽを向く。いっぱし、才走ったような男だった。

駕籠がおろされた場所は、大川端に立ち並んだ倉の陰で、付近に人家はなく、空地に生い茂った草が霜枯れている。

「駕籠屋、行きな。ぐずぐずしていると、その人に叩っ斬られるぜ」

孫兵衛がそう声をかけるや否や、膝ガクガクの棒組は尻っぴり腰で逃げ失せた。柳はただうっそりと立っている。

銀六は自分で身ぐるみ脱いだ。孫兵衛が断わりもせず、銀六の脾腹に当身を食わせた。加

減したのだが、地べたに倒れてえびのようになったのは、利きすぎたのかもしれない。

この間、駕籠の中のお駒は音沙汰もなかった。眠っているのか、楽しい考えごとでもしているのか。柳が駕籠の垂れをグイとはね上げ、ふしぎそうに見上げたお駒の肩をつかんで引きずり出す。

「あ、あっ、あっ」

と、お駒は言葉も出ない。そこへ、こんどは柳が当身を食わせ、ウンとのけぞるのを抱えこんで、無雑作に帯を解きにかかった。

「うわさ通り、きれいな娘だな」

と孫兵衛が言ったが、柳は答えない。けがれを知らぬげな雪白の餅肌も、一向柳の感興をひかぬらしく、下着半襦袢も剝ぎ取ると、

「投込みはきさまがやれ」

と、お駒をほうってよこした。凄い力で、受け止めはしたが、孫兵衛はすんでに尻餅をつくところだった。

「乱暴だな。先に逃げるつもりか」

柳は答えず、匕首を抜いたと思うと、丸くなって倒れたままの銀六の上へしゃがみ込み、耳の下から顎へスーッと一筋、傷をつけた。思わずギャッと悲鳴を上げた銀六が、

「野郎！　このおれを」

と言いかけるのへ、

「疑われたくはあるまい。そのために傷は役に立つ」

お駒の衣類を丸めて横抱きにし、柳はあとも見ずに小走りだ。苦笑して見送っていた孫兵衛が、

「投込むぜ」

と、お駒を肩に歩き出した。川っぷちまでわずかである。

「さぞ冷たかろう、かわいそうに」

とつぶやいた時、お駒が身じろぎをし、孫兵衛の横顔をチラと見さえした……ようだったのは、気のせいだったろうか。

そっと水中に滑らせてやる。ほとんど水音もなく、お駒は流れだした。身につけているのは白の腰巻二重、同じく白の肌襦袢で、腰巻が広がると、露になった両の脚が、やはり京人形の蒼白さに見えた。

ややあって、孫兵衛は永代の橋の上から、成行きを見守っていた。銀六が助けてくれ助けてくれと呼ばわりながら、大川にざんぶと飛込むのが見えた。

「孫兵衛、お京という女を譲らんか。それなら斬らずにおいてやるが」

どこから出てきたか、柳が肩を並べながら、そう言った。

「女房を譲るわけにはゆかねえ。お前さんはあの小娘を存分にしちゃあどうだい。お前さん

は身の程知らずだぜ」
「斬ってやる」
「斬れたらお慰みだ」
川下で、銀六がようやく、お駒をつかまえたようだ……

四

お駒が生死不明、銀六も息絶え絶えで、お駒は戸板に乗り、銀六は人々に担がれて、最寄りの宝部春庵宅に運ばれたのは筋書通りである。
「やはりいけない。手は尽したが」
と春庵が、静かに横たわったお駒に手を合わせたのが、運ばれて約半刻、八ツ半（午後三時）時分であった。詰めかけた隣人、弥次馬は疑いもせず、春庵にならって合掌する。全く、お駒は死んでいるようだった。白蠟のような顔にまつわりついた濡れ髪が凄艶で、唇の色もなく、全体、息もしていないようだ。
「おい、死んじゃあいめえな」
と、銀六が本気でお駒の顔をのぞき込んだほどだった。近辺の者が引揚げたあと、ひでえ目に合わせやがったと、銀六は起き出してきたが、やはり、まず気になるのはお駒だった。

死なれては元も子もない。絶息していたため、水もそれほど呑んでいない、正気付くのも間もなくだと、春庵が安心させた。
お駒の「遺骸」は、このまま正光寺に運んでしまう段取りだ。これから銀六が信濃屋に駈け戻り、事のあらましを告げたあと、医者が不親切で、家がせまく施療にも差支えるから、すぐどこぞへ運んでくれと言うので、幸い正光寺がごく近くで、菩提寺でもあるから、とりあえず、人に頼んで正光寺に移した……と信濃屋では言うことになっている。
あとは良円が信濃屋の参右衛門をうまく言いくるめ、お駒を信濃屋へ戻させないようにする。これはもちろん、お駒が生きているのを、参右衛門に気取らせぬためで、正光寺でならごまかしが利くが、信濃屋へ帰らせ、参右衛門がお駒に取りすがり、撫で回しでもすれば、たちまち化けの皮が剝げるのだ。
「お前さんはそろそろ行くがいい。その間にわしはお駒を正光寺に運ばせるからな」
「おい春庵、お駒はおれの女だてえことを忘れるな。介抱の度が過ぎちゃあいけねえってことよ」
「この春庵、人の女に手を出すほど飢えちゃあいねえさ」
「その言葉、よく覚えておくぜ」
柳逸平に付けられた傷は存外深く、顔一面に血止めの膏薬を貼りめぐらした銀六は、春庵の出してくれた古着をひっかけ、出て行った。

春庵はやもめで、医業はなまけ放題、暇な男だ。診せにくる女はだれかれ構わず餌食にするが、まだ大店の箱入娘を相手にしたことはなかった。手当の時からムズムズしていて、銀六の脅しなどはハナもひっかけるものではない。夜着をめくり、その下の綿入れの着物を取り去ると、お駒は生れたままの姿になった。ふっくり、はずかしげに盛り上った胸から、キュッとくびれた腰、薄墨を刷いたような下腹、深山の雪さながらになだらかな太腿から、若竹に似た脚と、舐めるようにためつすがめつした挙句、ウオッと一声吠えると、着たものを物狂おしくかなぐり捨てた春庵は、お駒の脇にぴったりとおのが体をくっつけ、目を細めて、強く弱く、お駒の肌をさすりだした。

……と、お駒が身じろぎ始めた。撫でさすりが利いたものらしい。微かにうめき声を洩らしていたが、ぽっかりとうつろな目を開き、しばらくは視点も定まらぬようだった。

「お駒さんや、気がついたのかい？　しっかりしな。命が助かったんだぜ」

春庵はお駒の耳許に熱い息を吹きかけてささやき、ついでに唇を目鼻口、喉許にまで這わせているうち、お駒はようやく我に返った様子、体全体がスウスウと頼りなく、しかもくっついているのが男、とわかったのだろう、激しく身もだえするのを、おさえつけた春庵が、

「これこれ、案ずるでない。わしはお前さんを助けた医者、肌をつけているのは、暖めようがためじゃ。まだ動いてはいけないよ。冷え切った体が、まだ十分に暖まっていないからな。……これ、はずかしいことはない。こうしてさすってあげれば、血の巡りが戻る。そうそう、

いい子じゃ。わしに任せるのじゃ。ちょいと待ちなさい。よく利くお薬をあげよう。飲めばもう大丈夫」

と妙な腰付きで伸び上り、枕許に用意した薬呑み、中味はまむし酒に、何やら別に強精の粉を加え、人肌ほどのぬくみにしてあるものだが、これを取り上げて、お駒の口に持って行った。お駒は厭々をして、首を左右に振っていたが、強いられて仕方なく、みな飲んでしまった。春庵は撫でさすりをやめない。

しばらくすると酒が回り、肌がじわじわと暖まり、火照ってくるのがわかる。春庵は露骨になり、お駒の急所ばかりを攻め立てる。とうとうお駒は切なげに口を開き、胸を大きく上下させて、吐く息もせわしなくなった。見開いた黒い瞳も、溶けそうにトロリとしてくる。

「そうそう、いい気持だろう？　構わんから、もっとくっつきな。そんなに腰をすりつけられると、愚老はもう、たまらぬよ。……それじゃあ、もっとよくさせてやる。つまり全快。ピンピンするて」

春庵は思わず垂らしたよだれを一拭き、こんどは部屋の隅に這って行って、薬箪笥の引出しから何か取り出したのが、療治用の鍼だった。普通のよりやや太目なのを一つかみ、持って戻ると、お駒の上に覆いかぶさり、管を使って慎重に、トントンと打ちはじめたが、狙いはもちろん、療治ではない。ツボは心得ている。打たれるたびにお駒はヒッと声を発し、身ぶるいを続けていたが、鍼が胸と言わず腹と言わず、無数に突き立った頃には、長いうめき

が糸を引き、肢は開き、腰は微妙にうごめいているのだった。

「もうすぐじゃ。もうすぐ往生させてあげるからな」

と、春庵は有頂天で、うわごとのようにその言葉を繰返しながら、鍼を抜いていった。

それから一刻ばかり。お駒は正光寺庫裡の一室に寝かされていた。その回りを取り巻いて、住持の良円、納所坊主光念、柳逸平、亀吉、それに孫兵衛と卯平がいた。卯平は納棺、埋葬の手伝い。こんどばかりは人足に頼めないからと、孫兵衛が呼んだ。

「そろそろ来るな」

と良円。柳は黙然として膝をかかえているばかりだが、光念はしげしげとお駒をのぞき込んでいた。お駒のあどけない美しさが、よほど気に入ったようだ。

「お駒さんとやら。悪いようにはしねえから、おとなしくしているのがいいぜ」

と孫兵衛。

「その通り。これは深い事情のあることでな。お前は何も心配することはない、ふふふふ。おとなしくさえしていれば無事でいられる。いい思いもさせてあげるよ。……いや、それにしても美しい娘だ。銀六などには勿体ないて」

お駒は目を閉じ、ピクリとも動かなかった。観念しているのか、それとも恐ろしさに人心地がないのか、それともまた、春庵のひどい扱いで脱け殻になったのか。

「ほかの者はどうあろうと、わしがかわいいお前さんをきっと守って進ぜるよ」

と、その春庵が、甘ったるい調子で言った。

亀吉が外へ見張りに出て、すぐ戻ってきた。駕籠が二挺、銀六が付いて、急いでやってくるという。

「それじゃあ、ここへ残るのはわたしに春庵、それだけでいい。光念は迎えに出なさい。孫兵衛さん、お前はこれをな」

と、良円は拳を固めて見せた。お駒を気絶させろというのだ。柳に卯平、亀吉は部屋を出た。

「このまんまでも死んで見えそうだが、みなさん、おめえが騒ぎ出すとおっしゃる。少し痛えが我慢して、気を失ってもらうか」

と、孫兵衛は布団をめくり、お駒をうしろから支えて抱き起した。着せられているのは、有り合せの女物袷一枚。胸にさらしを厚く巻いているのは、傷の手当という見せかけだが、心臓の鼓動をかくすため、両手上搏をきつく紐で縛っているのは、手首の脈搏を悟られまいための小細工だった。しかも死化粧として、ことさら厚く、紅をさし、眉墨を引き、白いところは壁のよう。すると、なるほど死人に見える。

孫兵衛がみぞおちに拳を当てる瞬間、お駒は薄目をあけて孫兵衛をチラと見たようだった。その目の色が気になった。……この娘、とうとうおかしくなったのか、または大胆なのか、

あざ笑っているようだったが、見違いか？

お駒は孫兵衛の上手な当身をくらい、ぐんにゃりとなった。

五

参右衛門、おこう夫婦に銀六、あとから番頭藤兵衛ほか手すきの奉公人と馳けつけての愁嘆場は、おこうがもう半狂乱という形で、万事先へ先へと立ち回り、参右衛門がお駒に取りすがれば、おこうはお駒へ頬ずりして息のあるのをかくし、布団の裾で涙にくれていれば、このかわいい顔を見てやってくれと支え起し、銀六の空涙は安心として、他の奉公人は寄せつけもしなかった。

一難は去ったと、ひと安心の良円は、夫婦に悔みをのべてから、仏様がまっすぐ当寺にこられたのも前世の約束事のようで、一旦はおうちへ連れ戻りたいと思いなさるのも人情だが、それはいかがであろう、何かと面倒でもあり、仏様は静かにここで休まれ、このままお墓に入りたいとお望みなのではあるまいか、お通夜から葬儀万端、当寺で執り行えば、こちらも好都合で、と言葉巧みに説いた。

参右衛門はただ涙で、何を考えることもできないようだったが、おこうはいきり立ち、それではあまりお駒がかわいそうだ、どうでも連れて帰るとかきくどいた。むろん、良円にな

だめられる筋書だが、真に迫った芝居巧者だった。

宝部春庵が進み出て、お駒と銀六が運び込まれた有様、手当の効なく永眠した様子などを、まことしやかに伝える。

その部屋で湯灌、と言っても、お駒の体を拭き清めるだけだが、これにも主としておこうが当り、手伝いは奉公人のお絹という女。死人とは言え、男に肌身を見せてはならない生娘だから、参右衛門も手をかけるわけにゆかなかった。湯灌のあと、改めて死化粧をほどこし、銀六が大急ぎで信濃屋に取って返し、運んできた死出の晴着、上から下まで真新しいのを着付けさせる。お駒は終始静かに横たわり、やがて顔に白布を掛けられた。

みなさん、お疲れでございましょうから、お茶など一杯、と光念が出てきて、一同を次の間に導いたのは、お駒がそろそろ覚めかかる時分だったからで、無人になった部屋にそっと入ったのが孫兵衛。布を取ると、お駒が目をパッチリ開いて、孫兵衛を見た。

「おとなしく死に真似をしてくれそうだな。またぞろ、痛え当身にも及ぶまいね」

とささやくと、お駒は微かにうなずいた。

「……当てずっぽうだが、おめえはただのおぼこじゃあねえ。何もかも承知で、欺されてやったと思うが、違ったかえ？」

お駒は答えないが、黒曜石の目に笑いの影がある。孫兵衛はわれ知らず吐息をついた。

「やはりそうか。面白えことになりそうだ。おれはやつらの仲間に入ったが、狙いは別だ。

おめえと似たようなものかもしれねえ。してほしいことがありゃあ、するぜ」

こんどはお駒が、わずかに首を振った。要らぬというのだ。

事を聞きつけた信濃屋の親類、知るべ、隣人、町役人らがぞくぞく集まり、通夜は二間ぶっ通しとなる。きらきらしい装いに威儀を正した良円に光念が高らかに誦経。取り寄せられた精進の料理も酒も、信濃屋の名をはずかしめない逸品で、通夜はまず滞りなかった。

翌日は遺骸を本堂に移して葬儀だ。夫婦は一旦信濃屋に帰り、支度をして、その際に持ち出せるだけのお駒の衣装、身回りの品から人形の類いに至るまで、おこうのたっての望みのままに、寺へ運ばせた。

読経に焼香も終って納棺。これには亀吉、墓守彦兵衛と卯平が当る。みごとな造りの大きな棺桶にお駒を坐らせると、小柄な仏様で、大分余地がある。それへおこうが泣く泣く、目もあやな衣装、装身具を惜しげもなく投げ入れ、花園のようにきれいだ。

「てめえ、どうしてしゃしゃり出やがった」

と、亀吉が睨みつけるのに、卯平は、

「さあ、どうしてかねえ」

と空とぼける。まさか、あのお新が心変りして……亀吉はそんなことで気をもんでいるのかもしれなかった。良円は殊勝に南無阿弥陀仏を称えているが、お駒の衣類一切が、安く見積っても五十両、御布施十両、お駒を叩き売れば六十両、しめて百二十両余り、とでも勘定

をしているに違いなかった。

お駒は夜まで、棺の中で辛抱しなければならない。息抜きの穴は作るはずだが、それにしても苦しいだろう。

墓場にはすでに、穴を掘ってあり、白木の墓標も用意してある。埋葬は七ツ（午後四時）前の時刻になった。念仏の声が一きわ高まり、棺桶が穴におさまり、黙々と土をかぶせるのが、さきほどの三人だ。おこうの細く尾を引く泣声と、銀六の嗚咽が交錯した。参右衛門は目を閉じ、合掌して石像のよう。

一同が本堂へ去ったあと、亀吉と卯平が残り、亀吉はあらかじめ薄く土をかけてあるところを掻きのけ、ふところに用意した竹筒を出して、トンと棺桶の蓋を一突き。その部分だけは裏からくり抜かれ、表面からはわからないが、薄板状になっているので、苦もなく破れる。この竹筒が息抜きで、回りに土を寄せればお終いだ。

「卯平、この一件をお新がてめえに？」

「いいや。手を貸せと言われたのは孫兵衛からだ」

「孫兵衛だと？　なんだ、そいつは」

「絵草紙屋でね、へへ」

「……卯平、お新と切れてくれ。その代りにゃあ、おれの取り分を半分、くれてやる」

「ほれたのかい、あのあばずれによ？」

「なんでもいい。承知か？」
「おらあ構わねえぜ。お新がウンと言やあな」

お駒がひそかに庫裡へ戻されたのは、夜の五ツ半（午後九時）。部屋は例の小座敷で、良円に光念、柳逸平、宝部春庵の悪党共が車座になり、昼間の御馳走をつつきながら、酒盛りだった。

お駒はさすがにぐったりしていて、春庵がまめまめしく介抱し、薬湯をすすめても飲まなかった。そっと耳打ちで、

「なんとかお前を連れ帰りたいが……あいつらは鬼さ。どんなひどいことをされるかわからない」

と、春庵はおのれのことを棚に上げ、

「……あ、任せてお置き。うまくやるから」

一同に向って、春庵が言った。

「娘はよほど弱っているよ。一日二日、静かに休ませてやらぬとな。その後にどう賞玩しようと勝手だが、あまり無茶をすれば、銀六が黙っていなかろう。どうだろう、わしのうちへ一時移しては？」

「ばかを言っちゃあいけない」

と良円がせせら笑った。

「お前さん、もう初物を頂戴したろう。銀六は欺せても、この良円は欺せぬよ。家に連れ帰り、独り占めは虫がよすぎる」

「ううん……それでは仕方がないが、せめて何か食べるようになるまで、手を触れぬようにな。……でないと、娘の命にかかわるよ」

柳逸平は相変らず無言、無表情で、何を考えているのかわからないが、良円と光念は顔を見合せた。この玉のような小娘を、早く両人でなぐさみたいが、どうやら春庵の言い分も尤もだから、一両日待つか、と目顔でうなずき合った。

その夜は何事もなし。明けて春庵は、お駒の看護にかかり切った。彼の口を信ずれば、お駒はやや回復、食い気も出てきて、お粥を二口三口、するまでになった。

実のところ、お駒がそれほど弱っているわけもなかった。それと知りながら大川に投げ込まれた娘だ。春庵の看護は名ばかりで、あの折の楽しみをいま一度と、お駒の体の火を掻き立てているに過ぎないのだった。

お駒はそれを嫌っていない。むしろ、またあのようにして、と口にこそ出さないが、しっとりした目が訴えているのだ。

幸い、檀家二軒で法事があり、正光寺は忙しくなった。良円、光念に亀吉もそちらへ出掛け、柳逸平がまた、ぶらりとどこぞへ消えている。庫裡は無人になった。

おれのような果報者はいないとばかり、春庵はお駒の布団にもぐりこんで、思いのままにお駒をもてあそび、抱いてトロトロしたあと、更に例の秘薬を飲ませると、若いお駒の体内には、激しい情欲が新たに吹き上げてくる。

銀六が飛びこんできたのは、ちょうど両人のからみ合いが最高潮の時で、春庵は中腰でお駒の両肢を抱え込み、お駒は春庵の首根っ子をつかんで、弓なりにのけぞっているところだった。

「春庵、てめえは……」

と銀六は真青になり、ふところに手を入れたと思うと、匕首の刃がピカリと光っていた。

「い、いまは手が放せぬ。お駒もそう言うのさ。お前も悪党なら、野暮は止しな」

と春庵が言う間にも、お駒の口からは息絶え絶えのあえぎが洩れている。

「いますぐ離れねえと、突っ殺すぞ」

と銀六が一歩進んだ時、お駒が物を言った。

「銀六は嫌い……むこうへ行って。春庵がいい。いい……春庵、鍼を打って……あの鍼を……お願いだ、もう……」

「そうらな。だから銀六」

春庵の油断である。目がくらんだ銀六は、匕首を小脇に、体でぶつかっていた。何が起ったかわからぬという顔で、お駒の白い腹の上に倒れようとするのを、ポンと蹴やると、春庵

は横っちょへ一回転して、長くなった。左脇腹から血を吹いている。

お駒はあの時の姿勢のまま、嘲笑をこめてじっと銀六を見ていた。

「虫も殺さぬ面をしやがって、このアマ。もう我慢がならねえ。覚悟をしやがれ」

と銀六はお駒の上におっかぶさるようにして匕首を振り上げた。銀六も何が起ったかわからなかったに違いない。次の間との境の襖が音も立てずに開き、嘘のような身軽さでスッと寄った柳逸平が、得意の横薙ぎを一閃していたのである。刀は銀六の首三分の二ほどを切断していた。

柳逸平はそのまま進む。即死した銀六を傍らに蹴やると、刀をお駒に向けた。さすが剛胆なお駒が、起した上体を波立たせ、震え上った。

ちょうど戻ってきたのが良円に光念だったが、思いもかけぬ惨憺たる光景に、言葉を掛けるのも忘れ、抱き合うようにして尻餅をついた。

柳逸平の顔には、めずらしくほのかな笑いがのぼっていた。

「いい見物をさしてやる」

とつぶやくと、切先をサッとお駒の顔めがけて突き出した。ヒイッと悲鳴が洩れる。しかし切先は、お駒の鼻に触れるか触れないところで、ピタリと止っていた。

逸平はさらに、惨虐な遊びを続ける。切先はお駒ののど、両の乳首、臍、股間を襲った。お駒の肌が、汗でキラキラ光りだした。失神する寸前である。さらに逸平は刀の刃をお駒の

肌に当て、静かに滑らせた。身動きでもすれば、皮膚は破れるのだ。その刃が下腹まで滑ってきた時、お駒はふらりとあおのけに倒れて動かなくなった。

「珍しい見世物だった」

と巽屋孫兵衛の声が言った。孫兵衛は庭先に立っていた。

「芳国に画かせようか。……柳さん、娘をいじめるのはやめるがいい。お京が相手をするよ」

柳逸平はゆっくり孫兵衛を見た。

「おれもお前さんに斬られたくはない。ただし一度だけだが、承知だな？　お京、出てきな」

「ちょっとお詣りを。ようござんすか？」

とお京が聞いた。小さな稲荷のやしろである。赤い鳥居がずっと奥へ続いて、見通せばまるでほら穴のようだ。稲荷を少し過ぎたところに、待合の茶屋があるのだという。

逸平はうるさそうに顎を引いた。行けというのだ。小腰をかがめたお京が、鳥居をくぐると見えた一瞬、スッと横にそれ、代ってその場に立ったのが孫兵衛だった。細い杖をついていた。

「どうだ、斬ってみるか？」

計られたと悟っても、柳逸平に動揺はなかった。地を蹴ると共に抜刀している。孫兵衛は

鳥居のほら穴に一目散に逃げこんだ。柳が急追したが、敏捷さでは孫兵衛が上で、社殿の前へ抜けたと思うと、素早く鳥居の外を馳け戻り、鳥居と鳥居の間の狭い隙間からほら穴に再び飛びこんでいた。逸平は向きを変えようとして愕然とした。刀がつかえる。それほどに鳥居の列が作った空間は狭かった。孫兵衛は、逸平がようやく向き直るのを待ってから、愛用のごく細身の刀を無雑作に突き出した。それはみごとに、心の臓を貫いていた。狼狽が逸平の体の動きを縛ったのだ。

「まだ目が覚めないのかえ？　あきれた薄のろだよ。てめえのようなのに、お新さんが心中立てすると言やあ、上野のカラスが大笑いするとよ。足許の明るいうちに帰りな」

お新の毒舌も誘いで、亀吉がおめきながら飛びかかると身をかわされ、苫屋根がこわれていたか、他愛なく突き抜けて、亀吉は川へ転落した。しばらくして頭が浮き上ったが、それは卯平の頭だった。

「滅法冷てえ。秋も末だなあ」

と卯平は言った。

「お前さんと死んだお駒さんの対面の場が、芝居臭いとは睨んでいたが、おかみさんはおかみさんで、必死にお前さんが勘付くのをかくす様子だ。夫婦化かし合いの死人扱いは、一向

見当もつかなかったが、お前さんとお駒さんが、想い想われの深い仲とは、さすがに悟れなかった。計略にわざと乗って、悪人共を一網打尽、いいなずけ長二郎にも手を引かせ、おかみさんは離縁、お二人水いらずという寸法でしたか。いや恐れ入りました」

「これでもお駒のことは、死ぬほど心配いたしましたよ。同志討ちがお駒のはなっからの計略だったかどうか、当人も実を言いはしますまいが、あなたがいてくれたのは、なんとなく心強かったと申しておりますよ。……ところで、お金はいくら差し上げましょうね。どうせ長二郎の家からもお貰いでしょうが」

「なに、思召しでけっこう。それより、絵を高く買っていただきましょうかな。手前は堅気の絵草紙屋、巽屋孫兵衛でございまして、決してうろんな者ではございません」

「絵は是非拝見いたしましょう。いま、女房に茶など出させます。女房おこうは後悔しておりまして、離縁はいたしません。そのほうが丸くおさまると申すものでしょう」

信濃屋参右衛門はニッコリして手を叩いた。飼い殺しか。無慈悲な男だと思いながら、孫兵衛は陽当りのいい縁側で居眠りをしている白猫に目をやった。お駒はどこにいるのやら、気配もなかった。

第二話　女が回る水車

一

油照りの昼下り。西念寺横町の絵草紙屋、巽屋孫兵衛の店へ、場所柄に似合わぬ不粋な二本差しが二人、ずいと踏みこみ、迎えた古女房造りのお京に、

「あるじはいるか。これへ呼べ」

と威丈高だった。一人は五十年輩、一人は若くて三十くらい、どちらも身なりはよかったが、なにしろ武張っている。客ではなく、面倒な用でもありそうだと、お京は愛想よく会釈して奥へ入った。

「妙なさむらいが二人来ましたよ」

と、お京は昼寝の孫兵衛をゆり起して言った。孫兵衛は寝呆けまなこながら、お京の顔色を読んで、

「難癖でも付けに来たのか。役人か？」

「いえ。御旗本の家来かしらん」

武士の世界にいたことのあるお京の見立ては、大して違っていまい。

むさくるしい小家だが、店から裏へ風が吹き通すから、存外しのぎいい。

二人の侍は、見るもけがらわしいと言いたげに、それでも好奇心は旺盛と見え、店頭に並んだ絵草紙、役者絵、美人画の類をジロジロ眺めていたが、孫兵衛が腰をかがめて出てくると、そろってかたきに会ったような顔をした。

「いらっしゃいまし。手前があるじの孫兵衛でございますが、なにか」

膝をそろえて一礼し、あいさつをする間にも、なるほど旗本の用人に、中小姓ってところか、と合点していた。すると、まず大身と見てよかろう。横柄なのもわかる。

「それがしは割下水の御旗本、千田悠造の用人、鬼塚善之助と申す。また、これは同家家来、佐原俊作じゃ。主人は二千二百石を頂戴している」

と、見当は外れていなかった。

「……で、そのほうに聞くが、宇陀川芳国という絵師を知っておろう」

「へえ、そりゃもう。わたくし共の絵はみな、芳国の筆でございますが」

「では芳国の居所を知っておろう。どこじゃ」

「正直に言うがいい。かくし立ていたすと、為にならんぞ」

と、若いのも、いきなり喧嘩腰だった。

「かくし立てなどはいたしませんが」

と孫兵衛は笑って、

「……芳国にご用ならば、わたくしが」
「無用じゃ。居所を申せばよい」
と用人の鬼塚が目をいからせた。
「まあお待ちください。芳国が何ぞ、不調法でもいたしましたか。なにやら、容易ならぬご様子で。芳国は、申さばわたくしが雇っております者で、芳国の不調法は、わたくしの不調法でございます。あの者をお探しのわけを、お聞かせ願えますまいか」
「言わんと申すのか」
佐原という若い侍、額がせまく、偏屈で短気なのか、刀の柄に手でも掛けそうだったが、本当に掛けてしまった。
「はい。そのご様子では、わけを伺わぬうちは、申すわけに参りません」
とキッパリ断わってから、庭先の立ち話もいかが、きたないところだが、奥でお茶でも一服と、孫兵衛は調子を柔らげた。
足音も荒く奥の六畳に通った二人は、お茶を出すお京に目もくれない。もっとも、野暮天なら当然のことで、よほど女慣れした男でも、世帯やつれに煤け放題というお京の、秘めたる麗質を見破ることはむずかしいだろう。
ところで鬼塚の話だが……
千田悠造の家は代々大御番を勤め、当主も組頭であったが、数年前に病を得て、回復がはかばかしくないため、願い出て役を退き、現在小普請だ。年はまだ三十六、嗣子はなく、いずれ養子を迎えることになるかもしれないが、妾腹に実子が生まれる望みもないではない。つまり、持病のため虚弱になったとは言え、千田は三河以来、尚武の家であって、もともと鍛練の仕様は、今どきの柔弱者流とは違っているから、子をなさぬ因は、むしろ奥方にあろう。

奥方みをは、生来蒲柳の質で、娘の頃から寝たり起きたり、薬餌に親しむ日常だ。こんな奥方を迎えるについて、親類縁者、また家来共も不同意であったが、よんどころない義理があり、輿入れとなったのが、もう十年前だ。みを様はいま二十八歳、奥深く引込んだきりである。実家は越前松平の一族というから、これは断われなかったろう。
悠造は謹厳、剛直、遊芸も酒色もしりぞけ、書を読むか、刀槍を使い、あるいは畑仕事をする毎日だ。妾のお倉を置いたのは、ただ子の生まれるのに望みをかけたにすぎず、色に溺れたためではないという。
「このお倉殿は、ふびんながら、主人がお手にかけられた。それが芳国のせいじゃぞ」
話の回りくどさに、さっきからの眠気がぶり返していた孫兵衛は、ここで目が覚めた。
お倉は下賤の生まれ、谷中天王寺近辺の下駄屋の娘だったそうだが、美形である上に強壮で、おつむもまずまずだから、露骨に言えば、種つけにはもってこいであった。
ただどうも、やや色欲が過ぎ、悠造をタジタジとさせる上に、言動に締りがない。

宇陀川芳国が、千田家に出入りを始めたのは、呉服の御用をつとめる、浅草の田村屋というのが、芳国えがく役者絵を、お倉へのみやげに持参したことがキッカケらしい。

お倉様は芳国の絵がいたくお気に入りで、ほかにも見たいとの仰せ。田村屋からそのことを伝えられ、芳国は手許の絵をふところに、ホクホク顔でお屋敷へ出向いたものだ。

お買上げ願うほかに、庭の草花、お側の女中の立姿などを軽妙に写し、とうとうお倉様が、わが身も描いてほしいと言いだした。

取入りはうまい芳国で、お部屋の皆さんと心易くなれば、きわどい冗談も言い合うし、おかしな絵も持参して、時ならぬ嬌声が上ることにもなる。

芳国は調子に乗った。例の癖で、お倉様の色香に魅せられ、着物姿もあでやかだが、生まれたままを見たら、男は目がつぶれるほどだろう、絵師冥利に、ぜひ描かせてくれと、相手のうぬぼれ心をくすぐりながら、懇願に及んだ。……これはお世辞ばかりでもない。お倉の体には、下町っ子の張りがあり、これが熟し切って、滴るばかりになっているのを見抜いていた。

そうまで言うならと、そこはお倉も、鏡に映ったわが身に見とれるほうで、寝間着姿、薄衣一枚、肌脱ぎと、描くのを許し、お終いには一糸まとわぬことになった。

むろんそれらの絵は門外不出で、お倉様お買上げの建前だが、芳国が正直に口約束を守るはずもなく、同じようなのを何枚も描いて持っている。こっそり、得意先に小出しに売って

いたが、ひょんなことから、その一枚が流れて、用人鬼塚善之助の手に入った。見ればお倉に生き写しの裸美人で、背景はどうやら、お倉方の湯殿。同じ裸で背中を流している女、手前で湯上りの衣服を持ち、たすき掛け、裾からげでいる女が、お側の女中二人にそっくりだった。

お倉の住いは、屋敷内でも別棟で、表はもちろん、奥方の住いとも隔絶しているから、そこで何が起っているか、だれも知らなかった。殿様の悠造は、月に何度か泊りはするが、お倉にこってりともてなされるだけのことで、他の事は一切ご存じない。鬼塚らが驚倒したのもうなずかれる。

主人悠造も、話を聞いて激怒した。これほどの恥さらしはない。尚武の家に泥を塗った。お倉、芳国は許しておけぬ。そこでお倉と女中を仮借なく縛って庭先に引き据え、厳重に問うたところ、すべてを白状した。

お倉も女中も、罪はみだらな絵を描かせたことだけで、不義はなかったと言い張ったが、果して然るか、大いに疑いがある。

哀れお倉は、その場でお手討ちになり、庭の白砂を朱に染めた。お側の女中二人は命を助けて追放。ところで芳国は、早くも事がバレたと知ったらしく、屋敷に来なくなっていた。しかもお倉たちは、芳国の居所を知らない。

憎いのは芳国である。寵愛浅からぬお倉の命を散らさねばならなかったのは、芳国のため

だ。草の根を分けても探し出せ、引っ捕えて試し斬りにしてくれる、という悠造の厳命だ。

巽屋の名は、芳国の口から洩れたらしい。

「ようわかったであろう、巽屋」

と、鬼塚は血走った目で、孫兵衛をにらんだ。すると佐原が、

「芳国を捕えられねば、われらも腹を切らねばならんのだ。きさまがかくし立てをすれば、この場で斬って捨てる」

またしても刀の鯉口を切ろうとした。

「さようでございましたか。……馬鹿な野郎だ。よくわかりました。この上は、かばい立てはいたしません。わたくしがご案内いたしましょう」

と沈鬱に言ってから、孫兵衛はしばらく目をつぶった。だが、耳はお京が店からこっそり出て行った足音を捕えている。

再び目を開いて、

「芳国は、腕は飛び切りの、いい絵師でございますが、人間が軽はずみに出来上っておりましてね。よくしくじりをやります。絵はすべて、この巽屋が買う約束で、言わば丸抱えでございますが、どうやらこっちにかくして、よそへも出していた様子、怪しからぬ男で」

「巽屋、早速案内してくれ。この間にも芳国は姿をくらますかもしれん」

「どうでございましょうな」

孫兵衛は口許をわずかにゆるめて、

「日盛りでございますから、いま少しお休みなされたほうが」

「なにを悠長な。きさま、ごまかすつもりではあるまいな。早く案内しろ」

「そうお急ぎでは、仕方がございません。ご案内いたしましょうか。表でお待ちください。すぐに支度をして、参りますから」

鬼塚と佐原は店を出た。孫兵衛は着替えを始めた。宇陀川芳国の住いは蛤町。西念寺横町とは目と鼻と言ってもいいので、お京は小走りで、道の半ばほどには行っているだろう。

二

宇陀川芳国の家は、ついさきごろまでは見るかげもなかったが、いまはどうして、すっかり風雅に建て直し、敷地もひろげ、門口には植木をあしらい、ちゃんと打水もしてある。横手の木戸を入れば小庭だ。

あたりはひっそりかんとし、この暑さに、子供たちも遊んでいない。どこかで風鈴の音。勢い付いた二人の侍が、孫兵衛を押しのけるようにして奥へ踏込むと、キャッとなまめかしい悲鳴が上った。南向きの八畳に、いい年増の女が三人、男気のないのをよいことに、脂の乗り盛りの肌を惜し気もなくさらして、思い思いに寝そべっていたところだ。中には腰巻

も外したのがいて、前をおさえてべったり坐った。

女たちはいずれ芳国の画材であろう。脱ぎ散らした衣装の間に、まくわ瓜の食い残し、枝豆の皿や塩せんべいの袋が転がっていようという光景だった。二人は毒気を抜かれて、顔を見合わせる。

「お時さん、芳国はどこへ行ったい？」

と、あとから入った孫兵衛が声を掛けたが、お時とは飯炊き婆ぁ、世話焼きである。髪の黒いのが自慢だが、顔のシワはかくせず、一見人はよさそうだが、時と場合ではどう変るかわからない。

「おや、巽屋の旦那」

とニッコリして、

「この怖いお侍さんたちは……」

「余計なことを聞かずともいい。いないのか？」

「はい。お昼過ぎ、旅支度でお出掛けになりましたよ。急に思い立ったからってね。行先はつい聞き洩らしました」

「おのれ、逃げおったか」

と鬼塚。気付くはずはないのに、と首をかしげたが、佐原がハッと思い当ったふうで、

「巽屋、知らせたな。きさまの女房か女中か知らんが、そやつはわれらが家を出る時にはいなかった。女に申し付けたのであろう」

「ご冗談を。あれはおとなしいばかりの、ちと気の利かぬ女房で、そんな器用な真似はできません。かばい立てはせぬと申したはずで」

鬼塚がいきり立って、行先を知っているだろう、どこへ立ち回るか、わかっているはずだと、女たちへ脅しをかけたが、裸の女共は首を振るばかり、お時も神かけて存じません、聞きませんの一点張りだ。

「殿様方、それはやはり無理でございましょう。芳国は気まぐれで、旅へ出るとなれば、どこへ行くか風まかせというふうで、いつ帰るやら、これも分りかねます。ここは一旦、お引取りになるほうが……」

と、孫兵衛が気の毒そうに言った。鬼塚と佐原は、来た時の元気はどこへやらで、その場へどかりと坐りこんだ。このままでは面目なくて、屋敷へは帰れないという。

「わしは腹を切る。佐原、介錯してくれ」

と言い出した。なにしろ、不取締りの責めは用人が負わねばならぬ、というわけだ。ご用人を死なせて、自分も生きてはいられぬ、と佐原も悲痛な声を出す。

「まずお静まりくださいまし。責めと申せば、わたくしも負わねばなりません。失礼ながら、生きるの死ぬのと、それは早まったお考えではございますまいか」

と孫兵衛。正座して自若としていた。

「なに？　そのほうが芳国を捕えるとでも申すのか」
「いいえ、それは当てになりません。わたくしが芳国に代りまして、お屋敷にお詫びに伺います。……金でカタをつける、とお怒りでもございましょうが、ほかによい思案も浮かびません。いかがでございましょう、お詫びに参上した上、そのお印までに金子を、ということでは」
「金でのう」
鬼塚も佐原も、むずかしい顔で考えこんだ。
「それで殿のお心が解けるかどうか。殺生はなるほど、お望みではないが、万事金の世の中がお嫌いなお方じゃ」
「ご用人、一応伺うのがよいかもしれません。不義密通となれば別のこと、このたびの一件は、申せばお倉殿の不謹慎というだけのものでございます。あるいは……」
と佐原が言うのへ、鬼塚はそれもそうかという顔をした。
「で、巽屋、金子と申すが、いかほどの金高を考えているのじゃ」
「百両では、いかがなもので」
「百両……」
意外に大枚なので驚いたらしい。二人はヒソヒソ声で相談していたが、鬼塚が威儀を正して、

「殿に申しあげる。それにて水に流すと仰せならば、この佐原を使いに出すから、そのほうは百両を持って、同道するがよかろう。羽織袴はもちろんのこと、無作法があってはならんぞ」

その宇陀川芳国は、旅の空どころか、ドブくさい油堀の、水の上にいた。言わずと知れた、舟まんじゅうお新の苫舟の中である。ちと深入りが過ぎたと、屋敷の出入りをやめて、息をひそめていた矢先に、お京の知らせで、青くなって周章狼狽したが、それでも絵筆と紙は忘れず、大回りをして苫舟にたどり着いたものだった。
お新の商売も夏枯れで、空も水もお天道様でギラギラ、舟の中は蒸し暑いどころの騒ぎではなく、動かなくても油汗が流れ落ちる。
だが辛抱も一時のこと、夜にでもなりゃあ帰れるだろうと、根がのんき者の芳国で、早速御免を蒙って下帯一つになったが、折しもお新は、迷いこんだ小僧っ子を相手にしていたので、ちょいと面白い趣向と、絵筆を走らせだした仕事熱心は感心だった。
小僧はまだ十五、六、遊ばせてくれとやってきたが、お新はあきれて、この暑さに、おかしくなったのかと思ったほどだった。
だが小僧は本気で、ブルブル震えながらも、お新に抱きついてきた。生毛のはえた頬っぺたがいかにもういういしく、お新は珍しく味な気になったようだった。

大年増、子供を犯すの図で、お新はしたい放題、させたい放題、勝手のわからぬ小僧を、いいようにおもちゃにし、おっかぶさって鼻息を荒げていた。

「たまげたなあ。よくまあ、精が出るよ」

と、双方汗まみれで水に漬ったようなのを眺めながら筆を走らせる芳国の頭の中で、女はお寺のだいこく、男は寺小姓ということになっている。これでは少しさびしく、横で和尚が、おぼこ娘を膝に乗せていてもいい。

「道草をせずに、いい子で帰りな。おめえはかわいいから、お代はタダだよ」

と、やがて小僧を送り出したお新は、

「フウ、たまらねえ。焦熱地獄だ」

と芳国の目もはばからず、大の字になる。

「芳国、おめえも命は惜しいかえ」

「当り前だ。おれはいい目を見ながら、百まで生きる」

「そういうやつがポックリ行くから、用心しな。……どんなアマだえ、そのお倉は」

「根っから好きな女だろうよなあ。汁っ気があふれ出そうだったぜ。まず熟れ落ちそうな白桃だな。男ほしさに、玉の肌が血の色で染まるやつだ」

「頂戴したのかよ」

「いや、残念ながら三十六計だ。触れなば落ちん風情だったが、そのうちに、向うからにじり寄ってくる気配だから、こいつはいけねえと……」

「男の風上にも置けねえよ、おめえは」

「なんとでも言え。色もいいが、命と引替えは願い下げだ。だが、侍というものは、むごいな、お手討ちとは。惜しいことをしたよ、そうと知っていたら……」

お倉のお手討ちは、お京から知らされた。だからこそ、家来二人が芳国を斬りに来たのだ。

「得も言われない腰付きだったなあ。描いている間にも、じれたようにモゾモゾと……無理もねえよ。あの体で籠の鳥、通ってくる男と言えば殿様だが、これが堅い一方の朴念仁で、下手も下手、いつも置いてけぼりさ。そんなことをこぼしていたぜ、かわいそうに。厭だ厭だ……おれも本当に旅に出ようかな。ほとぼり冷ましにもなり、どこぞで鄙にはまれな娘っ子に会わないとも限らん」

芳国はゴロリ仰向けになり、ぶつぶつとしゃべっていたが、お新はいつか軽いいびきをかきだしている。芳国はそのお新をのぞき込み、臍の下あたりをパチンと指先で弾いてから、腹の上に絞りのゆかたをのせてやった。遠く近くで蟬時雨、それに藪蚊の羽音もまじって、芳国はこんなところで昼寝ができるほど、図太くでき上っていない。

ところへ、踏板を渡る音がして、孫兵衛の声が、

「いるか？」

と言った。

「親玉か。どうも済まねえな。剣呑なやつらは行っちまったんだろうね？」

三

蒸し風呂のような苫舟の中は、さすがの孫兵衛も閉口で、と言って芳国の家も、巽屋も、万一を考えれば不用心、というところで、因速寺境内、卯平の小屋へ芳国を伴うことになった。

陽射しは相変らず強いが、風が少し出て、岸の柳の枝の揺れるのが涼感を誘う。お新も店仕舞で、孫兵衛、芳国のあとに、袂を扇子代りに、前でパタパタやりながら続く。血相変えた侍のことなど、だれの念頭にもないような、のんびりと、また物憂い風景だ。

因速寺裏の卯平の小屋は、やや日陰になっていて、思いのほかに凌ぎいいが、藪蚊が厄介だ。蚊遣りの煙をもうもうと立てて、卯平は寝ていた。酒の匂いがする。

「暑さにめげず、稼いで帰りゃあこのザマだ。卯平、起きやがれ」

とお新は怒鳴ったが、口ほどに怒っているわけでもない。車座になったところで孫兵衛が、

「芳国、一部始終を話しな」

と言った。

「いや、面目ない。だが、こっちも迷惑なんだ」

迷惑というのは、お倉の裸を描きたいと芳国が言ったのは、まずお世辞半分、そんなことができるものかと思っていたが、乗気になったのは、むしろお倉のほうだ。芳国は尻込みしたが、前言の手前断わりもできない。お倉は委細構わず脱いだから、玉の肌を見るや否や、芳国は夢中になってしまった。ありとあらゆる姿態を三十枚ばかり。お終いには女中も裸にして彩りを添えた。お倉をはじめ女共は、あられもない姿を写されるのに、異様な刺激を覚えるらしく、その間中、うっとりと溜息をついたり、身もだえをしたり、芳国に随喜の涙をこぼさせたものだ。

女中でおよしというのがいて、ひそかに芳国に、お倉と寝たければ取り持とう、お倉もその気でいると耳打ちした。さすがに芳国は空恐しくなった。事実二人っきりにされ、あわやという場面もあったのだが、生来の臆病が幸いして、逃げ切った。

「お倉の裸絵を描けとそそのかしたのも、そのおよしじゃねえか？」

と孫兵衛。

「お察しの通りさ。お倉をたきつけもしたようだ。どうも、妙な女だったなあ、いまから考えると」

「おめえははめられたのだぜ」

孫兵衛は苦笑した。

「ゆすりかい、こりゃあ」

とお新。いま吸いつけたたばこの煙を一筋、のどかに吹き出した。

「侍が乗込んで、斬るのなんのというのは、芝居だな」

と、これは卯平。

「その察しはつけていたが、芳国の話ではっきりした。芝居が過ぎるのはよくねえ」

孫兵衛はニヤリとして、

「乗せられたふりで、百両持って行くことにしたが、お倉が死なずにピンピンしていれば、ネタが割れたことになる」

「それで百両やるどころか、二百両がとこふんだくるか。悪くねえや。だが、やせても枯れても二千石の家だ。下手をすりゃあナマスだよ」

とお新が言った通り、割下水の千田の屋敷は、まず虎の穴だろう。手の込んだゆすりをするからには、見破った孫兵衛を、生かして帰そうとはしないはずだ。二千二百石の大身なら、体面上からも、用人の鬼塚以下、四人か五人は二本差しがいるだろうし、中間小者にしても、ただ者ではあるまい。

「そこは工夫だ。百両きれいに渡して、油断をさせるのさ」

と、孫兵衛は成算がありそうだった。

「殿様、お倉に家来共も、みんなグルってわけかい？　おれにはどうも、そうは思えねえんだが」

と、芳国がうなずけないという顔をするのへ、卯平がウフフと笑って、

「そりゃあてめえが甘く出来上っているせいだろうぜ。絵描きなんぞはそんなもんだ」

と言った。だが孫兵衛は聞きとがめて、

「思えねえわけでもあるのか。考えを言ってみねえ」

お倉はあの通り、色好みでだらしのない女だが、気性はむしろさっぱりして、腹黒いとはとても思えない。仰々しくかいどりなんぞを引きずっているが、根は鉄火で明け広げの町女なのだ。また、千田悠造は、お倉の話によると、面白くもない殿様だが、武骨なりに、思いやりはあるらしい。丈夫な男の子を生め生めとばかり言い、寝床での女のあつかいは至極お粗末。事が終れば余情を楽しむことも知らず、涼しい顔でたちまち眠ってしまうそうだ。だからお倉は、殿様のことを、じれったいトンチキだとあきれながら、悪くは思っていない……

「なるほど」

と、孫兵衛の眉宇に、一抹の迷いが見えた。

「お倉が妾に上ったのはいつだ？　その前に妾はいなかったのか？」

「去年の春だと、当人から聞いた。その前にはお春というのがいたそうだ。子ができねえので暇を取ったと。お倉もまだできなかったんだ。殿様に種がないのじゃねえかと言っていた」

「奥方と殿様の仲はどうだ？」
「奥方の話はついぞ出なかった。そうだ、奥方のこととなると、お倉は厭な顔をして、話を逸らしてしまうんだが、ありゃあどういうわけかな。いつも病気で、寝ているんじゃねえかと聞いたら、病気は病気だが、と言って、妙な笑い方をしたっけ。女中のうわさじゃあ、殿様は奥方のところへは全く行かねえらしい……というのは、泊りにだ。仏壇があるからおがみには行くんだが、それも毎日じゃない。奥方とお倉が、これも行き来なしだ」
「おめえの絵を屋敷に持って行ったという田村屋は、信の置ける男かい」
「田村屋は幼な馴染というところで、いいやつさ。屋敷の様子がおかしくって、お倉がいなくなったと知らせてくれたのも、あいつだからな。お倉の父親と、ちょいとした知合いのようだ」
「下駄屋か。その下駄屋はどこだ？」

　要りもしない足駄を一足買ってから、わたしは遠くから来て、笠森様にお詣りしたのだが、以前はつい近くに住んでいて、このお店にも買いに来たことがある、と女房に話しかけているのが、髪結いのお徳で、どこぞの御隠居様のように、上手に化けていた。
「たしか、器量よしの娘さんがいなすったね。もうお片付けなさいましたか」
「いえ、片付いちゃあおりませんが、行儀見習いに、ご奉公にあがっておりましてね」

「おや、それはまあけっこうですが、なかなかお宿下りもありますまい」
「はい。この春に一度戻りましたが、お屋敷勤めは不自由でございますよ」
　女房は四十前後であろうか、まだ色香の失せぬ顔立ちで、お倉の美しさが思われる。
　お徳はその辺であっさり切り上げ、店を出たが、用は足りている。女房はお倉が殺されたことなど、露知らない。店の様子にも、ちかごろ不幸があったと思われるフシはない。お倉は千田の屋敷で生きている見込が強い。殺して親許へ知らせず、ひそかに邸内に埋めるなど、まずあることではない。これこれの不埒な所業があったので成敗したと、大威張りで遺体を渡せば済むことで、親はグウの音も出ないならわしだ。
　……それから二日置いた昼下り、千田家の中小姓、佐原俊作が供を一人連れて、巽屋にやってきた。
「殿がお許しになった。生かしておけぬやつじゃが、絵師風情を殺すのもふびんとの仰せだ。ありがたく思うがいい」
　と、部屋に上った佐原は、立ちながら相変らずの高飛車だったが、孫兵衛は、
「そうですかい」
　と言いさま、佐原の刀を持った左手を、無雑作に蹴上げていた。刀は壁にぶつかって、少し鞘走ったまま、畳の上に落ちる。あっけにとられ、ハッと思った時には、いつ抜いたか、孫兵衛の手には匕首。切先がのど元に触れていて、佐原は後退、壁にへばりつかされた。

供の中間は、客のふりで店先にいた卯平が料理していた。これはうしろからの首絞めである。筋骨たくましく、手足の節くれ立った中間は、まともではなかなか強そうな男だったが、他愛なくグンニャリするのを、卯平がかかえて部屋へほうり出した。

「さんぴん、くどくは言わねえ。こっちに寝返りな。おめえらのたくらみは見通しよ。分け前はくれてやる。厭だと言うなら、三途の川を渡ることになろうぜ。佐原さんとやら。相手が悪かったなあ。どうだ?」

佐原は二、三度コックリをして、

「わ、わかった。きっとそうする」

「そうか。知らぬふりで屋敷に帰ることになるが、そこで裏切りやがると、こっちの命もなくなろうが、てめえらも主人を始め、一蓮托生で運の尽きだと思え。千田の屋敷の不始末を訴え出るやつは無数にいる」

「決して、う、裏切らん」

孫兵衛はそこで、にこやかな絵草紙屋にもどって、

「この暑いのに、お使いご苦労でございましたな。お茶でも一服」

そこへお京が、何事もなかったような顔で出てくると、品のいい手付きでお茶をいれだした。

「おかみさん、わたしにも一杯。へへへ、この中間さんはなかなかしぶとい人で、汗をかきましたよ」

と卯平が言い、続けて独りごとのように、

「この野郎をどうするかな。ブチ殺すのも暑苦しい。お新に任せたほうがいいかな」

佐原俊作が本当に震え上ったのは、実は孫兵衛が匕首を引込めたあとで、孫兵衛、お京、卯平と、役者三人の淡々たるたたずまいに、シンからぞっとさせるものがあるのだ。

「さて佐原様、百両を持ってお供をいたします前に、ご存じのこと一切を、お伺いしておきましょうか。いかがで?」

四

ゆすりについて、千田悠造が何事も知らぬ、というのが意外だった。どうやら先日の鬼塚善之助の説明は嘘ではなかったようで、お倉の不行跡に激怒したのも本当らしい。ところが、そのあとが違う。お倉は手討ちにはなっていない。千田が宿に下げよと命じたのを、奥方みをが、こちらで使うからと引取った。だからお倉は奥方付きの女中のなかにいるはずだ。

千田は宇陀川芳国を斬れとも命じていない。すべては鬼塚のたくらんだことで、お倉付きの女中およしは、鬼塚の手先だ。およしは鬼塚に言われ、お倉と芳国の姦通を計ったが、どちらも思惑ほどは動かず、それではと裸絵一件にもって行ったところ、このほうは両人、す

っかり乗気になってしまった。

あのお湯殿の絵は、偶然鬼塚の手に入ったものではもちろんない。

そこで巽屋への乗込みになるが、金のことも殿様はご存じない。鬼塚は巽屋が裏の商売で小金をもっていることを知ったが、これは芳国がうっかり、およしに口を滑らせたものだ。少くとも五十両、多くて七、八十両にはなると踏んだそうだ。

お倉の前の妾お春……これは子ができぬというので下げられたが、実は密通。相手は米問屋の若旦那で、お忍びで行った芝居茶屋で知り合い、のちには屋敷の中へも引入れたが、すべておよしの計いだった。穏便に済ませてやるからと、米問屋から百両。お春は宿へ下っても、おのれの恥を親にも言うはずがない。

お春の前にはおこうという女。これは病気というので帰されたが、もともと男がいるという傷ものだった。親は口を拭い、千田にも知らぬふりで悠造の妾に入れ、あとでわかったことにして、親許からこれも百両近く出させた。

その前もだれか女が妾に入っていたのだろうが、佐原が鬼塚の口利きで、浪人暮しから千田の徒士にありついたのが古いことではなく、おこう以後のことしか知らない。だが同じように、鬼塚の奸計に踊らされたのが何人もいると思われる。

女たちが妾でいる期間はほぼ一年で、いずれも身ごもらないという。

ゆすった金はみな、鬼塚のふところに入り、同類がおこぼれを頂戴するが、およし、佐原、

それに若党一人、卯平に首を絞められた中間が重立った悪党で、残る家来共も尻尾を振っている。

鬼塚という男は千田の譜代ではなく、奥方みをに付いて屋敷に入ったものだ。千田の用人が病死すると、一切の家政に関する采配を振うようになったから、何事も思いのままであり、奥方に頭の上らぬ悠造は、鬼塚にも遠慮がある。いや、女中にさえもだ。女中がみな、みをの実家から来ている。悠造が奥へ行きたがらないのは、病弱の妻と夫婦のことができぬからというばかりではない。頭の高い女中たちも厭なのだ。

割下水の千田の屋敷。御勝手口から佐原と共に入った孫兵衛は、御広敷の一室で鬼塚と会い、何くわぬ顔でお礼を申し上げ、百両包みを渡したが、実は……と声をひそめたのは、お倉様があのようなことになり、金子のお礼だけでは相済まぬから、一時の間に合わせと言ってはなんだが、女をお世話申したい、というのだった。

「それは殊勝な申し出じゃが、支度金などは出んぞ」

「お礼心でございますからな、そのようなものは、一文も頂きません。お気に入らねば引取りますが、まずご満足のゆく女と存じます」

お京がくしゃみをしているかなと、孫兵衛は笑いを噛み殺した。こんどは虎の穴だから危ないが、そこがまた面白くもある。しくじればお陀仏というところが醍醐味だ。巽屋の古女房が当の女と、鬼塚も佐原も全く気付くまい。

「ではあすにでも、女を連れましてごあいさつに。名はお京と申します。とんだお邪魔を。佐原様、いろいろありがとう存じました。今後ともお願い申します」

と、やんわり、孫兵衛は佐原に釘を刺すことも忘れない。

翌日の七ツ（午後四時）過ぎ。江戸の空には入道雲が湧いていたが、お昼頃にひどい夕立が来て、半刻降ってあがった。あとは曇り勝ち、不安定な天気だった。

お京は、お倉の住んでいた居間に、静かに坐っていた。匂い立つような髪は、お徳が腕にヨリをかけて結い上げたもの。顔は薄化粧、眉もかかないが、かいた以上にクッキリしているからだ。唇にわずかに朱の色。さりげないようで、器量自慢の白塗りが逆立ちしても及ぶまい。着ているものも、渋いねずみ色の縮みで、ところどころに白く散らした小花の模様がなければ、四十過ぎにも合いそうな地味さだが、これがまた、なんとも言えずいい。女中のおよしが、言葉もなく見ほれた。

それに、物怖じがない。住み慣れた部屋にいるような安らかさは、装われたものではなかった。貧乏人の娘はむろんのこと、町方で乳母日傘で育った娘でも、旗本家の後宮ではおずおずするものだ。お京の立居、振舞には、キッパリした品位がある。お倉とはまるで違う……

「あなた様は、もしやお武家の……」

「はい。縁付いたことはございます」

「ああそれで。女のわたくしがうっとりといたします。よいお方に来ていただきました」

と、およしの目の輝きは、本心からそう言っているようだった。

「そうじゃ、お京様、殿様のお渡りは、夜のことでございます。その間に、奥方様にお目通りなさいませ。そのようならわしになっておりますので……いえ、ご心配になることはございません。奥方様はやさしいお方。下世話のように、焼餅などはお焼きになりません、ホホホ。それに、あちらはにぎやかで、退屈もいたしませんよ」

「はい、ではそのように。……あの、お倉様と申されるお方は、そちらに？」

およしはチラと瞳を泳がせるようにしたが、

「はい。それでも、奥方様のおそばというわけには参りません。あなたのお目に触れますかどうか」

お倉はいないのだろうか？　それをごまかすために、あいまいに言ったようでもある。なぜごまかさねばならないのだろう？

奥向きの部屋へ行くには、一旦母屋に戻ってから、いくつもの廊下を渡らなければならない。奥方の居間近くまでくると、案内の女中が待っていて、およしに代って案内する。その女中とおよしは、何か小声で話し合っていたが、およしはいい時分に迎えにくるからと、そこから引返した。

お京は敷居際に坐ってお辞儀をした。

「遠慮はいらぬ。お京とやら、こちらへおいで」

と、奥方らしい声がしたが、丸味のある、どちらかと言えば太い声だった。この声が、ひ弱で病弱なお方の？　と、お京は上目遣い、奥方のほうを盗み見たところ、床の間を背にしたしとねの上で、大柄の女性がジッとこちらを見ている。睨みすくめるような、強い視線である。

「お言葉じゃ。ずっとお進みなさい。遠慮はご無礼になります」

と、そばの女中が命令口調で言った。これはこれは、と事の意外にびっくりしながら、お京はしおらしく、恥らいを見せて進む。

「ホホホ、顔をお上げ。もっと近くに。それでは顔が見えぬわ。固苦しゅうせぬことじゃ」

と奥方が言った。それでは、と這いつくばるのをやめて、お京はシャンとした。ほっと溜息のようなものが洩れたのは、奥方の口からでもあり、左右に付いた女中たちの口からでもあろう。

「よう参ったの。そなたは並みの美しさではない。わたしまで胸が騒ぐようじゃ。そうであろう？」

と奥方が見回すと、女中たちが一斉に顔を見合わせ、うなずき合った。

「殿様のお相手をなさるのが、勿体ないようでございます」

と、ひとりが言うと、笑いのさざめきが起る。奥方は黙って、お京をしげしげと見ていた。

だれに見られてもビクともしないお京が、奥方の視線の前には、たじろいだ。なんとなく不安である。

奥方みをの病弱は嘘だ。柄は大きく、また骨太と見える。やせぎすなのは、脂肪太りよりはるかに強壮なのをうかがわせる。濃い眉、切れ長の鋭い目、高く通った鼻に引き緊った唇は、美女というより、美少年を思わせる。

何ゆえの嘘だろう？　みをが悠造を嫌い、夫婦とは名ばかりで、房事を避けるための嘘だろうか？　いや……わかりそうでわからない。

「お京、今夜はここにお泊り。殿にはこちらから、よろしく言うておく。ゆっくりするのじゃ。話しておくこともあるゆえ」

とみをが言った。否応言わさぬ調子で、断わるわけにもゆかない。

部屋は南向きで、東と南に広縁をめぐらしている。障子を取り払ってみすがかかり、軒端にも陽除けの葦簀が張り出しているので好もしい陰になり、渡ってくる風が涼しい。

「けっこうなお庭でございます。水車が……」

とお京が言った。川水なのか、湧き水なのか、広壮な庭に引き入れられ、幅一間以上のみごとな流れになって、適度に曲りながら庭を横切っている。部屋の真向い、広く、淀みになったところに、どこから運んだものか、古ぼけた水車小屋があり、水車がゆっくり回って水を落している。庭はその水車小屋が中心で、岸辺に野の草が花を着け、柳や椎、赤松などが

枝をさしかけ、いずれも野趣そのままのもので、さながら武蔵野の一角を切り取ってきたようだった。

「お庭が気に入ったかえ？　それではわたしが案内しよう。参るがよい」

奥方はすっと立ってくると、いきなりお京の手を取った。

「足場が悪いゆえ、転んではならぬ。さ、お立ち」

「は、はい」

お京の体に鳥肌が立った。

「どうしやった。怖いかえ？」

奥方は丸い声で笑った。

五

「さすがは二千石、庭に水車を回していやがる」

と言ったのは卯平で、築地塀にしがみ付き、頭だけ出していた。同じ姿勢で孫兵衛が並び、どちらも頬被りだった。屋敷裏の塀外は、幸い空地で草ぼうぼう、向いも武家屋敷の塀で、人目に触れない。また、栗の大木の下にいて、梢越しに庭を見おろしているのだから、内からもまず見えまい。

お京はどうやら、奥方の部屋へ連れて行かれた様子、と、屋敷の回り、塀のあちこちに取りついていた卯平が言うので、この場ののぞきになったのだが、ちょうど奥方みをが、お京の手を引いて、庭へおりるところだった。

「あれが奥方かえ？　ちと話が違うようだ」

「いかさま大違い。なるほどね。こりゃあ、とんでもねえ」

とだけで、孫兵衛は熱心に二人の女を眺めだした。女中は付いていない。

「お倉様というお方は、いまこちらに？」

「そうじゃ。会いたいのかえ？」

「いえ、ただ……」

「ことによると、会うことになるかもしれぬが、そのような成行にはなりとうない」

みをは妙なことを言って、どういうつもりかホホホと笑い、

「それ、そこに石がある。気をつけや」

と、お京の体をグイと抱きとめるようにした。思わず身を避けようとする首筋へ、みをの熱い息がかかった。

「お京、そなたはかわゆいの、これまで会うただれよりも……抱きしめて離しとうない」

「あれ、お戯れを」

そうだったのかと、ここへ来てやっと合点したお京だが、思いもかけぬ勝手違いで、気味悪さ、不安さは、いつもに似合わなかった。

奥方ともつれるようにして歩くお京が、かすかな口笛の音に目を上げて、栗の木の茂みの下、塀の上に卯平、孫兵衛の顔を認めた。

「あの顔は、何かあるぜ。助けがほしいとよ」

「フフフ、それも夜のことだろうて。さすがのお京が閉口しているわ」

「孫兵衛、なんのこった？」

「じきにわかる。ケリがつくのは存外早かった。今夜だ」

塀からおりた孫兵衛は勝手口に取って返し、お京に言い忘れたことがあったが、いま一度会えぬものか、佐原様に伝えてくれと門番に頼んだ。ややあって、あたりを見い見い、迷惑顔で出てきた佐原に、

「お京は奥方のところへ行ったが、どうやらおかしな工合だぜ。おめえ、まだかくしていることがありゃしねえか」

「冗談じゃない。みな話した。かくしてなぞいるものか」

「奥方は病気で、寝たり起きたりどころの騒ぎじゃねえ。ありゃあ丈夫も丈夫、巴御前（ともえごぜん）の口だぜ」

「な、なんだと？　そんなばかな」

「どうやら知らねえらしいな。それはいいとして、お京が今夜どうするか、確かめてくれ。およしって女が知っていよう。部屋に帰るか、向うで泊りか。大事なことだ」

佐原がもたらした返事は、お京は奥泊りというものだ。都合で今夜は泊め置くという言伝（ことづ）てが、奥方から悠造へあったそうだ。

「いいかい、念を押すぜ。今夜ゴタゴタが起るかもしれねえが、あくまでこっちに付きな。裏切っちゃならねえぜ」

「わかっている」

「ちっとは腕が立つのか？」

「ちっとはとは何だ。おれは」

「もういい」

お京は懸命に争っていた。だが、みをの力は強い。引き戻（もど）され、押し倒される。みをはすっかり酔いしれた顔色で、唇を濡（ぬ）らし、お前が好きじゃ、かわいいと口走る言葉もうわずっていた。わたしは男は嫌いじゃ、女が好き、お前が好き、殿になぞ抱かせるものかと、本人の寝間着も乱れほうだいだし、お京がまた次々に剝（は）ぎ取られて、腰のものさえ脱げかかっていた。お京は声を立てず、ただ火のような息。抱きつかれ、胸乳（むなち）も露（あらわ）に反りかえるが、腰を

かかえたみをの腕は磐石のようで、その唇が首筋と言わず胸と言わず、べったりと吸いついてくる。むずがゆさに、手でかばおうとすれば、すかさずみをのまるで男のように強靱な肢が、お京の股間に割って入ろうとする。

「お許し……苦しい……」

と、お京があおのけに倒れ、胸と腹を波打たせると、みをは奇妙な声をあげてのしかかり、身についたものをすべてかなぐり捨てたが、裸身は石膏のように白く堅く、ただ両の乳房のこりこりしたふくらみだけが、女の姿だった。

「おお、おお、美しい。みごとじゃ。ねたましい」

と、みをはとうとうお京の腰のものを手荒く取り去り、ガバと上に伏せた。

「観念しや、お京。……肢をそのように締めてはならぬ。なんでもあげるほどに、何事も好きにさせるほどに。……のう、女同志がどれほどよいものか、すぐにわかる。男など物の数ではない。みなそうであった。お春も、おこうも、お光も……お倉はばかじゃ。そうじゃ、ばかじゃ。あれは憎い。ああ、柔らこうて、暖かい。もそっと、もそっと、お京！」

お京は肢だけは必死に締めている。上で激しくうごめいているみをも疲れたのか、のろのろと身を起して、

「そなたも剛情な。よいわ、どうせそなたはどこへも行けぬ。よいものを見せてあげよう。見ればそなたも、わたしに身を任せる気になろう」

と言いながら手を叩いた。寝間にはただ二人、女中たちは影も形もないようだったが、境の襖がするするとあくと、若い美しい女中が二人。お京が目を見張ったのは、どちらも一糸まとわぬ姿で抱き合い、相手の背や腰をさすり合い、口を吸い合っていたからだった。ひとしきりそうしたあと、少し離れて、交互に別の愛撫をし合う。二人の口からは絶えず溜息と、すすり泣きに似た声が洩れていて、こんどは横になる。一人が上にかぶさり、次第に体を逆にして行く。

いつの間にか、お京はみをの腕の中にある。

「見や。楽しそうに……あれこそ極楽じゃ」

と、耳許でみをがささやく。

二人の女中の愛技は、互いに特殊な器具をあてがったところで頂点に達した。女同志でこれほどの技ができようとは、とお京はあきれている。みをが言うのもまんざら当っていなくはないようだ。とんだところで初物にお目にかかったとつぶやくのは口の中で、

「さあ、もう……お京」

と狂おしく掻き抱くみをに、

「厭、厭でございます。どうぞお許し……」

と、身も世もあらぬもだえ方だ。

「これほど申しても」

「死んでも厭でございます」
「仕方がない。そなた、さきほどたずねておったな。お倉に会わせよう」
急に冷たい声になって、みをが言った。

「殺せ。殺しやがれ、鬼め！」
とののしるお倉の声には、もう力がなかった。どこに閉じこめられていたのか、女中四人にかかえられてきたお倉の髪は凄艶に乱れて、うしろ手に荒縄でくくられ、豊満な体が痛々しく白かった。
「見せしめじゃ。そなたも言うことを聞かぬと、あの通りじゃ。よく見るがいい」
その声も、みをの体も、小刻みな震えを帯びた。お京を羽交い締め同然に、身動きもさせず、密着させた胸から、ドキンドキンと心音も伝わってくる。
水車が景物ばかりではないのを、お京は思い知らされた。
「さあ、くるのじゃ。小屋に行くのじゃ」
とみをは言った。夜の屋敷の奥とは言いながら、真裸の女二人がもつれ合いながら庭へおり、小屋に向う姿は異様な見ものだが、さらに異様、無残なのはお倉だった。……その回りに炬火が点され、ゆらめく明りの中で、彼女は水車の歯の上にくくりつけられた。女中が手を放し、ゆるやかに水車が回り始めると、お倉の体は昇り、上へ行くに従って、水車の丸み

に沿い、次第に反ってくる。苦しさの余り、お倉は足をばたつかせ、必死で体の反りとは反対のほうへはね上げる。両の足が夜空に舞うのだ。……それから、頭から下りになり、腰のところでひっくり返って二つに折れそうになりながら、水底に没するのだ。
やがてまた、グッタリと死んだようなお倉が、水面から出てくる。昇る。そして身を裂かれるような苦痛で意識が戻り、うめく声はもう、人間のものではない。足が宙に踊り、開き、つぼむ。濡れそぼった肌の上に灯影がゆらめいて、むごたらしくも妖しい。それを何度くり返すのか。
お京の口から、長く細い悲鳴が洩れていた。お倉の体が逆様になろうとするところで、お京の抵抗がやみ、まるで正体がなくなったのを、みをは小屋の中の薄べりの上にそっと横たえ、お京の股間をぐっとくつろげてから、静かに顔をその場所へ伏せた。
女中は全部で七人いた。さきほどの裸の二人は、うすいものを羽織っただけのみだらな姿で、小屋の中の色模様を見守っていたし、残る五人は息を詰めて水車の見物だ。……その五人が、ひとしくアッと言ったのは、上ってくるはずのお倉の姿がなかったからで、水車は何も乗せず、身軽に回っている。
折しもお京は、巧みなみをの導きに耐えきれず、かすかなうめきを発しながら、吾にもあらず愛撫を迎え気味に、みをの肩先をムズとつかんだところだった。
「あれ、お倉が」

という声に、みをはむっくり顔をあげた。

川の中から真裸の男が立ち上った。孫兵衛。続いて卯平が、これも下帯一枚、抱き上げているのはお倉だった。二人は水の取入れ口の竹矢来を外して、川底からやってきた。

小屋の中では、いまのいままで死にそうな思いをしていたはずのお京が、涼しい顔でスイと立ち上っていた。それを見つけて、

「お京、おめえも裸か。こいつはいいや。水に入らねえか。暑さ知らずだぜ」

と孫兵衛。卯平がくしゃみをしながら、

「この女はシンが強そうだ。水を吐かせて寝かせりゃあシャンとなる」

みををはじめ、女共は茫然自失であった。取って返して薙刀を取り、曲者に立ち向う意気はだれにもない。金縛りに合ったよう、ただ二、三人が、気違いのように悲鳴を上げる。なにしろ男禁制の国に、あろうことか、裸の男が現われたのだ。

悲鳴を聞きつけ、表から駆けつけたのは、鬼塚善之助、佐原俊作はじめ、おっとり刀の六人ほどだったが、佐原がばかに律義に約束を守り、孫兵衛に走り寄ると、かくし持った孫兵衛愛用の仕込杖を渡した。これは別棟に忍び入っていたお徳が託したもの。お徳はいま、女中およしと渡り合っているはずだった。

「佐原、きさま！」

と鬼塚が目をむいた。

「悪く思うな。負けるほうに付く阿呆はいねえ」

と佐原が言った。孫兵衛は問答無用という形で、無雑作に鬼塚に走り寄った。鬼塚が仰天し、逃げてもおそいと刀を振りかぶり、斬りおろしかけた時には、孫兵衛の細身の刀が、鬼塚の背を貫いていた。一直線である。

「みんなおとなしくしろ。この上の殺生はしねえよ」

と言った時、お徳がようやく顔を見せて、

「およしはのどを突いたよ。いま時の女中にしちゃあ、あっぱれと言っておこうか」

と知らせた。

「わたし共は何も、悪をこらそうというのではございません。金になりゃあよろしゅうございます。正直なもので。ま、口止め料、金高はお志……と申しても、はした金がいけねえのはお分りで？　何しろ二千二百石、浮沈の境でございますからな。何事もなかったことにするのが一等でござんしょうよ。それで丸く納まる。奥方の女狂いを一切ご存じなかったとは、ほめられたことじゃねえ。取替え引替え、お妾が上るのをおかしく思わねえとは、殿様ってものはお気楽に出来上ってるもんで。子ができねえのは中条流をやられるからだ。奥方は一年もすりゃあ女に飽きる。お京は違ったかもしれねえが。お倉さんは死んでも厭と突っぱねたから、あんな目に会った。余計なことかも知れねえが、お倉さんをいま一度妾になすっち

ゃあいかがで」
「そういたそう。いや、一言もないわ。みをを手討ちにいたしたいが、そうもゆかぬ。そちなどは何事も思う通りにできてよいのう。だが孫兵衛とやら。お京はいかんか？」
「はい。ちと差し障りがございましてね」

「おれはどうすればよかろう」
と、佐原俊作が言った。
「知るものか。足の向いたほうへ歩け。善も悪も、世の中はせち辛えぜ」
と卯平。孫兵衛とお京は先へ。肩を並べて、とんと散策の体であった。

第三話　死んだ夜鷹が福の神

一

「卯平さん見な。死んで冷たくなっても、女は女、色気が残ってあわれだぜ」
と、湯灌場買いになった浅吉が、むごい手付きで、仏の衣装を剝ぎ取りながら、言うことだけは殊勝だった。
女はまだ、三十には間があろう。肉置き豊かで、しかも白い。張った胸、腰回り、太腿と、夜目に妖しい陰を作っている。だがむろん、肌は冷たい。
深川因速寺の墓地の片隅に、この仏は埋められる。無縁である。
夜気は湿って、足許からうそ寒さが這い上る。天に十月の新月があった。
仏は地べたの荒むしろの上に、長々と横たわっている。ついそばに、いましがた卯平と浅吉が掘った穴が、暗い口を開いている。
「こんなものじゃあ、一分にもなるめえが」
と、浅吉が仏の着ていたものをかかげるようにして乏しい月明りにすかした。
二つ重ねた長着は縮緬まがい、長襦袢は羽二重だが使い古しで、夜鷹の持ちものと知れな

くても、古着屋に買い叩かれるのは必定だ。
櫛、かんざしの類も、合わせて二百か三百だろう。それでも、その日暮しの身の上には、何もないよりまし、となる。因速寺に入れる湯灌場買いは浅吉だけで、主に無縁仏の衣類を剝いで、卯平に金をよこす。
だが、ろくなもうけにならない時は、卯平は金を取らずに済ませてやる。もともと、卯平の相棒、いや手下という形だった浅吉だ。
「済んだか。早えとこ埋めようぜ。死人でも素っ裸でさらしものは気の毒だ」
と卯平。むしろに包んで、穴にほうり込むだけのことだ。
「だれか来やがるぜ」
と、浅吉が言った。
「いま時分、墓場に用もあるめえが、墓荒しかえ？　酔狂な野郎だ」
と卯平が闇をすかすうちに、ヌッと出てきたのが、どうも風体のよくない、ぼうぼう頭の男だった。
「旦那方、わっちの頼みをぜひ聞いてもらいてえ。少ねえが、礼はするからさ」
という。
「旦那方と呼ばれちゃあ尻こそばゆいおれたちだが、おめえはいってえ何だ？　頼みとは？」

と浅吉。

「へえ。わっちには悪い病いがありやす。死んだ女をやりてえ」

「死んだ女をやりてえと？」

卯平がギョロリと男を見すえた。

「……なるほど、そいつは悪い病いだ。やめておきなよ、若いの」

「旦那、お願えだ。見ぬふりをしておくんなせえ。わっちは生きた女じゃいけねえんだ。と言って、死んだやつにはめったにお目にかかれねえ。このお寺に、夜鷹のいい女が投げ込まれたと聞いたから、夜になるまで待っていたんで」

と言って、男は仏を見おろし、ぶるっと震えた。

「たまらねえや。いい女だ。ねえ、そっちの旦那、聞いてやってくだせえよ。礼はほら、この通りだ」

男がふところをゴソゴソやって、取り出したのが小粒一つ。手のひらの上で鈍く光った。一分金である。

「お二人で分けてくだせえ」

男は片手おがみをしてみせた。

「ほう、おめえは見かけによらねえな」

と卯平。

「卯平さん、いいじゃねえか。こいつは両国の見世物にもねえぜ」

「勝手にしろ。芳国がこの場に居合わせりゃあ、よだれを垂らしたろうが」

と、卯平は吐き出すように言った。

この日の昼過ぎ、ついこの先の北川町の者だというのが五、六人、仏をむしろに包んで運び入れた。身許のわからぬ首くくりで、どうやら夜鷹のようだが、棲み家がどこやら、仲間、身寄りがいるやらいないやら一向不明だから、迷惑でもここが最寄りの寺、お経なんぞは要らねえ、ほうりこんでくれと、乱暴な口上だった。和尚さんに取り次ぐと卯平が言うのも聞かず、逃げるように立ち去った。

川端の松の枝に、荒縄を輪にしたのをかけて、ぶら下っていたそうだ。縁起でもないものにぶら下られては、町内の景気に響く。客商売は上ったりだというので、仕末を急いだのは歴然で、町方の御検屍も済んだというが、同心の検屍などは怪しいもので、いずれ所の親分に金をつかませ、不審はないということにしたのだろう。

……男は帯を解き、下帯を外し、仏の肢を大開きに開いて、そこへうずくまった。何か言いながら、仏の秘所をもてあそび、指をこじ入れたようだった。

いかにも陶酔境に遊んでいるようだ。ようやく、冷たい体内に入ったようで、

「ああ、ひいやりする。たまらねえ」

とつぶやきつつ、身を動かした。まるで生きているように、仏も動いた。

「おい、かくすことはねえ。よく見せろ」
と浅吉が声をかけた。
「わっちはこれでも、はずかしい。勘弁してくれ」
と男が答えた。かんじんのところは、屈みこんだ男の背がかくしている。
思ったより早く、男は離れた。素早く身づくろいをする。
「これで望みを達しやした。今夜の女は忘れられねえ。旦那方、ありがとうござんした」
さっぱりした顔になると、男は二人にペコリと頭を下げ、背を向けた。
仏の肢は開いたままだ。
「生きているようだな。生きて男を相手にしたあとも、ああして空を眺めていたろうな」
と、浅吉がまた、殊勝なことを言った。
「あの野郎を尾けてみるか」
と卯平。
「なんだって？　なぜだ」
「死んだ女としてえ、とは嘘だろうぜ。野郎にそんなオツな好みはねえよ。かんじんのところをかくしやがったろう。ありゃあ、はずかしいのじゃねえ。おっ立っていなかったのだ。真似をしていただけだ」
と言う間にも、卯平は歩きだしている。夜目の利く卯平の視野から、男はまだ消えていな

い。
「そうかえ？　いや、そうとしたところで、一向わからねえぜ。なんのために、そんな真似なんぞを」
「仏の股倉に、何か入れてあった。ありゃあいいかくし所だ。入れたのは仏だろう。入れたまま死んだ。あの野郎は、それを取りに来た。探っていやがったろう。ちょい見には、あそこをなぶっているようだったが、そうじゃねえ。首尾よく取り出したのだ」
「言われてみりゃあ、そうかもしれねえな。だが、そりゃあなんだろう？」
「知るものか。それに、首くくりというのも妙だ」
「どう妙だえ？」
「締め殺されたようだ。首くくりの縄の跡は、顎の下から耳のうしろへ行くはずだが、仏はそうじゃねえ。首から真うしろへ行っている。うしろで縄目は重なるんだ。それに、締めたものは荒縄じゃねえ。ずっと細いものだ」
男は因速寺を出ると、南の八幡橋のほうに向っている。もう夜更けで、人通りはない。軒の低い家々が、黒いだけだ。油断していると見え、男は一度もうしろを振り返らない。
「卯平さん、おめえ、昔は十手でも持ったのかい？」
「フフフ、昔から十手は敵さ」
「殺されたのはわかったが、なんの見当もつかねえ」

「だから、野郎を捕えて吐かせるのが早え」

と言うと、卯平は爪先立ち、小走りになった。走っては止り、走っては止る。ほとんど足音がしないのは、男が気付かないのでもわかる。それにしても卯平はふしぎな男で、普段はじじむさい五十男に見えるが、動きが早くなると、十以上も若返ったようだ。

程よいところで、卯平はパッと走り出す。

ようやく男は追手に気付き、懸命に逃げだしたが、追駆けはわずかの間で、卯平に襟首をつかまれたのが、八幡橋袂を通り過ぎたあたりだった。

「何をしやがる」

と、男が卯平の手を振り放した瞬間、男の足がきれいに払われて、激しい勢いで横倒しになった。

男もさる者で、倒れながら、ふところに呑んだ匕首を抜き出し、構えたが、これも間髪を入れず足蹴にされ、匕首は宙に飛んだ。そこへ、浅吉がようやく追いついた。

「おめえが仏の股倉から抜き取ったものを、おれにくれねえか」

「知らねえ。なんのことかわからねえ」

「そうか。それならご足労だが、もう一度因速寺に戻ってもらおうか。いろいろ、腑に落ちねえことがあってね」

「助けてくれ！」

と、突然男は叫んだ。と、あたりの物陰から、黒い人影がいくつも浮き出し、行手をさえぎられた。

「仲間がいたか」

と苦笑した卯平の動作が、また早かった。男のみぞおちを一蹴り、うーんと倒れると、両袖を探って、丸めた紙切れを取り出した。

「持って逃げろ。お新に渡してくれ」

と浅吉に手渡し、卯平は逃げもせず、ふところ手をして、その場に突立った。浅吉が背を丸くし、転げるように、もと来たほうへ走って行く。

男たちが卯平を囲んできた。

二

こいつは、悪くすりゃあ殺される、と卯平は、男たちに囲まれながら考えている。どんなやつの手下か、派手に凄みはしないが、殺気とでもいうのか、あまり覚えのない、厭な心持がする。

体を探られた。卯平は刃物を持っていない。

「歩け」

とひとりが言った。浅吉は逃げのびたらしいが、彼等は追おうともしない。卯平を責めればいいつもりだろう。

連れ込まれたのは、海辺に近い大島町の一角で、前が堀割、対岸は左右にずっと大木が繁り合ってひろがり、さながら森のようだが、これは大名屋敷だ。

見るからに荒涼とした、寂しい場所で、まともな人家も見当らない。

朽ちかけた山門と、崩れ放題の土塀があって、中に押し込まれると、狐狸の棲み家のような寺があった。廃寺だろう。中から灯りが洩れる。

「おめえは因速寺の墓守だな。それにしちゃあ、目の付けどころがいいぜ」

と、頭目らしい男が言った。本堂裏の、昔は庫裡だった部屋に、卯平は引き据えられていた。うしろ手に縛られ、縄尻を取られて、いいざまだった。

部屋の中は、それほど荒れた様子もないが、これは常々、こいつらが使っているからだろう。

「ただの墓守じゃあなさそうだ。油断をしたな。見破られるとは、露思っていなかった。名はなんという？」

「卯平だ」

と一言。哀れっぽく、御慈悲にすがる芝居も、できないわけではないが、こいつらには通じまい。

その頭目らしい男は、年格好が巽屋孫兵衛によく似ている。孫兵衛より、いくらか肉付きはいいだろうが、精悍である。言葉付きは柔らかい。見くびれない男だった。

「手下のドジで、大事なものを、おめえの相棒にさらわれたのだが、こっちは見ていねえ。なんだったい？」

「丸めた紙切れさ」

「そうか。卯平、何か書いたものだと見当はつけているだろう」

「金のありかだろうな」

頭目はニヤリとした。

「あれを返してくれ。何も言わず、探らずにだ。おめえらにはかかわりのねえこったからな。イザコザは好まねえ。どうだ？」

「もうおそかろうよ。返してもいいが、紙切れに何か書いてありゃあ、だれぞが写し取っているだろう。口封じは利かねえな」

「どうやら、仲間がいるようだな。悪いやつに目をつけられたぜ」

と、頭目は笑った。卯平を取り囲んだ仲間は、無言だ。その中に仏を犯したあの男もいて、こいつは早いとこ、卯平の息の根を止めたいような顔付きだ。

「手を引かねえか、卯平。いや、みんなに引かせねえか？　さもねえと、おめえのみならず、仲間も殺すぜ。コケ脅しを言っているのじゃねえ」

「それほど金になるものかえ？　一口乗せてもらいてえな。そのほうが、おめえたちにも得じゃねえかい？　グルになりゃあ、事は洩れねえ。夜鷹殺しも、闇から闇だぜ」

頭目は、ほう、といった面持ちになった。

「殺したと知っていやがったのか」

「夜鷹が、宝のかくし場所を教えた書付を持っていた。そいつを出させようと、つい責め様が過ぎて、締め殺した。どこを探しても出てこねえ。あわてて首くくりに仕立て、川端の松の枝にぶら下げた。……仏を町のやつらが因速寺に投げ込んだあとで、アッと気がついた。あの夜鷹は、股倉に物をかくす癖でもあったと見える」

「その通りだ。寝た男の金をかすめて、突込んでいたそうだ。さてはと、そいつを取り上げるため、無理な芝居をしたのが仇だったな。そこまで知っていられちゃあ、おめえを生かして帰すわけにはゆかなくなったぜ」

「それなら殺しな。死にたくはねえが、あきらめはいいほうだ。だがおめえたちも、生き延びるわけにはゆくめえ。コケ脅しじゃねえと、さっきおめえは言ったが、おれの言い分も、コケ脅しじゃねえよ」

「大きく出たな。こっちのことは知らねえようだ」

と、頭目は笑った。手下がそれにつれて、遠慮気に笑った。

こちらは因速寺裏手の卯平の小屋で、お新と浅吉が、ひろげた紙切れを前に、思案投げ首だった。

「花咲爺の犬なら、ここ掘れワンワンと、造作もねえが、わけのわからねえ判じ絵は降参だね」

と、お新が弱音を吐いた。古物の角火鉢に炭火がおこって、赤がねの水さしが五徳に乗り、シュンシュン音を立てている。それで燗をした酒を、二人でグイグイやっているのだが、お新はもういい気持で、大肌脱ぎとはゆかないが、むっちりした胸のあたりも桜色になっていた。

シワくちゃの、粗末な紙切れに、ちびた筆でしるされているのは、すべて稚拙な絵のようなもので、なるほど、お新が音を上げるのも、無理はなかった。描いた者は無学で、字を知らなかったのだ。判じ絵にしたのは、意図あってではあるまい。独り合点の絵ほど、厄介なものはない。

「こりゃあ、飯杓子のようだが」

と浅吉。冒頭、斜めにざっと描いてあるのは、形は杓子に似ているが、なんとも得体が知れない。筋が入っていて、ラッキョウのようにも見える。

その次に、足袋らしいものが描いてある。片方で、裏返しになっている。次に木が一本。杉の木のようだが、てっぺんにお日様が出ている図。それから、縦棒が下へひかれ、小さく

描いた家のようなのが、四つ並んでいる。

これはみな縦書きで、字で言えば一行に当る。

第二の頭は、また縦棒。次に斜めに三本の筋。その下に、人間を現わすらしい形が五つ並んでいる。最後に、これだけはうまく描いてあるが、柿の実。

「この三本筋はなんだろうな」

と浅吉が腕をこまねいた。お新は行儀悪く、横坐りの膝にからみついた裾を、パタパタとおっ広げるようにして、

「孫兵衛に任せな。知恵自慢で、解くかもしれねえから。こっちが苦労するには当らねえわな」

と、吐息交りに言った。

「卯平さんはどうしたろう？」

「知るものか。てめえのまいた種だ。いまごろはがんじがらめで、カチカチ山の狸みたように、吊されてでもいようよ」

「やつら、まさか殺しはしめえな」

「あの業つくばりは、なかなか死なねえよ。浅吉、紙を孫兵衛に持って行きな」

「え？　いまからかい？」

「一杯引っかけて、すぐ行きな。裏から抜けるんだよ」

「すると、やつらが」

「おいらを迎えに来そうだね。こうなりゃあ、性根を据えるまでだ。しゃなりしゃなりと、行ってやろうよ」

浅吉が泡をくらって小屋を出た半刻のち、もう深夜だが、例の男たちのうち、二人が風のように因速寺に忍び入り、お新が肘枕でいるところへ乗りこんだ。

「姐さん、ちょいと来てもらおうか」

と、兄貴株らしいのが、妙に静かに言った。

「酒が入って、いい心持のところだ。動きたくはねえが、断わりゃあ、ドスでも突きつけそうな面相だね。行ってやろうが、駕籠はあるかえ？」

「ゴタクはいい。立ちな」

と、いま一人が言った。

「おや。色気のねえ兄さんたちだね。油堀のお新さんも型なしだ」

トロリとした目で二人を見て、

「足が立たねえよ。だれにおぶさろうかねえ。……そっちがいい。いなせで、好きだよ。さあ、手を取って、起しとくれ」

「てえしたアマだぜ」

と、兄貴株が苦笑して、

「よしよし。おめえ、おぶってやれ。いい女が背に乗っているのは、乙なもんだ」
「その兄さんは、話がわかるじゃないか。お新さんをおぶったら、果報だと思いな」
だらりとなったお新は、重いのだ。兄貴の助けで、胸も裾前も乱れ放題のお新を背負った若いのが、思わずよろめいた。
「辛抱しなよ、若いの」
お新はククと笑って、
「おいらの肌のいいのが、じわじわとお前の背なに伝わるだろう。そのうち、苫舟の中で、たっぷりかわいがってやろうさ。そりゃあそうと、うちの宿六は殺しちまったのかい？」
「殺しはしねえ。人質だ。おめえもそうよ」
と兄貴株。
ようやく因速寺を出た。若いのはおとなしくお新をおぶっているが、案外お新がからかったように、背中から毒気を浴びて、腑抜けになったのかもしれない。
「なるほど、しなびたおいぼれ一匹より、汁気たっぷりのおいらも添えて、番いにしたほうが、そりゃあ利き目がある」
お新が運ばれたのは、廃寺ではない。同じ町中だが、新道の尋常な家並の一軒。何屋かわからないが、格子の多い、しもたや風で、そこへ正面から入った。かわいそうに、お新をそれまでおぶっていた若いのは、しゃがみこんで、肩で息をしている。

奥まった一室で、卯平は無事だった。いましめも解かれ、ケロリとしている。
「おめえ、腕の一本もへし折られたか、駿河問いにでも会ったかと思っていたが、気が抜けた」
というのがお新のあいさつで、
「おれは臆病者で、痛められるのは性に合わねえ。何もかもしゃべったぜ。……酒でもくらいやがって、いい気なものだな、お新」
と、これが卯平の返答だった。
廃寺とこの家とは、裏手でつながっているに違いない。

三

「卯平にお新は、かわいい手下だ」
巽屋孫兵衛は、そこで一旦言葉を切り、ニッコリしてから、
「もっとも、あいつらはおれの下風に立つとは思っていなかろうがね」
と言った。西念寺横町の住居。客は奉公人請宿をしている加賀屋友右衛門と名乗ったが、廃寺にいた頭目である。供がひとり、お新をさらって行った二人のうち、兄貴株がその男で、弥一という。

卯平は拷問が怖い余り、意気地なくも、孫兵衛のこと、裏の商売のこと、宇陀川芳国のことまで、べらべらと白状したらしい……というのは、実は、かくすより一切をさらけ出し、一筋縄ではゆかぬ相手と悟らせるのが、むしろ良策と見たからだろう。

従って孫兵衛は、猫をかぶる必要がなかった。いつも通り、愛想のいい絵草紙屋の亭主だが、目の光が違っていた。

「人質に取られたのは弱味だ。元はと言えば、卯平の余計な手出しから起ったことで、それはあやまる。手を引くのに異存はねえ。その代り、二人を無傷で返してくれるだろうね？」

「返してやる。だが巽屋、それだけじゃあ済むめえぜ。子分を痛められた。仕方もねえ野郎だが、胸を蹴られて寝付いたぜ」

「そいつは気の毒なことをしたな。見舞いに、いくらか出せというんだな。出そうよ」

「五十両ではどうだ。高くはあるめえ」

「ははは、そりゃあいけねえ。ケチなゆすりは恥になるぜ、加賀屋」

「ゆすりじゃねえ。間違えちゃあいけねえ。その上で二人を引渡そうじゃねえか」

「……こうしよう。まず二人を、無事で返しな。見舞いの金高は、こっちで決める。二人と引換えに、書付を返す。金をどこにかくしてあろうが、こっちは手を出さねえ。そのほかは、そっちが何を言っても不承知だ」

「強気だな」

と加賀屋友右衛門は当惑そうな笑顔をしたが、そのおとなしいところに、何やら薄気味悪さがある。お京は神妙にお茶を出したあと、向き合った二人の様子を、興ありげに見くらべていた。顔こそ似ていないが、野獣の性をおだやかな外見に包んでいるところ、いい勝負のようだ。

「巽屋、それはおれたちを知らぬから言うことだ。よく聞きな」

加賀屋友右衛門は、押込み強盗の元締だった。加賀屋から出る男女奉公人は、みな加賀屋の息がかかり、奉公先で手引をする。

押込む一味は、粒選りだ。十人ほどいて、押込みに当るのはその半数。ひとりで二人の働きをする凶状持ちばかりだ。普段はあちこちに散らばり、堅気な暮しをしている。

もう一つ、夜鷹を養って稼がせている。その数は三十人に余り、器量のいい若手ばかりだ。一体、夜鷹には自前もあるが、大方は親分というものの支配下にある。稼ぎ場所も、その縄張り内と決まっている。

だが、友右衛門が抱えている夜鷹は、どこでどう稼ごうが、文句をつける者はいない。つまり、親分たちに手を回してある。

こちらの手下がまた、十数人いる。

「そりゃあ結構だね」

と孫兵衛。

「巽屋、卯平に聞いたところじゃあ、おめえの仲間は、卯平のほかは女ばかりで、お新とお徳という女、それに、ここにいなさるかみさん、お京さんというのか。それだけのようじゃねえか。話にもなりやしねえ。空威張りは、身の為にならねえよ」

「まあ、そればかりでもねえ。声を掛けりゃあ集まってくるのもいるがね」

「それにしても、勝負にならねえ。仕事というのが、枕絵を売るだけじゃねえか。女を使い、ばかな野郎をはめる芝居もするそうだが、それもたかが知れている。おとなしく、わずか五十両出せば、それで済ませると言っているんだ」

「お京、どうする？」

と、孫兵衛が聞いた。お京はひっそりと控えていたが、

「蟷螂の斧とやらで、譲ったほうがよさそうですねえ。お新さんたちのこともあるし」

と答えて、友右衛門をチラと見、口許に微かな笑くぼを浮かべた。きょうのお京は、それほどにはやつしていない。ごく当り前のおかみさん風だが、時々男にオヤッと思わせることがある。

友右衛門も何度か、オヤッと思ったようだが、見直すと、もう光彩のようなものは、お京から消えている。

「五十両は無え」

「それはなんとか、こちらにもうけさせてあげては？」

「ふうん。長いものには巻かれろ、か」

この辺は呼吸の合ったやりとりなのだ。

「もうけるとは？」

と、友右衛門は不審顔だった。

「そのうちにわかる。まあ、それならよかろう。手を打とうぜ。おめえをもうけさせ、こっちも分け前をもらうのだ。おれたちは仲良くしたほうがいい。こっちに弱みがありゃあ、そっちにもあるはずだ。さし当っては、夜鷹殺しだが、どうしたわけだね？」

「おめえに話してやる義理はねえが、卯平はおよそ見当をつけたようだから、今後仲良くやるとすりゃあ、打明けてもいい」

おげんという、変り者の夜鷹がいた。十七、八の頃から客を取り、数をこなして稼ぎに稼ぎ、ほかの世渡りは知らなかった。

四十を越して、厚化粧をし、わたしゃ二十五と言っていたが、五十ではさすがに、すがれて、女を煮〆たようになった。

それでも客の袖を引くことをやめず、歩き回りはこたえるから、掘立小屋に住んでひねもす寝そべり、御開帳で見料を取ったり、夜鷹すら買えないようなやつに、二十文、三十文の安売りをしたりした。

楽しみはただ一つ、金を貯めることだった。守銭奴である。あたら宝の持ちぐされと人は

笑うが、守銭奴のひそかな楽しみをだれが知ろう？

あの紙切れを書いたのは、おげんだ。

生きている間は、金貨銀貨を抱きしめるようにして、片時も手放さないが、お迎えがくるとなれば、話は別である。

仲間も寄りつかぬおげんの世話を焼き、気に入られていたのが、殺された夜鷹のお梅だった。

死病に取りつかれたおげんは、貯めた金をお梅に譲ることにした。お礼心というほかに、お梅には金の要ることがあって、役立ててやろうとしたのだ。お梅は親の顔を知らない捨子だが、ある時、上方から来たという客に、京にお前とそっくりの茶屋の仲居がいて、年の頃はこれこれ、二十年前に江戸で、よんどころないわけで幼ない娘と生き別れた、と身上話を聞いたから、それはひょっとして、お前の生みの親じゃないかと言われ、以来、京へのぼっておっかさんを探すのが、お梅の念願になっていた。

客が出任せをならべたとすれば、罪な話で、お梅にはどこか、ぼんやりしたところがあった。

おげんは金のかくし場所を、お梅に嚙んで含めるようにして教えたが、覚えてもすぐ忘れてしまう。仕方なく紙切れに、判じ絵まがいのものを描いて与えたのだ。それさえ持っていれば、忘れても思い出せる。

おげんが死ぬと、お梅が掘立小屋に住んだ。紙切れは後生大事にしまいこんだ。

友右衛門がそのことを知ったのは、配下の夜鷹のうわさ話からである。

おげんが貯めた金の高は、五十両、百両、さては五百両と、うわさはまちまちだが、なにしろ貯めこんでいたのは確かで、それをだれかに譲るとすれば、お梅のほかにないのも確かだった。

おげんが、絵図のようなものを書いて、お梅に渡したらしい、それを見た者もあるという。

そういううわさを、はじめ友右衛門はばかばかしく聞き流していたが、貯めた金は、五百両ではきくまいという者が出た。おげんの貯めっぷりをつぶさに見ていた女で、夜鷹の足をとっくに洗い、加賀屋の近くの芸子屋の飯たき婆ぁになっていたが、根も葉もないことをしゃべる女ではない。そのことは友右衛門がじかに聞いた。

弥一がお梅をたずね、脅しすかして探りを入れたが、どうもお梅は判じ絵の意味がわからなくなっているようだった。

これでは、責めても言うはずがない。狭苦しい小屋の中を何度もあらためたが、書付が見つからない。

お梅は、書付だけは取られまいと、友右衛門の身内がくるたびに、それを股倉の奥にかくしていたのだ。

「巽屋、紙をくれねえか。どうせおめえたちには不要のものだぜ」

「二人と引換えさ。そればっかりは譲らねえぜ」
「書き写したろう？」
「いや。そんなことをするまでもねえ。覚えている。ただ、なんのことだかわからねえ。おめえも苦心するだろうぜ」
孫兵衛は、話は終ったと言うように、かたわらのきせるを取り上げた。

四

門前仲町、料亭「はな村」の二階の一室で、賭場が開かれている。とは言え、八畳の小座敷にすぎず、盆茣蓙もない。壺振りすらいない。
強いて言えば、卯平がその役ということになろうか。
部屋の下座、普通の三倍はありそうな、大きな緋緞子の座ぶとんの上に、しどけなく坐っているのが、萌黄色の長襦袢を着たお新である。袖を通し、前ははらりと重ねただけで、帯はない。
髪結のお徳が腕をふるって、滴るような島田まげに濃目の化粧、口紅も濡れたようで、いつもよりは格段の女っぷりになっていた。
客が六人、そのお新の前で半円を作っていた。友右衛門が選んだ旦那衆で、遊び好き、金は無尽蔵という手合いだ。
その座ぶとんの横に控えた卯平が、いつもと違ったさっぱりした身なり、肌脱ぎになっていて、
「念のため、改めておくんなさい」
と、手近かな客に二つのサイコロを渡した。サイコロも大きい。通常のものの倍ほどだ。
その客は、改めるのもそこそこに、サイコロを返した。卯平は一度、サイコロを高くかかげてから、お新に合図をした。
お新の面上には、ゆるやかな笑み。みずから長襦袢の前をひろげた。真裸がくねっている。
固唾を飲んだ客の目は、お新の肌に吸い寄せられる。
お新は両肢をそろえて客の前に伸ばし、それから膝を立てて行った。と、上半身をグッと反らせながら、両手を腰のうしろについた。膝が離れる。次第に離して行き、開き切ったところで、客の口から一様に、震え気味の溜息が洩れた。
友右衛門、孫兵衛が客のうしろに坐っていた。客がみな腰を立て、押し合うようにしながら、世にもみだらで美しいお新の肌に見入っているので、チラチラとしか見すかせないが、様子は逐一わかる。
「巽屋、うめえことを考えるぜ。おれにもこの真似はできねえ」
と、小声で友右衛門。

「ま、分相応でね」
と、孫兵衛の相槌はへり下っている。
お新はもともと肌が自慢、白くもあって、男の生血を吸って艶やかなのが、座ぶとんの緋色に映えて、得も言われない。
卯平の左手の指が、お新のはずかしいところに触れた。柔らかく押しておいてから、右手が伸びる。象牙のサイコロが二つ、きれいに吸いこまれた。
壺は振れるが、生身の壺は振れない。同じ働きをするのは、卯平の指である。
客はもう、熱に浮かされたようだ。
お新は微かに身もだえを始めた。逃げようとするように腰が動き、反った胸が揺れる。
「張っておくんなさい」
と、卯平が声をかけた。
客が半であれば、胴元は丁という取り決めだ、半が不服な客は、おりて待っている。
この時、六人そろって丁だった。張られた金は合わせて十両。現金のやり取りで、小判がいい音を立てる。
いま一度、ゴソゴソとやって、卯平は手を引いた。
お新は大きく息を吸い込み、腰を浮かした。股間が盛り上る、と見た時、肉の中からサイコロ二つが勢いよく、ポンポンと飛び出し、緋緞子の上に転がってとまった。半が出た。

溜息、笑い声、なんとも形容し難い叫び声。陽気に騒然となったところで、酒が運ばれる。
お新は肢を閉じ、横っちょにくねらせ、前を合わせて休む。
もっともっとと、客の催促はとどまるところを知らなかった。お新はその芸当を重ねるに従ってもだえ様を激しくした。
「どうもお客さん、ごらんの通り、使いものにはならなくなったようで」
と、とうとう卯平が頭を下げた時、お新は座ぶとんの上に突伏し、体を波打たせながら、すすり泣いていた。
……巻き上げた金が、わずかの間に百両足らず。
「やれやれ、孫兵衛はやっぱりむごいことをさせやがる。腰が痛くって仕方がない。こうまで力が要るものとは、お新さんも知らなかったねえ」
と、いまのいまですすり上げて鼻声を出していたお新が、座ぶとんの上に大あぐらだった。
「支度をしな。長居は無用だ」
と、孫兵衛が二人に声をかけ、
「五十両はそっちのもんだ。残りをもらおうか」
と友右衛門に催促した。友右衛門はあきれたような顔で、
「おめえの空威張り癖は、まだ直らねえな。張り合おうというのは健気だが、しつっこいと

厭味になる」

ばかにきつい目付きになると、揚りのうちから小判十枚、投げて寄越した。

「欲をかくもんじゃねえぜ、巽屋。お新の芸を続けりゃあ、十両が何倍にもなる」

「おめえは九十両が幾層倍か。虫がいいな」

と、孫兵衛は面白そうに言った。

「お新も卯平も、こっちが出したんだぜ」

「不承知か？」

いつの間にやら、友右衛門の手下が数人、座敷に入り、孫兵衛らに皮肉な笑顔を向けていた。

「こいつは剣呑だな」

と卯平。

「尻尾を巻くほかはなさそうだねえ、孫兵衛さん」

と、お新が造り声で言い、からからと笑った。

勝負はむろんイカサマで、お新の奥の院に入れる時に、すり替えるのだ。卯平はしろうとだが、幸い、客の目はあらぬところに奪われている。赤児の手をねじるようなものだった。

友右衛門は味を占めた。「はな村」で三度、四度と、世にも奇妙な賭場を開き、そのたびに百両前後の金が入る。

「もうお勤めはおしめえだ、孫兵衛」

と、お新が音を上げて、

「男相手は好きだが、サイコロをひり出すのは厭さ。お京を代りにするかい？　そいつは困る、だろう？　いけ好かないよ、おめえは」

「なに、お京にひと働きさせよう。引込んでいるのは本人が不服だろう」

「お新さんと代ろうよ。趣向はわたしが考えようか」

とお京。いずれ宇陀川芳国が、絵筆を走らせることになるだろう。

「友右衛門はどうする？　こっちは大分、沸え湯を飲まされるぜ」

と卯平が言う。

「ゆっくり料理をすればいい。あいつは出来のいい悪党だが、天狗だ。それが命取りになろうよ」

「友右衛門は、判じ絵を解いたかしらん」

とお京が首をかしげて、

「わたしは半分ほどわかった」

「おや、おいらはさっぱりわからねえ。お京はお頭がいいそうだ」

とお新がふくれた。

まず、一番おしまいの柿の実。これは柿の木と見て間違いなかろう。その根方に、金は埋

まっているのだ。杉の木のようなものと、お日様。お日様が出るのは東。これは、東に杉の木があるというのだろう。三本筋、足袋、杓子のようなものがわからない。小さな家四軒は、あるいは軒を間に通じさせ、四間というのではあるまいか。

人形五つ。これもわからない。

「なるほど、半分ほどだな」

孫兵衛は、あけすけに愛しそうな視線を、お京に向けて、

「そこまでわかりゃあ、人形も解けようじゃないか。ありゃあ人形じゃねえ、人間さ。人間の背丈は、まず五尺となっている」

「五々の二十五で、二丈五尺かえ？　くだらねえ」

と、卯平は渋い顔をした。

「チョッ。子供だましだ。夜鷹め、なぜ尺と間と、両方使いやがったんだ？」

「本来判じ絵じゃねえ、無筆の夜鷹の心覚えだが、悪いやつの手に入った時の用心も、いくらかあったようだな。煙に巻くやつだ」

と孫兵衛。なんとなくほろにがい顔をしたが、哀れな二人の夜鷹のことを思い浮かべたのかもしれない。

「……友右衛門は解いちゃあいねえ。お京と五十歩百歩だろう」

「おめえは解いたのかえ？」

とお新。

「解いた。だが、おめえたちに話すのは、あとにしよう。楽しみは取っておくもんだ」

巽屋の円居。抜けているのは浅吉と、お徳だけだ。

五

お新を出すのを、孫兵衛は断わった。

「本人が厭だという。最初おめえが言った、子分の見舞い五十両、これは何倍にもなって、おめえのふところに入ったはずだな。ここできれいに別れようじゃねえか」

「そんなにつれねえことを言わねえもんだぜ、巽屋」

と、友右衛門はニヤついている。奉公人請宿、加賀屋の一室である。弥一と、もう一人の男が控えて、目を光らせている。

「……あの女を引込めるのは惜しい。わがままを言わせるなよ。甘えな、おめえは」

「駄目だね。おめえとの縁もこれまでだ」

と、孫兵衛の返事はニベもなかった。続けて、

「お新を引かせても、ほかのやり様がないわけでもない。だが、それにも及ぶめえ。おめえはこっちの弱味を捕えて、十分にもうけた。おめえの正体、夜鷹のこと、かくし金のこと、

一切洩らさねえから安心しな。かくし金にも手は出さねえ。……どれ、帰ろうか」
立ち上ったが、無事に帰れるとは思っていない。素直に帰してくれるなら、なにごともなく手を切るつもりだったが。
子分の頭数がふえて、帰れないことになっていた。孫兵衛はまた坐った。
「気が早えな。相談はゆっくりするもんだ。お新はあきらめるとして、ほかのやり様ってやつを聞かせてくれ。知恵者のおめえのこった、また、目をむくようなことを考えているのだろう。乗るぜ」
孫兵衛はちょっと思案するふりをした。
「よかろう。必ず金にはなる。だが加賀屋、こんどのもうけは山分けにしてくれ。半分取られて、我慢するというのよ。承知か？」
友右衛門を見る目が、笑みを含みながら、キラッと光った。
「わかった。承知だ。みんな取られちゃあ、おめえの顔がつぶれようからな」
親分、子分が目まぜをし合い、笑った。
孫兵衛は手段を話した。孫兵衛たちには別段、珍しくないやつだ。役者はお京である。
孫兵衛の機嫌取りか、酒が出た。
「ところで加賀屋、ナゾは解けたかい？」
「いいや」

と、友右衛門は苦い顔をした。
「……餓鬼のいたずらか、たわごとじゃねえか？　真に受けて、しくじったようだ」
「そうかい」
「巽屋、おめえは覚えていると言ったな。なにか判じが……」
「おれにもわからねえよ。本当だ」
孫兵衛は気になる笑顔だった。

数日後の昼下り。卯平が連れ込まれた、廃寺の本堂である。荒れ放題、吹きっさらしだが、舞台にはかっこうというので、破れ目には板を打付け、戸障子もざっと直し、隙間風だけは入らぬようにしてある。境内のあちこちでは子分が立ち番をしている。
本堂はほこりの積った板張り。客は十数人いて、加賀屋が用意した座ぶとんの上に、大きな円を描いて坐っている。
天井は煤とくもの巣だらけで、正面の仏壇は骨組みだけになり、こわれた曲彔や、金襴の切れっぱし、さては欠けた香炉などが転がり、鼠の糞にまみれている有様だった。
まずお京が連れこまれ、客の円陣の真中、板張りの上に坐らされる。お姫様か、町娘かという意表を突いて、世帯やつれの古女房そのままのいで立ちだった。化粧もなしのくすんだ顔に手入れの悪い髪。客には失望の色がある。

お京はおどおどし、おびえている。

これは芝居ではない、と客には話してある。女はさる小商人の女房で、金ほしさから承知した。相手は火消しの若い者だと言ってあるが、実は物乞いだ。正真正銘、橋の下にいるやつだ……

これは本当で、お徳が働いて、できるだけきたならしく、けものめいたやつを探し出し、旨を含めてある。どんなにでも好きなようにしろと。

庫裡から縁伝いに、そいつがのっそりと現われた時、客がざわめいた。全身ぼろをまとい、手先、足先はむき出し、顔は黒々とひげに覆われ、頭は百日かずら。肌赤黒く、異臭が客の鼻を襲う。

お京は震え上った。だが逃げる気力もない。男はおずおずと、お京の前にうずくまった。手が出せないでいる。お京はじりじりと後退する。

「早くしねえか、ばかめ」

と、声が飛んだ。男はおっかなびっくりに、お京の膝に手をかけた。声にならぬ悲鳴を上げて、お京は振り払った。

「おかみさん……」

と、男がダミ声で言い、こんどはお京の肩をむんずとつかんだ。その手首に、お京が嚙みついた。これが、男の怒りと欲情を爆発させたらしい。……あとは、追う男と逃げるお京の

争いだが、これが真剣だった。

男の視界から、客などは消えている。求めるのは獲物だけだ。

並みの見世物でないことを、客はイヤというほど知らされた。追っかけ、もつれ合いは、客さえ巻きこむのだ。何人もが、下敷きになったり、蹴られたりした。

お京は何もかも剝ぎ取られ、それでも懸命に逃げている。男のぼろも落ちた。引っかかれ、嚙みつかれても、男は追う。ぜんそく気でもあるのか、ゼイゼイとあえぐ音がひどくなる。

お京は何度も男の手を振りもぎり、転がった。肌はほこりがくっつき、だんだらになった。客が自分の目を疑ったのは、この頃からで、しなびた古女房のはずが、これほどみごとな体だったのか、とたまげるのだ。生娘の清浄さを見せると思えば、熟れ切った色気を溢れさす。肌の汚れが、反ってその美しさを増し、客に生唾を飲ませる。形のよさは絶品だ。

お京は次第に手向う力を失う。吐く息は切迫し、胸が激しく動き、ほとんどくずおれそうになる。それでも、抱きすくめられると、必死にもがき、イヤイヤをする……

お京が力尽き、板の間に倒れて動かなくなった時、肌は一面の汗で濡れていた。そして胸乳から下腹まで、大きく、急調子に波打っていた。

「か、顔を見なせえ」

と、客の一人が、隣り客にささやいた。この時もまた、客はおのれの目を疑わなければな

らなかった。そこには、くすんだ町女房の顔ではなく、はつらつと、冴え渡った女の顔があった。激しい争いのうちに、輝き出たのである。解けてしまった髪は、艶々と漆黒だ。

物乞いはお京の両脚をかい込み、おのれの腰に引き寄せ、上を向いて黄色の反っ歯をむき出し、キーキーと歓喜の叫びを上げた。

それからのお京のあつかわれ様は、見るも無残だったし、目もくらむような刺激だった。客はうつけたように、声もない。

この日かき集めた金は八十両で、友右衛門はまたも約束を破った。

「身の程を知るがいい、巽屋。この上タテをつきやがると、容赦はしねえぜ」

「そうかい。いくらくれるね？」

「二十両くれてやる。不相応だが、おれの情けだ」

「どうだろうね。判じ絵の絵解きをしてやるが、その代り、きょうの稼ぎを全部寄越すのじゃあ。」

「なにを？　解いたのか」

「とっくに解いている。かくし金はほしがらねえよ。厭なら仕方がねえが、絵解きはてめえがするのだな。おれに無理に口を割らせようとしねえがいい。無駄なこった」

「待ってくれ」

と、友右衛門があわてた。

「ありゃあ杓子じゃねえ。琵琶だ。弁天様の持っているやつだよ」

「それで洲崎か」

友右衛門は、いまいましげに舌打ちした。

洲崎弁財天の裏手である。足袋の絵は裏を見せていて、意味は「裏」である。

孫兵衛はただ一人。杖をついていた。友右衛門の子分は、弥一ほか二人。二人は鍬を持っている。風は強いが、秋晴れだった。

玉垣の外に立って、東に向くと、一本の高い杉が遠くに見える。それに向かって四間ばかり歩いたところで、北を向く。三筋の斜線は川の流れを現わし、川は北にある。北へ二丈五尺でまさしく柿の木がある。実はたわわで、赤く熟れていた。柿の木は付近にいくらもあるが、判じ絵の教える木は、一つしかない。

二人の子分が、落葉の散り敷いた地面を掘り、ようやく目当てのものを掘り当てた。火消し壺が二つ。油紙の蓋を取ると、小判混りの金の山だった。銭はない。言い合わせたように、溜息が洩れた。飯たき婆ぁが言ったとおり、五百両どころか、千両を越えていよう。

「こうなると、いくばくかの礼はほしいね」

と孫兵衛が言った。返事はない。友右衛門以下、すっとそばを離れたのを、彼は知ってい

る。

最初に、背後から襲ってきたのは鍬だった。かいくぐって横に飛ぶと、そこに友右衛門が、脇差を振り上げて立っていた。

「ついでにおれを殺して埋める魂胆はわかっていた。所詮、てめえは汚ねえ小ものだったな。どうした、斬らねえのか？」

その声に誘われず、引けば無事だったろうが、無理をして、のろい気合で振ってきた。孫兵衛の杖が鞘走るのと、横を馳け抜けるのがいっしょで、友右衛門はおそらく、何がどうなったのかわからず、よろよろと前に歩き、掘った穴へ倒れ込んでしまった。

弥一は健気に、匕首で立ち向かってきたが、孫兵衛が例の極細の仕込杖を稲妻のように振り回して目をくらました上、ヤケになって突き上げてくる利き腕を払うと、弥一の肘から先が、匕首を持ったまま宙を飛んだ。

一人は悲鳴を上げながら逃げた。

「てめえは運がいい」

と言いながら、残った一人が三間ほど先を逃げているのへ、無雑作に杖を投げた。それは一回転して、正確にそいつの背に突きささった。

「そこまでせずとも……やはりおれは、むごいか」

孫兵衛はそうつぶやきながら、壺のところへ戻った。しばらく眺めてから、天に向かって

言った。

「夜鷹の姐御、使わせてもらいますぜ。死に金はいけねえ。へへへ」

第四話　夢路（ゆめじ）の果（は）ては地獄（じごく）の図（ず）

一

宇陀川芳国は大荒れであった。場所は本所松井町の女郎屋、杵屋という小店の二階だったが、女郎にふられて荒れだしたのではない。絵筆が動かぬからのことだ。

そもそも杵屋は、なじみの店でもなんでもない。うろうろと深川から本所の色町を歩き回り、杵屋に至ってようやく、派手やかな顔立ちで生きのいい女郎……小いねというのを見つけて画興を催した。

遊びばかりではないと、亭主を呼びつけて旨をふくめ、小いねのほかにいま一人、男役とでもいった陰間めいた女郎を頼み、ご丁寧に、男のなりをさせる凝り様で、部屋も店で最上のを空けさせた。

この頃、芳国は肉も貫禄もたっぷり付いて、いかにも世にもてはやされる絵師という押出しだから、亭主は一も二もなく注文を受入れた。もちろん、心付けを過分にはずんでの話だが。

色のほうもなおざりにはせず、小いねと男役を相手に、芳国は長ったらしく、卑猥きわまる痴態を展開したが、そこはやはり、醒めているところもあって、おのれの姿さえちゃんとにらみ据えている工合で、目が光っていた。

一合戦、二合戦終ると、女ふたりの呆れ顔を尻目に、下帯もない真裸で画帖を広げ、矢立の筆を取り、物に憑かれたように、あれこれ数枚、瞬く間に画きなぐったが、

「いや、面白くねえ」

と、みんな引き破り、余り酒の冷えたのをあおり、それが荒れ始めだった。

芳国には、画けなくなる時期が、ちょいちょいやってくる。日頃居宅にとぐろを巻く女共では、まるきり興が乗らず、変った趣向も一向に生まれぬという仕儀で、そんな時には思い切って目先を変えねば、どうにもならない。

そこで芳国は、絵筆に血を通わせてくれる、新しい女を求めて、血眼でうろつき回るわけだった。

だが、せっかく画いた女も死んでいる、となれば、散じた金の手前もあって、あせらざるを得ない。この上は、小いねと男役に、キリキリ舞いをさせるほかはないので、二人に着物を着せたり脱がせたり、組打ちも、ああしろこうしろと、軽業めいたことも散々させ、果てはけしからぬ男の形の道具を持ち出し、男役にくっつけさせ、気を入れろと叱咤するなど、とうとう二人は音を上げて、部屋を逃げ出してしまった。

苦り切った顔で現われた亭主に、何やかやと難癖をつけ、酒が足りぬ、女をよこせとわめ

いていたが、そのうちにコックリコックリとやりだし、あとは何の覚えもなくなってしまった。

杵屋に上ったのが昼下り、ふと目が覚めると、部屋には行灯が入って、枕元に男が一人いた。

「せっかくお寝みのところを、お起し申して、相済みませんが」

と、男は言う。店の者ではなし、また客でもなさそうな、小ざっぱりした身なりの、四十年輩の男だった。

「すんでのことに、ほうり出されるところでしたよ、旦那。わたしが止めましたがね」

「お前さん、どなただい？」

目をこすりこすり起き上った芳国へ、

「旦那は絵師でいらっしゃる……いえ、お画きになったものを、拝見いたしましてね。てえした、いい絵だ。どうして引き破ったり、塗りつぶしたりなすったんで？」

「いい絵であるものか。いくら画いてもだめさ。なまくらさ。おれはもう、画けないのかもしれねえ」

と、芳国は涙声になった。

「いや、旦那の腕なら画ける。ただ、在りきたりじゃあ、いけねえようですね。どうです、いいところへご案内申しましょうか。腕が鳴るものをお見せしますぜ」

「腕の鳴るもの？　悪いがお前さん、無理だろうよ。これというものは、みんな見て、出るものはあくびばかりさ」

「並みの見世物じゃねえ。殺しの場だ。女をね」

男はニッと笑った。

「殺し……と、芝居かえ？」

「へへへ、欺されたと思って、行って見る気はありませんかえ？　震え上りますぜ」

「まさか、本物の殺しじゃあるまいね？」

「そいつは、なんとも言えませんね。厭なら、そう言っておくんなさい。この場限りの話にしましょうよ」

「……行ってみるか。どうせこのままじゃ、帰れないんだから。ところで、木戸銭が要るだろう？」

男はうなずいて、

「高いが、五両。ははは、そんなにびっくりなさることはねえ。吹っ掛けるのは、それだけの値打物だからでござんしてね。必ずご満足が行きますよ」

その場所は教えられない。だから、行く時にはもう一度眠ってもらいたい。帰りも同様で、ちゃんと駕籠で、おうちまで送る……

芳国は襟許がゾクゾクして、膝頭も震えてきた。なにやら剣呑そうだ。この身に悪いこと

が起るかもしれない。と言って、怖いもの見たさは募る一方だ。

目をつぶって、

「行こう」

と言ってしまった。

男は眠り薬と称するものを、銚子の中の残り酒に入れて、溶かした。それをガブ飲みした芳国は、わずかの間にコロリと眠ってしまった。臆病者の芳国が、毒かもしれぬやつを、ただ飲むわけはない。枕を並べたのは、一匹の猫で、女郎が飼っているやつだろう。男が廊下へ出て、かかえてきたものだ。

……道中は全く夢の中だった。

「旦那、旦那、着きましたぜ」

とゆすり起された芳国の耳に、まず飛び込んだのは、あちこちで啼き交す蛙の声だった。頃は初夏である。

空に三日月が消えかかって、まず真の闇。ざわざわと、木々の梢を風が渡り、微かにこやし臭さが鼻を衝くのは、畑などが近いのだろう。芳国の頭は、まだ本当でなく、男に手を取られ、雲の上でも踏むようにして、一軒家に連れ込まれた。

迎える者は、だれもいなかった。だが、軒には行灯が吊され、格子戸の内へ入ると、左手の廊下らしい方角から、明るい光が洩れている。

履物を脱ぐ前に男が、

「これをかぶりなさるがいい」

と、頭巾らしいものを、すっぽりと芳国の頭にかぶせた。

「ほかにだれかいるのかい？」

「へえ、二、三人」

と、男は答えた。

通された部屋は六畳の、次の間といった造りで、灯はない。少しずつ暗さに慣れてくると、芳国と同じように頭巾をかぶった男が三人、それぞれ離れた場所に、うずくまっているのがわかった。見知らぬ者同士のようだ。

「お好きなところに、お坐んなさい。間もなく始まりますぜ」

と、男はささやいて、座敷のほうを指さすと、廊下へ出て行ってしまった。

座敷と、この次の間との境の襖は取り払ってあるが、その代り、頑丈な木格子が取り付けてある。それに、一面に白い紗のようなものが張ってある。

座敷は灯火で明るい。天井から光の強い行灯がぶら下り、数個所の柱の上部にも、小型の行灯がかけてある。さながら舞台を見るようだが、座敷の様子が、どことなくおぼろげなのは、次の間との境の紗のためだ。

女を殺す場面というが、どんなものにしろ、それは座敷で、この目の前で演じられるのだ

ろう。

芳国は体が震え出しそうになっている。ほかの客も、じっと息をひそめて、座敷に目を据えているのがわかる。

奥のどこかで、何か争うような物音、声がしたと思うと、はっきり、女の押し潰したような悲鳴が上り、同時に、バタバタと足音が……軽いのと重いのと、座敷の方角へ近付いた。

芳国から見て、座敷の右側は壁になり、一個所だけ、木格子のつい向うに、襖の一枚戸がある。それを突き破りそうな勢で、何かがぶつかった。

襖は内側へ倒れ、転げこんだのは、解けかけた帯を引きずった女だった。女は逃げ道を求めているのだろう、木格子めがけて、ぶつかってきた。木格子は小ゆるぎもしない。二度三度、ぶつかったところを、芳国は正面から見た。

無地の紫縮緬の下に、白の下着と長襦袢、その下に薄色の湯文字をつけているのが、すべて肩からずり落ちそうで、裾前はすっかり開いている。甲高の、きれいな素足をしている。

女は大手を広げたかっこうで、木格子にしがみついた。ハッハッと荒い息使いが、芳国の顔にまともにかかるようだ。面長の美しい女だが、目はもう尋常でない。髪は解けて、顔や首筋に乱れかかり、すごい。

女は助けを求めなかった。木格子の外は暗くて、何も見えないのだろう。

重い足音は、男のものだった。飛びこんできたその男は、のっぺりした役者づらで、どこぞの若旦那の、少々年が行った部類と見えないでもないが、砥ぎ澄ましたような九寸五分を手に、顔は笑っていた。

女は振り返った。男は匕首を構えて、迫ってきた。どちらも無言で、吐く息だけが荒い。匕首が小道具とは、芳国は思えなかった。

二

男は匕首を突き出したが、女は身をひるがえした。切先は着物の袖を縫って、格子の木にささった。女は泳ぐようにして逃げようと焦り、その拍子に袖が下着もろとも千切れて取れた。

女はこんどは左側に逃げる。そこは外が廊下で、次の間と同じく障子戸が立っているはずだが、どうやら、開かない細工をしてあるようだった。

男は女の帯を踏んだ。女はクルクルと回って、障子の裾に倒れた。

男はそれほど、女を急追しない。猫が鼠をなぶっている……そういう追っかけっこだ。

男の手がかかるたびに、女の身に付けたものは剝がれる。最後の湯文字は、床柱にしがみついた女から、むしり取られた。

女はそのままうずくまると、男のほうを向いて手を合わせた。女の口からは、泣いている

とも、うめいているともつかぬ声が、絶えず洩れている。

男が飛びかかって、女の髪をつかみ、グッとあお向かせた。女はまだ、手を合わせている。男は笑顔を絶やさず……いきなり右の乳房に匕首を立てた。

女の悲鳴は弱かった。だが必死の力で反りかえり、髪から男の手が離れた。女は丸くなり、信じられないような早さで、右側の戸口まで転がって行った。

男はかなりあわてた様子で、うしろから飛びかかり、四つん這いになっている女の足首をつかんで引き戻した。畳に血の筋がついた。

匕首はこんどは、うつぶせの女の尻を襲った。乳房より深く刺したようで、けものめいた絶叫が、女の口から洩れた。

女はまた、男の手の下から這い出し、よろめきながら立ち上った。尻のほかにも肩、背、腰など、数個所を刺されたらしく。網目のようになった血が、体を彩っている。血はまた太腿から膝あたりまで、流れだしていた。

芳国は尻餅をつき、両手で体を支えていた。気を失ってぶっ倒れるところを、絵師の執念で持ちこたえている、というふうだ。目先はチラつくが、夢ともまぼろしとも思えるような、二度とお目にかかれそうもない「殺し」が眼前だ。見極めずに済むものではない。

客のうちの一人が、とうとう突伏してしまい、すすり泣きでも始めたようだが、芳国は相客をかえりみるどころではない。

女はもう、惰性で逃げている。よろよろと足許も定まらない。前を見せて、正面へくる。右の乳房に傷口がざっくり、血の太い筋は二筋三筋、脇腹から腰へ、下腹へと肌を染めている。

女は再び、木格子に取り付いた。男がうしろから、おっかぶさるようにし、その右肩が激しく動くと、女はウッとうめいてのけぞり、つかんだ格子に爪の音をさせた。どこを刺されたのか、わからない。

ずるずると崩れ落ちようとするのを、男が支えて、横に回り、女の腰を抱くようにして、自分のほうへ向けた。

女のうめき声は、長く細い、弱々しいものになっていて、意識は遠ざかりかけている。肢にはもう力がない。顔は男に向いているが、見ているのではない。……男は女の顔をのぞき込むようにし、白い歯を出して打ち笑みながら、静かにゆっくりと、匕首を繰り出した。それはこんどは、左の乳下をえぐった。さらに首をサッと斬った。白い紗が、霧を吹いたように、赤く染まった。

男は女を放し、女は大きな音を立てて、あおのけに倒れた。ぶざまに広げられた手足が、激しく打ち震えている。

男は突立ったまま、女を見おろしていた。だらりと下げた匕首の先に、赤い滴が一つ。

だが、女はまた動きだした。上体だけ向きを変え、腰から下は引きずって、虫が這うよう

に、中央へ動く。男が数歩歩いて、足先で女の体を、またひっくり返した。……それで女は動かなくなった。

男は着物の裾をからげて帯にはさみ、女の肢をひろげ、その間にうずくまった。瀕死の女を眺める顔が、満足そうに大きく笑み崩れ、匕首を振りかぶった。下腹部を狙っていると見える。

匕首が白い筋を宙に引いた瞬間、女の双手がスッと伸びて、白刃をわしづかみにした。下腹をかばおうとした。……わずかに、それだけの力は残っていたのだ。

芳国は、女のどこかの指が、ポロリとこぼれるのを見たが、そこまでだった。目の前が真暗になってしまった。恐ろしい悲鳴、のどが張り裂けたような絶叫を、微かに聞いたようにも思ったが……

どのくらい気を失なっていたのかわからないが、芳国は同じ次の間に横になっており、上に薄い夜着をかけられていた。

座敷との境には、襖が立っていて、部屋は明るくなっている。案内の男が、ニコニコして坐っていた。

「わたしは……気を失なっていたのか」

「へえ、半刻足らずお寝みで」

「そうか。あんなものを見せられちゃあ……ありゃあお前さん、本物の殺しじゃないか。むごたらしい」

「ははは、そう思ってくださりゃあ、上出来だ。絵は画けそうですかい？」

「画けるとも、画けるとも。あの地獄さながらの様子……無残絵……あれでなくっちゃいけない」

芳国は興奮しだした。

「五両、高くはねえでしょう」

「その通り。五両が十両でも、あんなものをおがめりゃあ安い。持ち合わせはないが、五両は払います。うちまで送ってくれるそうだが、その時に」

「いえ、払ってさえくださりゃあ、いつでもよござんすよ」

「時に、お客が三人いたが、どうしたね？」

「とっくにお帰りになりましたよ」

「あれもやはり、絵師かい？」

「いいえ、ま、いろいろで。身許のせんさくなんぞは、お互によしになすったほうが……」

「そ、そうともそうとも」

芳国はあわててうなずいて、

「あの真最中には、筆を取る暇もなかったんだが、いまなら何から何まで、よく覚えている。

ところが、帰りに眠り薬を盛られると、目が覚めた時には、忘れているかもしれんからの。ここで画いて行きたいが……」

「なに、忘れるようなことはありますまい。なにしろもう、かれこれ四ツ（午後十時）時分、おそうございますからな」

「いや、手間は取らさん。すぐ済むよ。できることなら女を……もう女はいまいね」

「男も女も、とっくに消えました。座敷をご覧になってもいいが、何もかも、跡形もありやしませんよ」

「あれほどの血もかい？」

「拭き取りゃあ、それまでで」

「どうも、芝居とはとても思えないが、まあそれはどうでもいい」

と無情なことを言って、芳国は絵に取りかかった。いつも持ち歩く、巻物のようにした画帖をふところから出し、矢立の墨をたっぷり含ませ、簡単な一筆画きにすぎないが、さすがに絵師で、線という線が生きて、一つの無駄もない。入神の技とまではゆくまいが、何かが乗り移ったようで、みるみる、一連の秘画が、絵巻物さながらに展開する。

男ものぞいていて、心から感心したらしい。

「いやあ、みごとだ。生きているようだね。これで丹念に画き上げ、色を入れりゃあ、高く売れましょうね」

「さほどでもないさ」

と、芳国は上の空で、画帖に余白もなく画き尽すのに、半刻かからなかった。

例によって、薬入りの酒を飲まされる。男は飲まず、相手がないので味気ない。

「ここには、お前さんのほかに、だれもいないのかい？　いったい、どういう家だい？」

「ただの空家でさあ。持主は近くの大地主だが、別に断わりもしていねえんです。使うのは時たま、しかも夜だけですからね。あまり人がいちゃあまずいんで」

「ほかの客も、駕籠で連れてこられたのかい？　わたしのように薬を飲まされて？」

「へえ。使いが行きましてね。使いは家にゃあ入りませんが」

男はその辺のことは、あまり話したがらないようだった。

「お前さん、名はなんと言いなさるんだ。いまさら名乗るのも妙なもんだが、わたしは宇陀川芳国というんだ」

「わたくしは善吉、とでも覚えておくんなさい。芳国さん、この式のものを、またご覧になりたいとお思いで？」

「思うともさ。殺しは見せてもらったから、何か趣向の変った、別のものを……今夜の殺しはあんまり真に迫って、命が縮む思いだったよ」

「それじゃあまた、あの杵屋へお迎えに参りましょう。お厭でしょうが、その時にも眠っていただかなくっちゃならないので。この次のやつも、決してご不満はねえはずで」

宇陀川芳国は、夢の中に迷い込んだ。血みどろで死んだはずの女が、大あぐらになって笑っていた。なんだ、おめえはお新じゃねえか、と声をかけると、お新は紅白だんだらの体を、どさりと芳国に投げかけてきたが、抱きとめて顔を見ると、やはりお新ではない、あの女だ。しかも、肌は氷のように冷たかった。両の乳房から、血があふれ出ている……

「お客さん、お客さん」

と、駕籠かきが芳国の肩をゆすっている。わが家の前だった。あの男はいない。蛤町の路次奥、と男には教えてあった。五両という金を、それほどほしいというのでもなさそうだ。

三

「蛙の声か。蛙の声は、どこへ行ったって聞える」

と言って苦笑したのが、巽屋孫兵衛。このところ、一向姿を見せなかった芳国が、仕上った絵を二十数枚、持ってきた。

……あれからもう一度、芳国は杵屋へ行き、男が迎えて芸者を呼び、一騒ぎやったあと、例の夢の道中で空家に運び込まれたのだ。

場所は前に同じで、舞台はやはり座敷。客が二人、うずくまっていた。

座敷の中央に、木馬が一つ、据えられていた。奉行所にもあるという拷問道具で、馬の背

に当るところが丸くなく、峯になって、鋭く削ぎ立ったような形である。これに囚人をまたがらせ、ゆさぶりをかけると、会陰部が破れて、その痛さが耐え難いというやつだ。

この木馬は、太い四つの脚の基部に、ぜんまいを仕掛けてあるので、前後左右、どうにでも揺れる。塗りも何もない堅木で、馬と言われれば、似ていなくもないという、しろものだ。

それから、前後に槍の穂先のようなものが、突き出していた。前というのは、頭を低くしたかっこうの、馬の首で、後は尻の近くである。乗せられた者が、前に倒れても、うしろに倒れても、穂先が肌を貫ぬこうと、待っている。

連れてこられた女は、前の女とは別人で、ずっと若かった。十七、八という年頃であろう。大柄の太り肉で、はち切れそうな肌なのが、最初から真裸で、その上高手小手にいましめられ、細目の麻縄が肉に食い込み、双の乳房が異様に飛び出して見えた。

顔立ちはまだ、あどけなさを残している。元気な時には、いい血色をしていたのだろうが、いまは顔色といい、体といい、白蠟のようだった。

女は尻込みをし、必死に足を突張っているので、男手は二人だった。かかえ上げなければ、運べない。女は足をバタつかせ、もがいていた。

木馬を目の前にすると、女はいよいよ暴れだした。声をすっかり枯らしてしまっているのか、何かしきりに哀願しているのが、芳国にはよく聞えない。

男の一人は、前回の殺しをやった優男で、いま一人ははじめて見る男だった。かくべつ、

悪事に慣れたやつとも見えず、お店者と言っても通りそうだった。

女は二人がかりで木馬に乗せられるや否や、ギャアッと叫んで気絶した。優男が、作りつけてある鐙代りの板に、女の両膝と足首とを縛りつけ、その間、もう一人の男は女の腰を支えて、少し浮かせてやっていた。……これで女は、木馬にまたがったまま、動けない。

前後に体を倒すことはできるが、そこには槍の穂先が待っている。

「いやもう、そのむごいこと。こうして話していても、震えが来そうで」

と、芳国が歯でもガチガチと鳴らしそうな様子で言って、

「いや、それより百聞は一見に如かずだ。絵を見てもらったほうがいい」

木馬拷問の図が八枚ばかり。木馬の背で悶え狂う女の凄絶な有様が、迫真だった。女はそれと知りながら、股間のあまりの痛さに、前に倒れ、うしろに倒れ、胸を刺され、背を刺されている。それも二度や三度ではないのが、克明に画かれた傷口からわかる。

一思いに、穂先に刺し貫ぬかれて死ぬほうが楽だろうが、そこまではゆかず、女にも覚悟がない。体を起すほかはない。股間の激痛は、いくらか麻痺気味に、薄らいでもいる。

ところが、頃合いを見て、優男が木馬を揺り動かす。ぜんまい仕掛けでやられた日には、たまったものではない。

芳国の絵の一枚は、女の断末魔だった。うしろへ倒れて、背中は串刺し、木馬の背の上ではだけられた股間は血染めになり、木馬のその個所も、塗ったように赤いのだ。縄目の間の、

天井を向いた、尖った乳首が無残だ。

あの男は、こんどは殺しではないと言ったが、やはり殺しだった。なぶり殺しだ。

「だが、いい絵ができたな、芳国。ちと、売るのが危なかろうが、金になれば、ちょいとしたものさ。……その野郎、絵をわけてくれとは言わなかったのか？」

「言わないね。最初の殺しの場が五両、木馬が値上げをしやがって七両。そいつは取ったが、絵をくれだの、売ってくれだのとは言わない。わたしの絵を安く踏まれたかな。自慢じゃないが、これに持参の絵、一枚にならして三両にはなるぜ。目のないやつらは仕方がない」

「おめえのほかに、見物が二、三人は、いかにも少ねえな、芳国。向うさん、金はあんまりほしくねえようじゃねえかい？」

店へ出て、子供の買物の相手をしていたお京が、奥の間に戻って坐ったのへ、孫兵衛は絵を渡した。

孫兵衛はいたずら心で、お京がどんな顔になるか、うかがっていたのだが、口をムッと結んで、熱心に見入る無心の表情だけだ。目をそむけもしなければ、気はずかしげな色気を漂わせもしない。

「魂が入って、いい絵だこと。わたしもゾクッとするようだ」

と、さらりと言ってのけた。

「なにしろ正真正銘、殺しだ。なあ芳国」

「さよう。本物だ」
と答えてから、芳国は膝を叩いて、ゲラゲラと笑い出した。
「……と、わたしだけじゃない、だれしも思うだろうじゃないか。まんまと欺されたのさ。聞いても言葉を濁すから、てっきりだと……」
善吉が蛤町の芳国の家へ、金を取りに来た。十二両、耳をそろえて出したあと、さらに次のを見たいのは山々だが、もうやめにしておこうと言うと、
「ははは、旦那は恐れていなさいますね。そうじゃなかろうかと思って」
と、ふところから出した紙包みの中味が、指だった。最初の女が、断末魔に匕首を握った時、切れて落ちたやつらしい。ヒャッとのけぞる芳国に、
「造りものでさあ。よくごらんなさい」
それは精巧に造られた粘土細工だった。斜めの切り口、血まみれのところなど、造りものとわかっても、気味が悪いくらいだ。
「だが、あの傷口は？　血は？」
「その辺は、人様が真似のできない工夫だから、詳しくは明かせませんがね。匕首に仕掛けがあるんです。それに、血はどんどん流れなくちゃいけねえ。肌に赤いのを塗りたくっただけじゃあ、真に迫った味は出ねえから、そこにもカラクリはあります。じかに見りゃあバレるから……」

「そこで紗を張ったのかい」
と、芳国はうなった。
「だが、木馬は？　どこに仕掛けがあったんだい？」
「なんでもねえ。女の股倉に、外からは見えねえように、物を当てておきゃあいいんです。木馬にまたがっても、痛くはねえ。胸と背なの、槍の穂先が当るところには、肌に堅えものを貼りつけておく。これも、幕でぼかしてあるから、見破られることはねえんです」
「ふうん、そんなものかな」
芳国は半信半疑、いささか興醒めの体で、
「女が生きて出てくりゃあいいんだがね」
「それが旦那」
突き殺された女、木馬の女、二人とも役をおりてしまったという。芝居者だが、あんなひどい役はしつけぬし、ひどく疲れる上に、まかり間違えば、大怪我をする。礼金はたっぷりだが、お断わりだと、逃げられた。
「だから、旦那にお会わせはできませんがね。それで困っているんで。これって女は、なかなかいるもんじゃありません。ひょっとして旦那は、ご存じじゃありませんかねえ、うってつけって女を。旦那なら目は確かだ」
そんなわけなら、実は……と、口まで出かかったのを、芳国はグッとおさえた。めったな

ことはしゃべれない。

心掛けておこう、と芳国は言った。では、またご縁がありましたら、と善吉は帰ったが、なんとなくアッサリした引き様で、女のことをよろしくとも頼まず、絵を見たいの、買いたいのとも言わなかった。

孫兵衛がいま一度、ゆっくりと絵を見はじめた。にらみ据えた目が、ちょっと気になるほどのきつさだったが、

「芳国、見たまんまか。作ったところはあるまいな？」

「いや、作るものか。作りゃあ台無しになる」

「そうか。……お京、どう見るね？」

「どうって」

お京は、木格子の向こうに、男が女を抱き寄せた形での、異様な場面の絵を取り上げ、ほのかな笑みを口辺に浮かばせながら、

「これなどは、本当のようですねえ」

孫兵衛はうなずいて、

「やっぱり実の殺しだ、芳国」

「へっ？」

「おめえの絵筆は正直だ。ごまかしは利かねえよ。もうちっと、自分の目を信じるがいい。絵師だろう、おめえは？　殺しと見たら、殺しと思うがいい。善吉って野郎は、ごまかしにやってきたのだ」

芳国は青くなって、口をパクパクやりだした。

「おめえを引きずりこんだのはな、金がほしいからでも、絵を引き取りたいからでもない。芝居と思い込むやつがほしかったからだろう。見物人もちゃんといたとな。まかり間違った時に、おめえが証人になる。それに、おめえも見物人の数に入る。二人に三人じゃあ少なすぎる。おめえが一人加わりゃあ、それだけでも大分違う。善吉はおめえのようなのを、あと何人か連れて行きたかったのかもしれねえが、おいそれと、客にしてよさそうなのはいねえ。たまたま杵屋で、おめえの狂い様を見たから、これならと誘ったのさ」

「わからねえ。それじゃあ、ほかの見物人は……」

「そこだがな。匂わねえか、お京」

「お金の匂いに、血の匂い……鼻の利く旦那だこと」

と、お京は言った。

四

宇陀川芳国は、言わばわたくしの抱え絵師で……と、間柄の詳細を語り終った巽屋孫兵衛

は、芳国の絵の出来のいいのを数枚、善吉に手渡した。
「ほう、枕絵で……面白い趣向ばかりでございますな。まことに、ドキリとするほどみごとで、また美しい」
「だが善吉さんとやら、それもこれも、こんど芳国が見せていただいて、絵にしたやつにくらべたら、色を失ないます。趣向と申しても、もう種切れで、新しいのは思い浮かばず、わたしも芳国も、実は思案投げ首でいましたので。……ところが、あの殺し、木馬の責め絵で、息を吹き返しました」
孫兵衛は一息ついて、
「そこでお願いだが、次に見せていただく時には、この芳国と、わたしもお連れ願いたいんで。是非とも見たい……」
「へえ。そりゃあお安いことですが、芳国さんにもお話しいたしました通り」
「聞きました。いや、お前さんにお会いしたのは、そのこともあったので、女がいないそうで……ところが、よく知った女がおります」
「知ったどころじゃない。旦那のレコだ」
と、芳国がまぜっ返すように言った。
「こちらの旦那の？　それをまた、どうして」
と、善吉がいぶかるのへ、

「本人をお見せするのが一番だろうが、女にはほれないわたしが、魂を奪われた女だ。くだくだしく言うこともありますまい。また、そんな役なら金を出してもという、好きな女で、芳国の絵にも大分なっております」
芳国が、
「お京さんなら、右に出る者はないよ。何度画いても、画き足りないくらいだが、旦那が惜しんで、画かせてくれなくなっていた。こんど旦那がその気になってくれたのは、願ったり適ったりでね。商売気が出たと見える、フフフ」
「ははあ、そういうお方なら」
と、善吉は言ったが、どこやら不安気に、
「いろいろ、差し障りといったものは、ありますまいね？」
「そりゃあ御安心を。女も心得ていますよ。それに、わたしが世話をしている女だ。ソツはありません」
それではお願いいたします、と善吉は頭を下げた。
「ところで善吉さん、次の趣向はどんなものだえ？　もう決まっているのだろう」
と芳国。
「へえ。だが、言わぬが花じゃありませんかね？」
「言わぬが花もいいが、わたしはおかげで本当の殺しと思い、命が縮まったぜ。……そうと

話がついたところで、わたしは用を思い出した。ご免蒙って、お先に帰らせてもらいますよ」

場所は杵屋の小座敷で、女っ気はない。芳国が抜けて、孫兵衛と善吉は差し向いになった。得体の知れぬ男だな、と孫兵衛は善吉を見ているが、得体の知れぬ、ということは取りも直さず、盗みやたかり、追剝ぎ押込みのたぐいではないのを物語っているわけだ。悪業一筋ではなく、表向、堅気だ。

「善吉さん、わたしがいま話したお京を、使う気は、実はないのだろう」

と言って、孫兵衛は寒気のするような笑顔を見せた。

「えっ？　そりゃあまた」

「わかっているんだ。改めて、お京を使ってくれと言っている。使ってくれとは、殺してくれってことだよ、善吉さん」

善吉はあわてはしなかった。暗い瞳を、ジッと孫兵衛に向けてきた。

「あの芳国はおめでたいやつで、何も知りはしない。あくまで芝居と思っているはずだ。また、そう思わせなくっちゃいけない。お前さん方のためにも、わたしのためにも、証人になってくれる男だ」

「ほれた女を、なぜ殺したいんです？」

「なに、在りきたりの、間男されでね。はずかしくって、人にも言えたものじゃないんだが、

こっちが注ぎこんだ金は、右から左だった。その何食わぬ顔が憎くてね。旦那に命掛けでほれていますと、よくもこれまで欺していやがった。並みの殺しでは、気がおさまらないから、お願い申すんだ。思い切りむごたらしく、一寸刻みにでもしてもらいたい。そいつを心ゆくまで、見物させてもらおうって肚ですよ」

「旦那は手を下さず？」

「へへへ、女のために身を滅ぼしたくはないからね。金はお望み通り、出します」

「あれが殺しだと、どうして知りなすった？」

「絵さ、善吉さん。殺しと、まず見た芳国の目に狂いはないはずだ。見世物にしちゃあ、見物が少なすぎる。金もうけじゃなさそうだ。……芳国が同席した見物人は、わたしと同様、殺しを頼んだ者で、その後病み付きになったと見たが、違ったかい？　こりゃあ、だれぞの道楽だな。おそろしい道楽もあったもんだが。それに、まだ気付いたことはある。人を使っているね。駕籠で客を連れてくる役は、お前さんのほかに、三人はいたろう。また、裏方もいたはずだ。総勢、まず六、七人。お前さんが軍師で、あるじは女を殺したお方さ。女をいたぶり殺すのが唯一の楽しみで、それも芝居もどきに、人に見てもらいたい。そこで、女を殺したいが、手を下したくはねえという者を探し出す段取りだ。世の中には、そんなのが随分といるようだねえ。ははは、わたしはそこまで察しているつもりだ」

「わかりました。どうも、悪い人に当ったようだ」

と善吉は苦笑した。なかなか負けてはいない面魂だった。

「巽屋さん、断わったら、わたしを殺す気ですかい？　どうでも引受けねばならねえようだ。よござんす。お前さんもわたしも、人に知られたくない弱味は同じだからね。……だが、お京さんとやらを殺すのはいい。そのあと、どうなります？　消えちまっちゃあ、あのおめでたい絵画きさんが怪しむでしょう」

「芳国とは縁を切るつもりですよ。画かせたいものは、あらかた画かせてしまった。手切れの金でもくれてやって、わたしは店を畳んで引越します。お京とも、その後切れた、どこにいるかわからないと……ばったり出会いでもしたら、言えばいい。殺したすぐあとは、芳国を先に帰す。芳国はそれから十日二十日、夢中で絵と取組んでいるはずだから、お京に会うことはない。そのうち、店に顔を出したら、親許に行ったとでも、湯治にやったとでも、なんとかごまかし様がありましょう」

「そこまで行き届いているなら、こちらが取越苦労をせずとも済みます。ますます、おっかない人だ」

「場所はやはり、例の一軒家で？」

「あれはやめました。ちょいちょい変えないと、危のうございますから。お前さんなら、何もかも打ち割ってよさそうだ。眠り薬もいりますまい」

その時は、巽屋に迎えを出す、と善吉は言った。

「聞き届けてもらって、ありがとう。こいつは少々だが」

と、孫兵衛は用意の紙包みを出し、善吉の前に押しやった。

「困りましたな。そんなご斟酌には及ばないんだが……おや、こりゃあお前さん」

「なあに、心ばかりで、五両あります」

孫兵衛は善吉の目許、口許を見ていた。迷惑そうでもないが、と言って、思いがけず、五両の金を手にした喜色もない。そのくらいの金には、ビクともしない男らしかった。

それから十日ばかり。西念寺横町の巽屋を訪れたのが善吉で、商家の番頭という身なりだった。応対にお京が出た。

「おかみさんで？」

「はい。何をさしあげましょう」

「その……枕絵をね」

「おや、そんなもの、ありやしませんよ。お門違いでしょう」

「いや、あやまった。これは冗談。孫兵衛さんにちょいと用がありましてね」

お京がプンとして、

「お前さん！」

と、つっけんどんな声を出したまま、奥へ行ってしまった。入れ代りに、孫兵衛が出た。

「やかましそうなおかみさんだね、へへへ」
と善吉が笑って、
「……あれじゃあお前さんも、息抜きがほしいはずだ」
「痛み入るね。で？」
「あす、九ツ（正午）に駕籠を……芳国さんにも出しますが、例の女の人は、よござんしょうね」
「お京は芳国の家へやって待たせましょう。そっちへ駕籠を二つ。お京はいいが、芳国はやはり、眠らせたほうがよかろうね」
「目かくしでもしてもらいましょう。お京さんは、少し先に……」
「先に、とは？」
「へへへ、用意にちと、暇がかかりましてね」
孫兵衛がふと、顔を曇らせた。

五

「あの野郎も、悪党にしちゃあ目が利かねえぜ。お京に面と向かいながら、わからねえ」
「目が節穴と言うより、お京の化け様がみごとさ。それにしても孫兵衛、図に乗りやがって、まかり違えば、お京はお陀仏だ。危ない橋を渡るにも、程があらあね」
「お京を先に、と言われて、孫兵衛はギョッとしたじゃねえか。よしゃあいいのに」
「そこを、命知らずでやっつけるのが、おいらの身上だとさ。板子一枚、下は地獄と言うが、こっちも地獄の閻魔様とはいつも向い合い。しくじって浮世の板を踏み外した時にゃあ、どっかり尻をまくって、おなじみが参りましたと、ごあいさつも乙なものだ」
「どこへ行きやがる。じきに蔵前だが……おや、曲ったぜ」
「まさか、札差の旦那じゃあるめえね、御本尊は。そうなりゃあ面白いが、そいつも大胆だねえ」
孫兵衛の駕籠を見えがくれに尾けて、両国橋、柳橋を渡り、旅籠町から西へ、浅草御門の筋へ出たのが、卯平とお新で、どちらも薄汚れた巡礼の造り、少々細工のある杖をついているのが、万一の用意だった。
鳥越橋を渡ってすぐ、駕籠は左に曲って消えた。正しく蔵前だ。
危うく駕籠を見失なうところだったが、なんとか見当はついた。鈴を鳴らし鳴らし、うかがい見たところ、駕籠はすでに孫兵衛をおろして、先を歩いている。脚は軽そうだ。
細い川があり、小橋がかかり、渡ったところに木戸がある。丈高い板塀が、川に沿ってずっと続いている。小橋も木戸も、先にいくつもあるが、孫兵衛は手前のを渡ったらしい。というのは、橋手前の小道に、目じるしの楊枝が一本、落ちていたからだ。

あたりは意外に物さびしい。家がみな、裏っ側を見せている。川岸だけに、木や草むらもある。

「南無大師遍照金剛……あの木戸は入れめえな」

「塀も高くって、越せないね」

「おめえが急病人になるか。番人なんぞはどうだ？」

「見えないよ。どれ、一回りしようか、卯平。まだまだ、乗込む段取りじゃねえ」

「御報謝を稼ぐか。貰いが少ねえ。にわか巡礼はあんまり哀れには見えねえとよ」

「減らず口はよしな。……あの家は札差に決まった。表の店はどこだか、なにしろ奥に長い屋敷さね」

「おそい……居ても立ってもいられないよ」

と、宇陀川芳国は泣き出しそうな声を出した。

「よく落着いていられるね、旦那。こうしているうちにも、お京さんがどんな目に会っているか……」

「ジタバタするんじゃねえよ。声が高え。なるようにしかならねえと思いな」

孫兵衛は平然と、微笑さえ浮かべているが、結んだ口許は堅い。木戸から入って、庭を突切り、小部屋に案内された。芳国が先着で、つくねんとしていた。しばらく待ってくれと、

善吉が姿を消した。そのままだ。一刻はとっくに経っている。その間、見知らぬ奉公人らしいのが入って、茶を出した。

案内されたのは二人だけか、それとも、どこぞに客がいるのか、それもわからない。ひっそりして、人声も物音も聞えない。

「どこで見せるつもりだろうね」

と、また芳国がささやいた。

「あの見当じゃねえか？」

部屋から、裏庭がよく見渡せる。ずいぶん広く、左手、裏の塀ぎわに、倉が建っている。その手前に、植木に厚く囲まれた建物が見える。離れ座敷や隠居所のような、明けっ広げの造りではなさそうで、倉にしては平家建の形が妙だ。物置には大きすぎる。それに、壁ばかりと言ってもいい。

「いまのいま、どんな目に会っているんだろう。かわいそうに」

心からそう思っているのか、かわいそうなところを見たいのが本音か、芳国の震え声とギラついた目の色がそぐわない。

「うるせえと言ってるんだ」

珍らしく孫兵衛が、むき出しに怒った。

「どうもお待たせを。用意ができましたぜ」

と、善吉が外の沓脱ぎのところへ来て、声をかけた。頭巾を二つ持っていて、おりてきた二人に渡した。

やはり、行先は奇妙な家である。そこへ行くのに、一旦木戸口まで引返し、倉のうしろの狭い空地を通って大回りをし、出たところに、目立たぬ入口があった。途中、孫兵衛がくしゃみを二つした。むろん、いよいよだぞと、塀の向うの二人に聞かせるためだ。

「この家は倉ですかい」

と孫兵衛が聞くと、

「表から入りゃあ、倉です」

と、善吉は妙なことを言ったが、中に踏み込んでからわかった。石段があって、床の下へおりている。地下の隠し部屋である。

石段をおりる時から、孫兵衛は微かな、異様な音を耳にしていた。小川のせせらぎに似て非な、ピチャピチャ、タプタプという音である。

孫兵衛も芳国も、頭巾をかぶっている。

その部屋は十二畳ほどもあろうか。地下だが、どこからか光が入って、夕暮時ほどの明るさになっている。檜の板敷きだ。壁はすべて、漆喰塗りである。……その奥の壁沿いに、檻のようなものがあった。高さ三尺、間口奥行各六尺くらいのものだ。異様な音は、そこから聞える。檻の右、やはり壁沿いに、なんのためか、木製の水槽がある。生簀とも見える。大

きさは、寝棺を一回り大きくしたくらいだ。

その前に、みごとな大俎板が据えてある。人間を乗せて、ちょうどという大きさだった。芳国がそれを指さして、ガタガタ震えだした。

しかし孫兵衛の目は、檻に注がれている。その暗い内部で、チラチラするのは、お京の素肌に違いなかったのだ。

やはり、他の客はいた。頭巾をかぶったのが三人、こちらに背を向けて檻の手前に坐り、身動きもせずに、中をのぞき込んでいるようだった。

「あれがお京かい？」

と、孫兵衛は、しわがれた声で善吉に聞いた。善吉はうなずいて、

「よくご覧なさい。気が晴れましょう」

と言った。孫兵衛は、あわてて画帖を取り出そうとする芳国の手をおさえ、

「いまはよしにしな」

と笑った。

檻に近付くに従って、酒の匂いと、何か甘ったるい匂いと、けだもの臭さが混り合った工合で、二人の鼻を襲ってきた。

そのわけは、すぐわかった。

檻の中は白酒の泥海だった。けだもの臭さの元は、六匹の犬だった。お京はその白酒の海

で、のたうっていた。いや、もうのたうつ力も尽きかけ、六匹の犬にもまれているのだ。犬はみな中型の雄犬で、猛り立っており、お京を突き動かしていた。至るところを舐められ、嚙まれ、巨大なものをこすりつけられていた。無意識なのか、刺激に耐え兼ねるのか、払いのけようとすると、犬共は怒って肢や鼻面を使い、お京を突き転ばす。足首や膝をくわえて引き回すのだ。

お京はどこもかしこも、白酒にまみれていて、うつぶせになると、顔を泥海に突込み、むせながら飲むようだった。

芳国はさっきから、歯の根が合っていない。

「ぐでんぐでんで、もう何もわからないのさ。あの白酒には、たっぷり強精の薬も混ぜてあります。飲んでいるのはお京だけじゃない。犬もで。だからご覧なさい。じゃれてじゃれて、離れやしねえ。……女は、ちくしょうでもなんでもいい、抱かれてえって気だ」

と、善吉がささやいている。なるほど、一匹の犬が、いましもお京のはだかった股間にうずくまり、長い、火のように赤い舌を、せわしなく伸縮させる、その動作を執拗に反覆していた。お京の腰は、それに答えるように持ち上り、うごめくのだ。

お京の目は何も見ていない。うつろで、うるおっている。口から白酒なのか汚物なのか、糸を引くのを垂らし、四肢はヒクヒクと痙攣している。

長い溜息ともうめき声ともつかぬものが、お京の口から洩れ、おのれを愛撫するものを、

しっかりつかもうとするように、双の手が犬に伸びた。犬が驚いて飛び上り、うなりながらお京の手を嚙んだ。

すると犬たちは言い合わせたように、お京に襲いかかった。だが、本当に嚙むのではない。愛咬なのであろう。だが、もみしだかれ、踏んづけられて、お京は束の間、人心地がついたのか、しゃくり上げて泣き出した。

「いい眺めだ。いささか、胸がいえるぜ」

と、孫兵衛が言った。

「あ、あんまりこりゃあ……」

芳国が悲鳴に似た声を出すと、

「しっかり性根を据えて見るこったね。いい絵ができますぜ」

と善吉が含み声で笑った。

お京が泣きながら、四つん這いになり、腰を立てた。それが左右に動いた。どう見ても、交尾をうながしているのだった。一匹の犬がそれに取りついた。だがお京はすぐにくずおれる。それに焦立って、犬が尻や太腿に嚙みつく。

孫兵衛が顔をそむけた。客が一人、嘔吐をはじめた。

六

「頃合いだねえ、卯平」
と、お新が言った。
「いかさまな。早すぎるほどがよかろう」
「お願いでございます。巡礼の者でございます。連れ合いが急に腹痛たを起しまして……お慈悲でございます。どうかお水を一杯……」
木戸を叩きながら、お新が哀れっぽい声をふり絞っていると、ブツブツ言う声がして、木戸が細目にあいた。
「うるさいな。取込み中だ。水はやるから、そこで待っていな」
「おや、つれないねえ。入れてくれてもいいじゃないか」
「な、な……」
とそいつが目をむいた途端に、卯平の杖の先がみぞおちに、したたか食いこんでいて、男は丸くなって倒れた。お新が川に蹴込んで、
「入ろうか。豪勢に広いね」
「孫兵衛がくしゃみをしたのは、そっちだぜ」

「倉のうしろは、なんにもありゃしない」
「だからよ……」
と言っていると、バラバラと四人ばかり、屈強な男たちが駆け寄ってきた。
「だれに断わって入りやがった。木戸はあかねえはずだ」
と一人が言う。
「あけてもらったよ。ご親切なお方だ」
とお新。
「そんなはずはねえ。そいつはどこにいる？」
「さてね。お前さん方がご存じでしょう」
と卯平。
そのわずか前。紺の腹掛けにパッチばきという、魚屋のようなりをした男が、右手に出刃包丁をぶら下げて、例の入口から現われた。若い男が二人、うしろについていた。
「来やがった……ほれ、あの男さ。女を殺した……」
と、芳国が孫兵衛にささやいた。善吉は立って行って、その男を迎えている。
「なるほど、どうやら間違いなく、札差のあるじだな。色が白くて、肉がたるんでいやがる」

と孫兵衛。魚屋にやつしているのは、鯉ならぬ女を、大俎板で料理しようという趣向なのだ。

部屋は暗くなっていた。外が暮れかけているせいか、何か仕掛で暗くしたのか、それはわからない。ともかくも、暗さが、一軒家の白い紗の代りをしているのは確かだった。

明るくては、芳国に見破られる。芳国にはあくまでも、芝居と思ってもらわねばならない。

魚屋になった男は、善吉に何か言われて、孫兵衛を見たようだったが、笑顔を絶えず見せているものの、会釈はしない。他の客にも同様だった。

男は檻の前に来て、中をのぞいた。お京は白い泥んこになって、あおのけに、長々と伸びて動かない。犬共は相変らず、所嫌わず肌を舐めている。胸に足をかけ、乳房を引っかいている犬もある。

男ののどから、きしるような喜悦の笑いが洩れ、掛け金を外して、戸を開き、犬を制しながら、体を半ば入れ、お京の髪をつかんで、引きずり出した。

ついてきた男が、また掛け金をかけ、犬を閉じこめた。

お京が引きずられると、板敷に白酒があとを引く。お京はピクリとも動かない。

芳国が思わず、アッと声を出したのは、男が無雑作にお京をかかえ上げ、水槽の中に落したからだ。

「料理の前に、きれいに洗おうって寸法だな」

と、孫兵衛が陰鬱につぶやいた。溺れ死なないか……その恐怖を、よほど強い自制心で、おさえているようだ。

「旦那、なんとかしなけりゃ……持たないぜ。ねえ、もう出て行ったほうが……」

「うろたえるな」

と孫兵衛は言った。

孫兵衛のみならず、一同は立ってそれを見た。お京は水槽に完全に沈められ、体の隅々まで洗われている。ざんばらの髪が、水藻のように散っている。もがきも、動きもしないようだ。とっくに息は切れていよう。

客の一人が、すすり泣きを始めた。そして宇陀川芳国、とうとう白眼を出して倒れてしまった。

男はお京を水槽から上げ、一旦板敷に投げ出した。お京は奇妙にねじれて倒れている。汚物はすっかり洗い清められ、濡れた肌に微光がなめらかに走り、芳国が目を開いていれば、よだれを垂らすところだ。男もその美しさに打たれたのか、笑顔を消し、しばらくは見おろしていたが、そっとしゃがんでかかえ上げ、大俎板に乗せた。大俎板は一点の汚れもなく白い。乗せられたお京の体は、ここでまた美しさを増していた。やや色付いた肌色が、男に息をのませる生々しさで、しかも犬の歯の跡、爪跡が点になり線になり、ほのかな朱を点じている。黒髪は伸び切り、胸や腹にまでまつわりついていた。

「こいつらは巡礼じゃねえ」
と、だれかが言うと、みな一斉にふところに手をやり、白木の柄の匕首を抜き出した。
「巡礼さ。現に杖をもっていらあ。ただ、この杖はちょいと」
卯平がそいつらに向けて一振りすると、鞘になったのが飛んで、白刃が残った。お新は杖の先っちょを抜き取ったが、まず槍のような体裁だ。刃は偏平だから薙刀代りにもなりそうで……
「おいらはヤットウは知らないが、このほうが匕首よりゃあ先に届くよ」
とお新が言うと、
「てめえら、雇われのゴロツキだろう。相手が悪いや。引込んだらどうだ？」
一同は気を呑まれたようだが、一人は女、こいつからやっつければ、という了簡か、空元気まじりで襲いかかったのが悪く、一人はお新に鼻の下を突かれ、一人は卯平に、右の二の腕を深々と斬り込まれていた。
「だから言わねえこっちゃねえ。お新、来な」

男は俎板に向かって坐り、お京の体を上から下まで撫で、みぞおちにしばらく手を置いてから、出刃包丁を握り直し、体を少し乗り出した。魚になぞらえて、胸の下に刃を入れ、下へ断つつもりだろう。

男の笑顔は深まった。
孫兵衛は出刃の動きを注視している。握りおろす寸前に、かくし持った小柄を飛ばすつもりだ。それは男のこめかみを正確に襲うだろう。
だが、万一ということがある。おのれは平静なつもりでも、わずかにその失なわれたところがあるとすれば、手許が狂うかもしれない。
脇の下が汗に濡れた。
出刃の切先が、お京の肌を破ろうとする瞬間、孫兵衛の小柄が飛び、同時に、お京の口から、白い糸に似たものが噴出していた。
白い糸のようなものは、針だった。数本のごく細い、小さい針である。針の頭は太くなり、平らである。普通の針なら飛びはしない。
針の糸は男の右眼を襲っていた。孫兵衛の小柄は少し外れ、耳の下に刺さった。
お京が跳ねた。まっすぐ伸びた足先が、男の手の出刃を飛ばし、胸板を蹴って、男は後方に一回転した。
「でかした」
と孫兵衛が言い、男に駆け寄ると、羽交い締めにし、小柄を耳の下から抜いて、首に当てがった。

部屋には善吉と、もう二人いる。あとは客だが、これは片隅にかたまっていた。

「おい、逃げるとこいつを殺すぜ」

と孫兵衛は言ったが、善吉は戸口へ走りかけていた。折悪しく、卯平とお新が入りかけたところで、善吉はお新の突きをモロに受けることになった。

お京は仮死である。あれだけのことができたのは不思議だ。孫兵衛は首をひねりながら、男の心臓に小柄を静かにめり込ませた。

「おめえは生かすわけにゆかねえ。ただ、むごい殺し様はしねえ」

と言いながら。

蔵前で知られた札差、大倉屋の通夜に、巽屋孫兵衛と女房お京が出ていて、神妙に焼香を終えたあと、年老いた番頭に目まぜをした。番頭は心得て、二人を別室に招じた。

「ご当家の旦那様とは、妙なご縁でございましてな。絵草紙……ま、春画などを通じて、ひそかなお付合いで。お好きでございましたな、ははは。若い番頭さんの善吉と申される方も、お気の毒なことをいたしました。いまの世の中、油断がなりませんな。泥棒なんぞも、殺しをなんとも思っていない。いえ、楽しみにしている手合もおります。旦那様には、このお京もずいぶん目をかけていただきました。筆や口に尽せないほどで。……なんでございますな、旦那様は失礼ながら、女運はよくなかったようで、奥様ともしっくりゆかず……お弱かったのでしょうかな。それで、素人芝居なんぞをお好みで。番頭さんもご苦心なさいましたろう。道楽も過ぎると困りものでございますな。ほう、きょうはむし暑いせいか、大分汗をお掻きで……そのうちまた、ゆっくりとお参りに伺います。おっと、忘れておりました。御香典……へへへ、お返しが怖いと、おっしゃいませんでしたか？　空耳でございますな。いえいえ、怖いのは店が潰れること。お返しなんぞはあなた。お京、おいとましようか」

お京は喪服に一段と容姿が冴えわたって、武家の名残りか、ぴたりと型がきまって一礼した。

第五話　行き暮れて雀のお宿

一

時ならぬ女の悲鳴を聞きつけたのは、山の中である。山の中とは言え、東海道からちょっとそれた場所で、沼津と三島の間、黄瀬川というのが流れていて、川沿いに小道がある。道は足柄山に通じているそうだが、その麓まで行ってみたいという、宇陀川芳国の気まぐれで、同行の巽屋孫兵衛も、急ぐ旅ではなし、うららかな春景色を賞でながら、登り坂の道を歩いていた。

道は川から離れ、前後左右はみな新緑。所々に桃の花、遅咲きの桜、さては木蓮の花が真盛りという塵外境だった。

空耳でない証拠に、二度目の悲鳴が上った。続いて、

「だれかあ！」

声は遠くない。芳国がおろおろして、

「どうしよう、孫兵衛さん」

「旅の娘が難に会ったか。どうもおあつらえ向きで芝居掛りだが、知らぬ振りをするのも気

がさすね、先生」

そう言って笑ったと思うと、孫兵衛は走るでもなく、小股にツツツと声の方へ歩き出したが、それが早い。芳国もあわてて追駆けた。

二十間も行くと、道の右側に朽ちかけた赤鳥居があって、奥に稲荷の社が鎮座しているらしいが、その裏辺りで、若い娘か年増の女房かわからないが、悪いやつに囲まれているのだろう。

その見当が適中して、社の裏手の草の上に、十七、八の娘が転がされ、男が二人、娘の左右の手を押えつけ、一人が裾に回り、あわや落花狼藉という風情に見えた。

男たちは野良着、頬被り、毛脛を出し、裾に回ったのは、娘の脚を広げてかいこみ、すでに褌も外して、異様なものが鎌首をもたげていた。

娘は粗末な綿服を着ていたが、大分あばれたと見えて、下半身のみならず、胸も広く引きはだかって、木洩れ陽を受けた白い肌が、目に痛いようだ。

「助けて」

と、娘は声を絞り出した。男たちが一斉に振り向いた。

「なにしに来やがった。うせぬと殺すぞ」

と、一人が孫兵衛に言った。

孫兵衛は無表情、面倒なのか口も利かず、例の仕込杖を抜いた。細身も細身、しかも薄刃

で、軽く振ってもヒュッと音を出し、しなうやつだが、見様では、なんとも気味の悪い刃物だ。

男たちがギョッとして、及び腰になったところで、孫兵衛は刀を派手に一閃した。空を切ったのだが、音がなんとも言えず凄い。

一様にワッとおびえ声を出すと、他愛のないやつらで、三人とも転げるように逃げだした。

芳国は茫然と突立っていただけだが、残り惜しそうに、

「もうちょいと、見たかったんだがねえ、孫兵衛さん。めったにお目にかかれない図だから。早過ぎたよ」

「勝手なことを言っていやがる」

娘は裾前もそのまま、しばらくは虚脱したように横たわっていたが、芳国がノコノコ前へ行くと、あわてて起き上り、そそくさと着崩れを直しはじめた。

改めて礼を言おうとするのを、孫兵衛が制して、

「いまのやつらが待伏せでもしているといけない。行先まで送ってやろう」

「はい、ありがとう存じます。でも、少し遠うございます。山の裾で……」

「構いはしない。どうせ、そっちへぶらぶらと行くところだったのさ」

まだ日は高い。娘を家に送り届け、街道に戻っても、夕刻か、少し過ぎた頃には、三島の宿に着くだろう。

時候がよくなったところで、絵筆を持って旅をしたいと芳国が言い出し、所が変れば女も変っていようし、旅では思いがけない色模様にお目にかかることもあろうからと、孫兵衛が同意し、孫兵衛は商売物の草双紙、役者絵、美人画の類をたずさえて道連れになった。もちろん、怪しからぬ絵もかくし持っている。どうせ行くなら、土地の物持ち、物好きに高く売りつけようというのだ。

だが長旅はできない。芳国は、あまりお江戸から遠ざかると、たちまち舞い戻りたくなる男だったし、足も弱い。

駿河の府中までは、どうやら行ったが、次の宿鞠子から、宇都谷峠へ登りかけてへこたれてしまった。名物の十団子と、鞠子のとろろ汁を食ったくらいのもので、芳国は帰ろう帰ろうだった。

府中では、遊女町が芳国の画材になったが、廓に泊っても、変った趣向はなかったらしい。芳国は名所旧蹟にはとんと興を湧かさず、神社仏閣にもケロリとして、もっぱら女だったが、宿場の飯盛もつまらず、百姓女も漁師の娘も有りふれていると、不興の体だった。

それでも筆を動かさなかったわけではなく、例えば月夜の浜の岩場で、漁師と海女の忍び合い、抱き合って、体半分は水びたし、文字通りの濡れ場の図などは、孫兵衛がほめたものだった。

……娘の名はお菊、家は足柄山の麓、人里離れたところで、父親の百姓善右衛門は田八反

に畑を少々、山も少し持ち、さほど貧しくもない暮しという。用があって三島の親類に行き、その帰り道を、尾けてきたならず者に襲われたそうだ。

三島の宿屋にお泊りのつもりならば、どうぞうちでゆっくり手足を伸ばし、泊ってほしい、山の中でもてなしもできないが、宿賃の費えがなくて済みましょう、とお菊が言う。

「芳国、ご親切に甘えるか。山家の泊りも乙だろう。絵も描けるぜ」

「景色だけはようございますよ」

と、お菊がニッコリしたが、よく見ればかわいい顔で、頬に血の色を散らし、唇は茱萸のように紅い。さっきの、お菊の肌の白さを思い浮かべたか、芳国が生唾を呑み込んだような顔付きをして、

「こりゃあ絵になりそうだて」

とつぶやいた。

「うちはよく、旅の人のお宿をいたしますよ」

と、お菊が言った。並みの旅人が街道から山道に踏み込むわけはないから、厄介になるのは大方、猟師、薬売り、蛇取りや薬草取りだそうな。

道はいよいよ細くなり、石ころだらけ、しかも登りは急で、見回せば藪また藪、さらに大木が鬱蒼と枝を差し伸ばし、昼なお暗い有様だから、早速芳国が音を上げ、ぐずりだした。

「もうじきでございます」

と、お菊が短かい袖を口に当て、笑いを押し殺して言うのへ、

「本当かい？　田舎のすぐそこは遠いのさ」

なるほど、お菊がそう言ってから、小半刻も歩かされたが、小さな峠を越えると同時に、視界がパッと開けた。

広々とした野原がある。蓮華、菜の花、ツメクサ、そのほかさまざまの野の花が咲き乱れ、微風にそよいでいた。

清らかな小川が曲りくねって野原を縫い、鮒やメダカが泳いでいる。

「こりゃどうだ。別世界だぜ」

と、芳国は目を丸くした。

「家はむこうにございます」

とお菊が指差すほうを見ると、野原が尽きたあたりに、みごとな竹林があり、その奥に、萱葺きの屋根がちらほらしていた。

おびただしい雀が、鳴き交しながら、竹林の内外を飛び回っている。

「まるで、お伽話の雀のお宿だね。さしずめお菊さんは、舌切り雀だ。おれたちはいいお爺さんで、これから、もてなしにあずかるって趣向だぜ、なあ芳国」

「左様、こうなればひ、雀踊りを見たいね。色っぽいやつを」

と、芳国が不平もどこへやら、胸が弾んできたようだった。

竹林にすっかり囲まれた百姓家は、思いのほかに大きく、どっしりしていた。

入ったところが、ひいやりとする広い土間で、正面が囲炉裡を切った板の間、自在鉤が天井から吊され、鉄瓶がいい音を立てている。

土間の続きに、かまどが三つあって、かけてある釜も鍋も大ぶりだ。

「みごとなもんだ。こんな家の様子は、江戸じゃあ見られねえ」

と、芳国は早速ふところから絵日記の綴りを取り出し、矢立の筆を抜いていたが、柱、棟木の太さと言い、梁や桁の頑丈さ、時代のついた建具類の立派さと言い、芳国の言葉通りだった。

板の間の上り口に腰を下していると、お菊と同じ年頃の娘が二人、すすぎと雑巾を運んできた。粗末な綿服にたすき掛け、ちびた草履をはいて、化粧っ気も何もないが、顔立ちはよく、どこかお菊に通じるところがある。

お菊は奥へ行って、父親の善右衛門に話したと見え、奥の千本格子の戸があいて、善右衛門らしい五十前後の男のあとに付いて、出てきた。

娘が危ないところを助けられ、お礼の申し様もないと、善右衛門は丁寧すぎるほどのあいさつをし、山奥のことゝて、何のおもてなしもできないが、よければ何日でも逗留してくれと言った。いかにも質素で、律義一方のような百姓と見えた。

二

囲炉裡端で茶をよばれ、茶受けが浅漬の大根。茶の味は渋いが香りはよく、浅漬がまた結構だった。お菊はよく気を使ってもてなし、お二人はおなかも減っていようからと、大きなお萩を山盛りにしたのを持ってきたが、これには孫兵衛も芳国も閉口し、甘いものは駄目だからと、辞退した。

「さっきの娘さんたちは？」

と、孫兵衛がお菊に聞いた。

「いとこや、親類の者で」

「そうですかい。みんな、いい娘さんだ」

奏公という形で、居るのだろう。

家が広いせいか、四方山の話も途切れると、森閑とする。表で鶏がコッコッと餌をついばんでいる。奥で時々、娘たちの笑い声がするくらいのものだ。それに、外では鳥の声。雀の鳴き声に、藪うぐいすの声も混る。

芳国は勝手に写生をはじめた。父親の横に坐ったお菊などを描いている。

「あのお方は、絵師で？」

と善右衛門。

「はい。宇陀川芳国と申しまして、浮世絵師ですが、なかなかいいものを描きましてね」

孫兵衛は自分が絵草紙屋であることを名乗って、

「絵も少々持ってきておりますが、お目にかけましょう」

「それは是非、見せていただきましょう。わたしも好きでな。ただし、こんな片田舎では、絵なんぞを見る折はめったにございません」

孫兵衛は、当り障りのないやつを出して見せた。こういう質朴な暮しをしている家の者に、例の秘画などを見せてはなるまい。

「これは美しい。お菊、みんな呼びな。見せてやろう」

集まってきたのが、お菊を別にして、四人いた。二人ふえたのだ。さきの二人は十七、八だが、こんどのははたちから二十二、三と見える。役者絵が一番人気だ。

「はてな。この辺りにゃあ、きれいな女が多いのか」

と、孫兵衛が思わずつぶやいたほど、四人が四人とも、整った顔立ちだ。化粧なし、髪に飾りもないが、おのずからの色気がみずみずしい。

野良仕事、家内の仕事がけっこう多い上に、迷いこんだ旅人に宿を貸すことも度々なので、これだけの女を置いている、と善右衛門は言った。

男も同数ほどいるが、みな田鋤き、畑打ちに出ているそうだ。

「おかみ様は？」

「死にまして、わしはやもめでございます。せがれが三人、末は府中に奉公にやりまして、上が、ことしはそろそろ嫁取りでな、頭を痛めておりますて」

部屋でゆっくり休んでくれというので、お菊に案内され、奥まった座敷に通されたが、やはり田舎の百姓家で、形ばかりの床の間はあるものの、掛軸も花もなく、ガラン洞だった。

二人は寝そべった。

「それにしても、のどかだぜ」

と孫兵衛。

「わたしは外に出て、絵を描きたいね。野原に川が流れていたろう。あの辺りで娘っ子たちを……裾をからげて芹摘みもよかろうし、はぎも露わに水遊びもよかろう。あぶな絵の趣向だね。一方、桃の木の下じゃあ、百姓の若え男女が、だればからずの体さ。なにしろ、景色がなんとも言えない。なあ孫兵衛さん、お菊に頼んでくれないか。できれば、ほかの娘っ子も」

「暇をもて余し、あくびばかりしている江戸の女とは違うんだぜ、芳国。そんな悠長なことができるものか」

と孫兵衛はたしなめたが、ちょうど様子を見にきたお菊に話してみると、真赤になって厭をしたものの、江戸の絵師に描いてもらうのがやはりうれしいようで、めでたく打ちそろ

って、野原に繰り出すことになった。

芳国は年頃の若い娘の扱い様がうまい。下卑た冗談を言って笑わせては、ああしろこうしろと差図をするのに、娘たちはしきりに嬌声を発しながら、素直に従った。

描かせる決心をすれば、娘たちは大胆で、肌をあらわすのを、さほどはずかしがらない。芳国はホクホクで、草摘み姿のいろいろを、前からうしろから、また腿までまくり上げ、大股を開いての小魚捕りなど、思う存分に描きまくっていた。

春の野の景がばかにいいから、この一連の絵は、芳国にしては変り種の、野趣あふれるものになりそうだった。

「作りものの色気じゃねえな。年頃の娘っ子の肌の匂いが、ムンムンするようだ」

と、芳国はすっかりのぼせ上っているが、そろそろ日も傾き、忙がしくなろうからと、孫兵衛がやめさせた。

部屋に引揚げると、芳国は脇目も振らず、素描に筆を加えはじめ、たちまち十枚ほど、面白い絵柄が出来上った。

いま一つ、これは即興で、ちょいと他所ではお目にかかれない孟宗竹林を扱い、その中で筍を掘っている女の、おっ立てた尻に男がつかまっている図を描き上げたが、絵にはむずかしい孫兵衛を喜こばせた。軽妙な出来だった。

お菊が行水を使えと言ってきた。暖かい時候とは言え、日暮れの野天で行水は寒かろうと、

二人は二の足を踏んだが、裏庭に出てみると、たらいを置いたところは、丈高い草、灌木に囲まれ、すっかり風をさえぎっていたし、もともとこの辺りは、他所よりも一段暖かいようだった。

孫兵衛が先に湯を使ったが、あちこちの桃の花、木蓮の花が暮れ残り、空には綿雲が夕焼けて、得も言われぬ心地だ。

お菊が甲斐々々しく背中を流してくれ、着替えを持って待っていてくれる。

「どうも、極楽に行ったようだ。これで、雀踊りが見られりゃあ本望だが」

と言うと、お菊は若々しい笑い声を響かせて、

「あてにせずに、お待ちなさい」

と答えた。

江戸のお人なら、なまじっかな料理では駄目、片田舎でなければ食えぬものが、珍らしくてよかろうと、善右衛門の心遣りで、夕餉は板の間の囲炉裡端で、雑炊の振舞いにあずかった。

米、麦に小豆、大豆、若い豌豆、また芹、春菊、ニラの類が入った雑炊は、味もよく、香りが高かった。それと、少ししゅんは過ぎたが、筍の煮物、これが舌のとろけるほどのものだった。小鮒の飴煮もついている。

「こりゃあ何より。江戸じゃあとても口に入らねえ」

と、芳国は満悦だ。ただし酒は濁り酒で、両名とも程々にした。相伴したのは善右衛門、お菊で、ほかの女たちは見えない。男は野良から帰り、どこでどうしているのか、静かなものだった。

なにやら、物足りぬ気がしないでもない。娘を助けた恩人のもてなしとしては、やや手軽すぎるようでもあるが、山家ではこれが精一杯なのかもしれず、二人は満腹ののち、礼を言って部屋に引揚げた。

考えてみれば、芳国はいい絵が描けて得をしているし、孫兵衛にしても、桃源郷とも言うべきところに足を踏み入れ、気色が悪かろうはずはなかった。

粗末な寝具が敷いてあり、夜に入ってはすることもなく、どちらも早々にもぐり込んで、酔いと旅疲れが一時に発し、間もなく眠りについた。

「……雀踊りにご案内申しますよ」

と言って、お菊があでやかに笑っていた。その唇が鮮やかに紅かった。化粧をし、眉墨を引いている。もはやその顔は、田舎娘ではない。

夢を見ているのだろう、と孫兵衛は思った。あの小娘が、裾長の絹物を粋に着こなし、美しく結い上げた髪に、櫛こうがい、翡翠玉のかんざし……そんなはずはないのだから。

「お菊さん」

と、孫兵衛は声を出した。夢なら、その声で破れるはずだが、お菊の姿はそのままだった。声も自由に出たから、夢ではないのだ。

「お約束したじゃありませんか」

と、お菊がまた言った。心なしか、言葉も田舎風を脱して聞える。

「本当にお菊さんか。夢かと思ったぜ。その早変りは、一体どうしたんだね？」

「こうやって、お客さんをおもてなしするんですよ。そちらの絵師さんも、起してくださいな」

ゆり起された芳国が、目をこすりこすり、

「夢じゃねえのか。お前さん、どうしてそんな姿に？　狐に化かされたようだ」

と、似たようなことを言った。

「せっかく寝付いたところだが、雀踊りが見られるとなりゃあ、寝るどころじゃねえ。芳国、喜べ。また絵ができるぜ」

孫兵衛は驚いてばかりもいなかった。これは、なにかあるのだ。

「それにしても、こうまで変るものかねえ。うっとりするぜ」

と、お菊を見る芳国の目が、熱っぽくなっていた。それに答えてお菊は艶然とし、

「さあ、早くこちらへ」

と言った。

早々に着替えをし、芳国は絵日記と矢立を持ち、お菊に続いて部屋を出る。お菊は手燭を掲げて前を行くが、家の中は部屋々々みな、ガランとして暗く、なんの変哲もなさそうだ。

「雀踊りをどこでやるんだえ？　こいつはまるで、化物屋敷じゃねえか」

と芳国が不平を言った途端に、お菊が歩みをとめて、

「さあお入りください」

と、右手の板戸をあけた。まばゆいほどの光があふれ出し、孫兵衛たちはオッとばかり、言葉もなかった。

三

山の中の百姓家に、こんな部屋がと、胆を潰したのも無理はなく、まず御殿風、広さは二十畳敷くらいだろうか。立派な青畳にうんげんべり、太い杉丸太の床柱に黒檀の違い棚、なにやら極彩色の三幅対がかかって、前には、京焼らしい大花瓶に、色とりどりの春の花があふれている。

天井は格子組みで、中央にきれいな吊り行灯。これでよほど明るいのだが、四隅に燭台があって、百目蠟燭にも火が点っていた。

「さあさあ、お客さん、こちらへ」

と、正面から手招きしたのが、あるじの善右衛門で、昼間のがさつな百姓姿とはガラリと変り、茶色の長着、色変りの羽織、どちらもむろんのこと絹物で、顔色まで白くなったよう、遊び好きの旦那か、女郎屋の亭主というところだった。

床柱の前が二人の席で、分厚な緞子の座布団が並んでいた。煙草盆の用意もある。

ともかくも、すすめられるままに席に着き、孫兵衛が善右衛門に、

「いったいこりゃあ、どうしたことで？」

と聞いた。

「なに、ほんのお礼心でございまして。ごゆっくり見物なさいまし。いま、酒も参りますからな」

「こうまでしていただくことはないんだがな」

と、芳国は薄気味悪そうで、

「……孫兵衛さん、雀のお宿じゃねえ、これは竜宮城じゃねえか。わけがわからないね。ご主人、お前さん方は、お百姓じゃないのかえ？」

「いえいえ、ちゃんとした百姓ですとも。……昼間はね」

善右衛門は笑って、

「夜は違いますて。わしの物好きでしてね。泊ったお方がびっくりなさる。なにしろ部屋の様子も、家の者の身なりも、打って変って、きらびやかでございますからな。外から見ただ

けではわからぬ楽しみがあるので。……お前様方、決してガッカリはなさりますまいよ」
「なるほど、こりゃあ面白い。ゾクゾクしてきたぜ」
と孫兵衛。
「ねえ、孫兵衛さん、大丈夫かい？　ちと大げさ過ぎて、あとが怖いのじゃねえかな？」
と芳国が耳打ちしたが、
「なあに、怖いものか。お礼心と言ったじゃねえか」
孫兵衛はわずかに目で笑った。
酒と膳部が運ばれ、運んできたのは娘三人だった。それぞれ、目も綾な衣装をまとい、お菊同様、髪を美しく結い上げ、脂粉の香を漂わせている。
膳の上の料理がまた、台所の夕餉とはこと変り、新らしい魚貝もあって、まず山海の珍味、器が凝っていた。
酒はもちろん清酒で、芳国にはお菊が、孫兵衛には娘のうちの一人、お蘭というのが、銀の銚子で酌をしたが、どこの酒か、芳国が舌鼓を打ってうなずいたほどの味だった。
そのうちに、部屋の下座が金屏風で仕切られた。その向うがしばらくざわついていたが、太鼓の音と共に、にぎやかな囃子が始まった。三味線の弾き手は四、五人らしく、響きが強いのは、男であろう。娘たちがあのように化けるなら、鋤鍬を取った手に三味線を持っても不思議はない。

ひとしきり景気を盛り立てて止むと、お菊とお蘭が座を立って、金屏風の陰に消えた。
「何が始まるんです？」
と、芳国が善右衛門に聞こうとしたが、いつの間にやら、善右衛門の姿は消えていた。
「みんないなくなっちまったじゃないか」
「気にしなさんな、芳国。これから始まるのは、雀踊りに決まっているじゃないか」
と言って、孫兵衛が手酌の酒をグイと乾した。
「……絵筆の用意をしたがよかろうぜ、芳国。なにか面白い趣向がありそうだ」
着飾った娘たちが、ズラリと出てきた。六人いて、また一人ふえている。並んで二人にお辞儀をし、立ち上ると、また三味線囃子が始まったが、曲はどうやら吉原雀だから、雀踊りとは縁があった。娘たちは手拍子をそろえて、一斉に踊りだした。
「べっぴんばかりで、きれいじゃあるが、手踊りなんぞは見飽きてるよ。これが趣向かい？」
と、芳国は不服そうだ。孫兵衛は黙っている。
三味線は少しずつ調子を早める。六人は輪になった。
「あれあれ、孫兵衛さん、帯が解けるぜ。だらしがねえ」
と言った芳国の口が、あいたままになった。
どんな結び様をしていたのかわからないが、六人の娘の帯は一斉に解け始めていて、ずる

ずると下り、端は畳に着き、踊るにつれて長く引きずる形になったが、娘たちは構っていない。

帯はすっかり解け落ちてしまい、畳の上にとぐろを巻いた。だが六人は踊り続け、囃子はだんだん調子を早めている。

締めていたのは帯一筋らしい。それが落ちると上着はたちまちハラリと合わせ目が広がり、打掛けのよう。

六人は上着を脱ぎ捨てた。下に着ているのは、それぞれ色が違って、藍、白、紫、緋、萌黄、桃色の羽二重地だ。

「ふん、なるほど、ふん」

と芳国の鼻息が荒くなり、矢立の筆をポンと抜いた。

その下着に締めた一重帯がまた解けると、下着もするりと脱け落ちる。

こんどは大模様の、これも下着になる。帯がなくて、すぐ前が開き、紅梅色をした縮緬の長襦袢になる。

……そのところで、囃子が急に静かになったと思うと、どんな仕掛けか、吊り行灯の火がスッと消えた。急に薄暗くなり、おやおやと思っていると、金屏風の陰から、男が一人現われ、床の間の左右にある百目蠟燭の火も、吹き消してしまった。

「どうなるんだい、こりゃあ。おっ？」

と、芳国が頓狂な声を出したが、いつの間にやら娘六人は手に手に小さなぼんぼりをかかげて踊っているのだ。

金屏風の向うの蠟燭は、すでに消してあったと見え、いま、灯りと言えば、六つのぼんぼりのものだけで、踊りにつれて動きながら、長襦袢姿の娘たちをほのかに浮かび上らせていた。

囃子が強まり、調子を一層早めた。長襦袢も落ちた。もう肌着と腰のものだけだが、それはごく薄地だから、灯が前後左右に動くにつれて、透けて見える女の体のあちこちが、ちらほらと浮かび上っては消える。

「なかなか、やるものだ。夢を見ているようだな」

と、孫兵衛が言った。芳国は答えもせず、踊りの輪に目を奪われている。

最後のものも取り去られた。踊りの手振り、足付きも激しくなり、胸を反らせ、腰を振る。ハッハッという荒い息使いも聞えてくる。妖しくくねる女の体は、目まぐるしく明と暗に染め分けられていた。

囃子がパッタリ止んだ。同時に、六つのぼんぼりの灯が消えた。真の闇である。

孫兵衛と芳国は、言い合わせたように、溜息をついた。

女たちは畳の上にうずくまったようだが、しきりに物の気配はするようでも、何が起っているのかはわからない。

……吊り行灯が、ポッカリと明るくなった。四隅の百目蠟燭にも火が点ぜられた。

六人の娘は裸のまま、身を寄せ合うようにしていた。夢まぼろしの妖しさは消えた代りに、今を盛りの張りつめた肌の輝きが、明るみに痛々しいほど白い。

六人にわずかな差はある。肌の色、肉置きの加減、乳房の形などだが、男がよだれを垂す体付きをしているのは同じだ。

脱ぎ落した衣類はすべて取り去られていた。

芳国がゴクリと唾を飲みこんで、

「なにがおっ始まるんだい？　娘たちはおびえているようだが……」

「見な、蛇だ」

孫兵衛が顎をしゃくったのは、少し片寄せられた金屏風の前を、黒い長いものが、カサカサと音を立てながら、娘たちのほうへ這ってくるのだ。

「なんだ、蛇か。蛇はいただけないね」

「並みの蛇じゃねえようだな」

と孫兵衛が見た通り、それは青大将のたぐいらしく、黒々と伸びてくる胴体が太くて長かった。もたげた鎌首は、子供の握り拳ほどもあろう。長さも六、七尺ではきかぬようだ。そんなのが十匹以上、一斉にさわさわと娘たちのほうへ寄って行く。

娘たちはますます肌を寄せ合い、身をすくめ、近付いてくる蛇の一群を見つめている。声

こそ出さないが、おびえているのがよくわかる。その中にいるお菊すらそうだった。

「芝居でもねえな。やっぱり怖かろう。時に、お菊は善右衛門の娘じゃねえ。すると……」

と、孫兵衛がつぶやいた。

四

蛇共は紅い炎のような舌をピロピロと出している。先頭のやつは、もう少しで娘の肌に届く。たまりかねたか、端っこにいた娘が、押し殺したような悲鳴を上げた。

男が二人出てきた。かたまった娘たちを乱暴に引き離した。娘たち六人、孫兵衛と芳国の正面三尺ほどへだたったところに、並んで坐らされた。

蛇は合計十二匹で、二匹が娘一人にまつわりつき、這いのぼった。

笛の音が起った。音色、節回しで、蛇を自在に動かすことができるようで、蛇の動作に緩急がある。

六人の姿態はさまざまで、二匹の蛇の巻き様も違っていた。だが、絶えず肌の上を這い、娘は怖さとむずがゆさに身もだえを始めている。腰を巻いて、股間に首を入れたのもあれば、首を巻き、さらに乳房にまつわったのもいる。

うめき声、悲鳴が洩れ始めた。お菊が、乳首を嚙まれたと見え、ヒーッと言ってそっくり

返った。一人の娘は気が遠くなったのか、あおのけに倒れたが、二匹の蛇は上体から下腹部に殺到した。

ほかにも、突伏したり、前に手をついて、体を支えたりするのがいる。どうやら、蛇は娘たちの肌をなめ回すばかりではなく、嚙みもするように馴らされているのだ。毒はないにしても、たまらない痛さだろう。

笛の調べが変った。娘たちはふらふらと体を起し、膝で立ち上り、肢を広げた。蛇たちは心得たように、一様に腰の回りに這い集まり、上から、また下から、鎌首を股間に沈めた。

「ひ、ひでえことをしやがる。あんなやつがもぐり込んでみねえ、たまったもんじゃねえ。大怪我をするぜ。……それそれ、見ちゃいられねえよ」

と、芳国は音を上げていたが、口とはうらはらに、絵筆は実に適確に、六人のもだえる姿を写し取っていた。

蛇は女の奥の院で、どのようにうごめくのか、みんな耐え兼ねたように泣き声や悲鳴を出し、腰をひねってもだえ、両手で前をかきむしるような動作を続けていたが、笛がピッピッピッと鳴ると、絶叫を残してひっくり返った。肢を突張って震わせる者、腰を高々と上げて反る者、手で畳をかきむしる者……

「どうでございましたか。蛇使いなんぞ、江戸じゃあ珍らしくもないとお思いでしたろうが、今夜のようなのは初めてでございましょう?」

「初めても初めて、いや恐れ入った。江戸の見世物は、振りをするばかりだが、こりゃあ真実だ。踊りもよかった。ぼんぼりを持ってのくねくね踊り……それも一枚々々、脱いで行った果てとは、いやはや考えたね。これでまた、いい絵ができる」

「娘六人のうち、どれがお気に入りで? いま呼びますが」

「どれと言って、甲乙をつけ難いね。どっと側に来てもらおうじゃないか」

「お酌じゃあございませんよ。一晩、と申してもいまは夜中だが、明け方まで、どうなさってもよいので」

「と言うと? まさかお前さん」

「そうしてお客様をもてなすのが、しきたりでございんしてね。ましてお二人は、娘の恩人。どんなお望みにも従うように、しつけてあります」

「そ、そりゃあ本当かい」

芳国は年甲斐もなく、胴震いを始めた。

「それじゃあ、あなた様には三人ばかり、やりましょう」

「待ってくれ。お菊さんはお前さんの娘だろう?」

「はい。ですが、養い娘で。遠慮なさることはございません。お菊がお望みで?」

「できりゃあ入れてほしいね」

芳国は図々しくなった。

部屋には金屏風が残っているばかり。娘も囃子方も、みな引揚げた。孫兵衛は黙々と、冷えかけた酒を飲んでいた。

「そちらのお方、お聞きの通りで、お気に入りは？」

孫兵衛がニヤッとして、

「わたしはけっこうだ、と言いたいが、折角だから一人、そうだな、お蘭といったかな、あれがいい」

「それはお目が高い。忘れられなくなるような女でございますよ。……それじゃあご案内を。むろんのこと、別のお部屋で」

孫兵衛が案内された小部屋は、いままでいた広間の奥である。芳国はすでに、別の部屋に入っている。

小部屋の造りも百姓家のそれではなく、江戸の出合茶屋にでも入ったようだ。敷布団は二枚重ね、華やかな絹の夜着が畳んであり、朱塗りの箱枕が二つ。枕元に煙草盆、水さしに茶碗、鼻紙入れ、丸行灯。

孫兵衛はそのまま、布団に横たわって、お蘭を待ったが、ウトウトし始めた頃に、お蘭がそっと入ってきた。長襦袢姿に羽織を引っかけていて、歩くたびに白い素足がチラチラするのは、その下に何も着ていないからだろう。布団に乗ってきて、孫兵衛の脇腹にぴったりくっついて坐り、顔を寄せて含み笑いをして、

「お脱ぎなさいな」

と言った。

「ああ。お前も脱ぎな。おれが脱がせることもあるまい」

お蘭はコックリをして、孫兵衛に媚びを含めた目を投げながら脱いだ。

「蛇に嚙まれたところを、よく見せてくんな」

と、孫兵衛は身を起し、お蘭を抱くようにして、目を肌に近付けた。肩先、脇の下、乳房の上、臍のあたり、さらには尻、太腿と、嚙み痕はたくさんあるが、大抵はポツポツと赤くなっているだけで、血がにじんだほどのものは、ほとんどない。

「はずかしい。そんなに見ちゃあ厭だよ」

と笑いながら、お蘭は孫兵衛の帯を解きにかかった。堅太りの体で、やや毛深く、上を向いた大きな乳房が、猛々しいほどだ。

「この、大事な中のほうも、嚙まれるのか」

と孫兵衛が、そこへ手をやりながら聞くと、お蘭は顔を孫兵衛の肩に乗せてきながら、そうだ、あの痛さだけはたまらないと言った。それに、笛の音で中の鎌首二つがうごめき回るから、こらえようにも、こらえられない。

「客を泊めると、いつもこんなことをするのかい？」

お蘭はうなずいただけで、さっさと孫兵衛を裸にしてしまい、押し倒すと、ふわりとかぶさってきた。

それからまた一度起き上り、足のほうへ回って、孫兵衛の足を自分の膝に乗せたと思うと、足指から甲へ、静かになめ始めた。濡れた舌の先が、皮膚を這うと、何とも言えぬ戦慄が脳天を突き抜ける。

お蘭の舌は、孫兵衛の肌の上をくまなく這った。舌の感触は、柔らかい息吹を伴なっている。

「極楽だ……」

と孫兵衛がうめいた。

孫兵衛は熟睡した。鶏の声、鳥の声がしきりにして、寝足りた目を開くと、もうゆうべのお蘭はいず、枕元に百姓娘のお菊が立っていた。

「あっちへどうぞ」

と言う。

最初に寝た部屋に、もう芳国が戻っていて、

「娘っ子が三人だぜ、孫兵衛さん。どんな目に会ったか、とても口じゃあ言えねえ。旅はするもんだなあ」

「お菊はどうだったい」

「それがね、天下一品だぜ」

ヒヒヒと笑ったが、お菊の姿はもうない。

「それにしても、やっぱり狐に化かされたような心持だ。朝になるてえと、何の変哲もねえ山の中の百姓家で、あとになりゃあ、夢だったと思うかもしれない。ねえ孫兵衛さん」

「そうかね。そうはゆくめえと思うが」

「さてお客さん、娘を助けてもらったお礼に、泊まってもらいましたが、ゆうべはいい目を見なすった。このままお帰りは、ちとつれねえでしょう。気は心で、何分の御報謝には預かりたいもんで」

善右衛門の言葉には、脅しの調子が入っていた。

「そ、そりゃあ話が」

と芳国が口を尖らせるのを孫兵衛は制して、

「なるほど、茶を飲んでも茶代、ただで左様ならは義理知らずかもしれねえな。それじゃあ心付けでも」

「夕飯、朝飯の代は申し受けねえ。泊り賃も要らねえが、見世物に酒肴、灯明の油にはばかに金がかかっておりましてね。ひっくるめて二十両。女一人の代が一両一分……驚くことはありますまい。江戸にもねえものを見なすったのだ、十年長生をすると思えば、安いものさ。

女は選り抜き、そりゃあご承知だね。しかもみんな、おぼこな百姓娘、はした女郎とは訳が違いましたろう。女四人で五両、締めて二十五両。おもらい申したいね」

部屋の外には男たちの影があった。ゆうべの囃子方、昼間の作男、お菊と稲荷の社裏で一芝居書いたやつらであろう。

「いくらなんでも、無茶だ。かたりじゃないか」

と言う孫兵衛の調子が、いかにも弱かった。善右衛門がせせら笑って、

「役人に引き渡そうかね？　無邪気な奉公の娘を、手当り次第になぶりものにした挙句、宿賃も払わずに逃げようといたしましたと。この家は見ての通り、ただの百姓家、どこを探しても、かくし部屋はないのさ。広間があったと？　そいつは夢でも見たのだろう。広いところは納屋にお蚕様の棚だ。なんなら行ってみるがいい。男と寝る女もいやしない。いるのは養い娘、親類から来ている娘共で、身許もわかっているからな。お前さん方が何を言ったって、相手にはされまいよ」

宇陀川芳国は、唇の色まで青ざめている。

「旅の帰りで、十両もないよ。江戸まで、路銀もまだ要るんだ。わたしの持っている絵でどうだね？　みんなあげるが」

「笑わしちゃあいけない。金にはならないよ」

「五両で勘弁してくれないか」

「冗談を言いなさんな」

善右衛門の相好が、急に凄くなった。

「ある分を出し、足りぬ分は江戸で工面をしな。半月ほどは待ってやる。働くもよし、借りるもよし、少々うしろ暗いもうけ様をしたって、こっちは文句を言わねえ。ただ、男を付ける。どこぞへ逃げぬようにな。二十五両、すっぱり返しゃあそれでお終い、あとくされはないんだ。返さなけりゃあ、間違いなく牢屋入りだよ。胆に命じておきな」

五

百姓家に舞い戻った孫兵衛の傍に旅姿のお京がいた。

「このところ、商売がうまく行かず、逆立ちをしても、二十両はできなかった。これで」

孫兵衛がさし出したのは十両で、

「……あとはこの女だ。十両分、ここで稼がしておくんなさい。こいつはわたしが金を貸した男の女房でね。こいつが十両がとこ稼いでくれたら、借銭は棒引きってわけで、男も承知だ。十日でも二十日でも構わねえから」

善右衛門は冷たい目で、お京をジロリと見てから、

「いい女ならともかく、これじゃあ役に立たねえぜ」

と言った。

「どうして？　悪くはねえがね」

「おめえも知っていよう。うちにいるのは飛切りだ。だからこそ、衣装を着せりゃあ映える。体も吟味を重ねたアマ共さ。この女は見所がねえ」

善右衛門の言う通りで、お京は面やつれの女房、それに旅のほこりが染みついたようになり、髪はそそけ、馬子でも振り向くまい。着物は洗いざらしの縞木綿と来ている。年は三十ほどにも見える。

「なんぞ、芸でもありゃあ、座興くらいにはなるが」

孫兵衛がニッコリして、

「芸はないよ。ただし、なまじっかの芸なんぞ、及ばないものを持っているのさ。善右衛門さん、こいつに行水を使わしてみりゃあわかる。一皮むけて、きれいになるよ」

「ふん、すべたはどう洗ったってすべただ」

「まあそう言わず、試しておくんなさいな」

お京は男たちの話などどこ吹く風で、おっとりと坐り、外のさまざまな小鳥の声に、耳を澄ませているふうだった。

日は暮れ、空の夕焼もあせ、青い靄が野づらを覆う頃だ。こそこそと裸になったお京が、湯を張ったたらいの前にしゃがみ込み、髪を解いて洗っていた。それをかたわらで、善右衛門と孫兵衛が見守っていた。背中だけ見せ、丸くなっているお京の体に、男の目を引くところはない。

お京は丁寧に髪を洗う。

「髪だけはいいな」

と、つまらなそうに善右衛門がつぶやいた。

お京は顔も何度となく洗い、それから手桶で湯をくみ出し、肩から掛けた。ようやく立ち上った。

「こっちを向いてみな」

と善右衛門が言い、お京がはじらいを示しながら、やや斜めに向き直ると、善右衛門は何か口に出しかけて引込めたように、のどを鳴らし、咳をした。

善右衛門は自分の目がどうかしたのだと思ったかもしれないが、そうではなかった。孫兵衛すら、お京の新らしい美しさに打たれていたのだ。

それは肩や背や、顔にも乱れかかった濡れ髪のせいかもしれない。無数の水玉が柔らかに輝く中に、すっかり「やつし」を落した艶やかな顔があり、それはあどけない童女のようにも、美しくキリリとした少年のようにも、また男の血で肥え太る妖婦のようにも見える。

……と思えば、ごく平凡な女の顔に戻っている。唇と瞳は、なにか遠い星の光でも宿しているようだ。

善右衛門がまた咳をした。ようやく、体の完全さに気付き始めた気配だった。乳房の形のみごとさ、胴のくびれ、表情に富んだ、頬笑むような腹部、豊かでしかも敏捷そうな腰、腿のふくらみと牝鹿を思わせる脚部……暮れなずむ青い微光の中に、白々と浮かんでいるのだ。

「風邪を引くぜ。早く湯を使いな」

孫兵衛が苦笑を押しかくして言った。

静かに体を洗うお京は、さまざまに艶冶な姿態を見せながら、男たちの目などを少しも気にしていない。

善右衛門が孫兵衛の腕を取って引き戻した。

「あれならいいかもしれねえが、おれがあとで、よく吟味をするぜ。味が大事だからな」

と言う声がかすれていた。

……半月ほど経っている。江戸まで付いてきた善右衛門の手下に、程よいところで脅しをかけ、命が惜しかったら消えうせろと引導を渡したが、カラクリは何もかも白状させている。

孫兵衛とお京で、まず十分なのだが、話を聞いて卯平が来たがった。暴れようというより、娘っ子を抱きたいのだろうと、お新に厭味を言われながら、孫兵衛たちより一足先に江戸を発ち、例の芝居にひっかかって、いまどこぞの部屋にいるはずだ。

何も知らずに連れ込まれた男たちは、広間の見世物に魂を奪われ、淫欲のきざしたところで好みの女を当てがわれ、おれは恩人だから金は取るまいと、不安な心に言い聞かせて、この世ならぬ楽しみを尽すのだが、一夜明ければ仏が鬼に変っていて、金がなければ持ってこいと、目付役がついて追っ払われる。逃げようとすれば命も危ないから、なんとしても金を作らなければならないのだ。

あの踊りと、蛇使いをもう一度見せてくれと孫兵衛がせがみ、勝手にしろ、だが女は抱かせねえぞ、と善右衛門が許したのは、よほどお京が気に入ったものらしい。

……夜中の広間。床柱の前の座に、卯平といま一人、小商人らしい三十年輩の男がいた。孫兵衛は卯平の横に坐ったが、知らぬ同志のようにして、ろくに口も利かなかったが、金屏風が立ったところで卯平が、

「あんまり早く手を出してくれるなよ。とっくり見てえからな」

と言った。

孫兵衛の横には杖がある。仕込杖はこの間、取り上げられていたが、新たにこしらえたもの。また仕込みか、と手下の男が調べたが、普通のやつだった。……だが、いまあるのはまさしく仕込杖で、何のことはない、お京のものと入れ替っていた。途中くるぶしを痛め、杖なしでは部屋も歩けぬと、広間にも持ってきたのだが、だれも怪しまなかった。

「ふしぎな女だ、おめえは。ちょっと見にはごくごく並みの女だが、だんだんよくなってくる。どこまでよくなるかわからねえ」

善右衛門の言葉は、うわごとじみていた。

「……このままで、ずっと居てえや。動くのももったいねえ。……おめえの肌は、生きた魚かなんぞのように、ピクピク動いて波を立てるなあ。たまらねえ。ジワジワと寄せきちゃあ返す、波だ。お京、おれの女になりな。おれは百姓でもなんでもねえ、江戸じゃあ大分働いた男で、足を抜いているのよ。おめえなら金は惜しまねえ」

言う間にも、うめき声が混る。お京の手は善右衛門の背から腰、尻から太腿へと、肌に触れるか触れないかのように絶えず上下し、それがまた、善右衛門の快感を倍加していた。

「お京、え？　どうだ。つまらねえ男は捨てろ」

お京は目でうなずいた。その全身に、ふと力がみなぎったと思うと、アッと言う間もなく、上下が入れ替っていた。

「お京！」

善右衛門の顔には、驚きと歓喜の色がある。お京はさながら悍馬に打ちまたがった野性の女のよう、誇らかに全身を男の目にさらし、胸乳を反らせて笑っていた。……だが、やがて顔が苦痛にゆがみ、切なげな吐息を洩らすと、力なく男の上に体を伏せた。髪が乱れかかる。

善右衛門が一声吠えた。

お京が身を起すのと、右手の匕首が善右衛門の心臓を刺し貫くのが同時である。

善右衛門はほとんど動きもしなかった。わずかな血の飛沫が、お京の胸と太腿にかかって、

糸を引いた。匕首は枕元の、布団の下にかくしておいたものだ。

広間の様子はどうだろうと、お京は静かに立ち上った。

暗い中での裸踊りが済み、明るくなって、青大将の一群がぞろぞろと這い出したところで、孫兵衛が卯平の耳に、

「やるぜ」

「蛇を見せねえのか」

「あきらめな。ソツもあるまいが、お京がやはり気になる」

「仕方がねえ」

卯平は渋面を作った。孫兵衛が仕込みを抜き、座を蹴って、蛇の群を飛び越え、金屏風の裏へ回り込んだ時、囃子方の男たちは、手も休めていなかった。

卯平があとを追い出してようやく、裸の娘たちの間から悲鳴が上り、男たちは三味や太鼓の撥を取り落した。

「おとなしくすりゃあ、殺しもなにもしねえ。てめえらの頭は、あの世へ行っているぜ」

と孫兵衛が言った。男の数は五人。数を頼んだか、かくし持った脇差で突込んできた男の腕を、孫兵衛が払った。腕は肘の上からスパリとはすっかいに切断されて落ちた。

一人が逃げようとして、卯平に手裏剣のようなものを投げられ、それが首に突き刺さって

倒れた。手裏剣に似ているが、ずんぐりして重みのあるものだ。……あとはおとなしくなった。

「おいおい、おめえたちにはなんにもしねえよ。ほう。いずれがあやめ、かきつばただね。ありゃあ青大将か？　なるほどでっけえや。お姐さん方、そう逃げまどうようにしていず、このおじさんに見せちゃあくれねえかな？」

と、金屏風の向うへ出て、卯平がしゃべっていたが、その望みだけはなさそうだった。

「だれか教えてくれ。善右衛門の居間はどこだ？」

と、孫兵衛が聞いた。

第六話　心の闇に狂い花

一

舟まんじゅうお新の苫舟に舞い込んだのが、変った男で、目の配り様、物腰、物言いからすると、盗っ人、博奕打ち、さもなければ岡っ引、あるいは荒くれ共をたばねる、何かの頭株、というのがお新の見立てだった。いずれ、平穏無事に暮しているやつではあるまい。

目の色が蛇のようだ。

いきなり小判一枚、出してみせたのも変っていた。相場は知っているが、一両出すからには注文があると言う。ぼそぼそとしゃべるが、そのくせ横柄で、カサにかかってくる。

「おっかないねえ。注文によるよ、お客さん」

おびえ顔で肩をすくめ、お新は下手に出てみた。男はうっそり笑って、

「少々痛い目に会わせるが、怪我はしねえよ」

なるほど、てめえはその口か。珍らしくもねえや、とせせら笑いたいところだが、はねつけて一両、フイにしたくもない。なにをしだすか、と面白くもあって、お新は柄にもなく、おどおどと、しおらしくした。

「本当に、ひどくしないだろうねえ？」

「そう言ったじゃねえか。承知だな？」

男はまた笑ったつもりだろう、顔の下半分がゆがんだ。

女には用のなさそうな、やせ枯れた五十男で、身なりから、そそけた髪から、どう踏んでも不景気風に巻かれたやつだが、小判はむろん、偽物ではない。

まさか、気が触れているのじゃあるまいね、と、それは口の中だった。

男はいきなりお新を突き転ばし、乱暴に帯を解いたが、それにつれて、お新の体はくるくると回った。狭い舟の中のあちこちに、イヤというほどぶつかり、まずお新は悲鳴を上げたが、男は痛かろうという顔もしない。

あられもない姿になって、大息をついているところを、何もかも上手に剝がれ、素っ裸にされた。

男も脱いで、お新に取り付いた。

お新は千軍万馬で、女を責めさいなむやつを何度も相手にしているから、少しばかりタカをくくっていた。

撫で回し、いじり回し、目を皿にしてくっつき、穴の明くほど見詰め回し、次第に手荒くなって、爪を立て、嚙みつき……その辺はありきたりだったが、手足をつかんでねじ上げる頃から、違ってきた。痛さが並みではない。

逆手で、背に回された両手を、斟酌もあらばこそ、グイッと肩のほうへ持ち上げられた時には、骨が鳴って、思わず知らず、悲鳴が尾を引いていた。丸くなって、その拍子に横っ面が床のむしろにこすりつけられ、これがまた痛い。

終ると仰向けにされ、男は足に回ったが、両足首を握り、大変な力で左右にねじった。股はさほど開かないが、付け根の蝶番が、いまにも外れそうだった。

この時もお新はギャーッと言ったが、ほとんど芝居っ気はない。これ以上は耐え兼ねるというところで、男は手をゆるめた。汐時を心得ているのだ。

お新はわずかの間に、全身汗になった。折柄梅雨時で、雨が朝から、細い糸を引いていた。堀の水嵩も増し、藪蚊が一どきにふえたようだ。

薄暗い苫屋根の下で、お新の体は油でも塗ったように光っていた。

「いい肌だ。肉置きもたまらねえぜ。おめえに行き当って、運がよかった」

男は相変らず、陰鬱に言う。

「ねえ、もう御免だよ、お前さん。まだ何か、するつもりかい？」

「いまのは序の口だ。厭なら一両は取り返すぜ」

「そうは言わないけれどさあ。体がバラバラになりそうだ。ちっとは手加減をしとくれよ」

と、お新は弱々しく頼む。

「手加減をすりゃあ、おれの楽しみは消えるのよ。片輪にもしねえ、傷もつけねえから、安心しろ」

男は黒い小さな風呂敷包みを持参していたが、その中から取り出したのが、細引の縄と、なめし革の鞭。鞭の長さは二尺ばかり、握りはかなり太く、先がいくつにも割れている。罪人の叩きに使うのと似て非なるものだが、手製だろう。

これも話の種と、お新は怖い道具を横目にしながら、観念した。責苦に会ってみるだけのことはありそうな気がする。つまり、なにやら金っ気が匂うのだ。

男はばかに手際よく、お新を縛ったが、いささかのたるみもなくギリギリと、首から両腕、胸、両の太腿までがん字がらめにされ、さらに股間にまで一本、通されている。

身動きをすれば、その一本の痛みで、さながら体を二つに裂かれるよう。だが、肉に食い込む痛みで、身動きをせずにはいられない。すると、大事なところに焼火箸でも突込まれたようだ。

男が何をせずとも、そこに転がっているだけで、お新はうめき続けた。

それを腹這いにさせ、尻を立てさせ、例の鞭で所嫌わず打ち叩く。みるみる、尻から背中まで、無数に赤い筋がついた。

男は時々手を休め、お新をゆり動かす。

お新はうつつになった。その状態では、目もくらむような痛みが、至上の快感と分ちがたくなっている。

……次第に意識が遠のいてゆく。その時はじめて、いましめが楽になり、股間の緊縛も解け、男がうしろから入ってきたようだったが、夢の中と同じだった。

われに返ると男の腕の中で、男は子供でもあやすように、抱き上げたお新をやさしくゆすっていた。人が変ったようだよ、妙な野郎だ、とお新は思う。目付きすらやさしくなっている。

「おめえ、なんという？」

「お新さ。いつもここにいるから、また来とくれ、と言いたいが、願い下げだよ。お前さんの名は？」

銀五郎という。なんの渡世とも、どこに住むとも言わなかったが、慣れた縄の掛け様から、およその見当はつく。

「おれはこれから、何度もおめえに会いてえ。気に入ったのだ。痛いばかりでもなかったろう、お新。言うに言われねえよさがありはしねえか？」

「生憎だねえ。あたしゃ痛いばっかりさ。それでも、見てはみたいねえ、お前さんの責め折檻を」

「そいつはいい。うちにきねえ。たっぷり見せてやるぜ。そのうちおめえも、されるのがよくなってくる。そうしたもんだ」

「お前さんは昔からそうなのかい？」

「昔はまっとうだった。なんの因果か、こうなっちまった。当り前にしちゃあ、なんともねえ。ばかな話さ」

銀五郎はふと、ひどく疲れた顔をした。

「……お新、おめえの客で、おれのようなのはいねえか？」

「そうさねえ、いなくもないが、聞いてどうするんだい？」

「同病相憐れむで、いい思いをさしてやりてえのさ。あの手この手も教えてやり、女にも会わしてやりてえのよ。責めさいなまれて喜ぶ女は、そうそういねえからな。おれはよく知っている」

「体裁のいいことを言ってるよ。金もうけじゃないか。馬鹿面の旦那から、巻き上げようてんだろう」

銀五郎はじめて、しわがれた声で笑った。

「そのことそのこと。タダでするものか。だが欲得抜きの気持も、まんざらねえわけじゃねえんだ。……どうだお新、カモになりそうな旦那を連れてこねえか？　礼はするぜ」

「一両ほしさに我慢したか。ザマはねえ」

と女髪結お徳。お新は腰巻一枚、裸で寝そべっているが、背中のみみずばれは、まだ残り、縄の跡も消えていない。

因速寺裏の、卯平の墓守小屋だ。そのあばら家の中、どこもかしこもジメジメ、ベタベタしている上、藪蚊の大群がわんわんと音を発して、蚊遣りの煙の隙を縫う。

卯平は酒をくらってゴロ寝をしているが、まつわりつく蚊を、団扇で叩きっぱなし、眠れたものではない。

「銀五郎の家へ行って、また一両。悪くはなかろうが？」

笑いかけてお新は顔をしかめ、ウッとうめいた。

「おめえは欲深さ。体が丈夫と言っても、こわれたらおしめえだ。あとの一両は何をされた？」

「海老責めだ。全く、二つに折れるかと思った。ここを先途とわめいたが、銀五郎め、よだれを垂らしていやがった」

「おめえはまた、下から垂らしたろう。物好きな。海老責めだけは、わたしも知らねえ」

お徳は黒い大口をあけて笑った。

海老責めは牢問い（拷問）の一つで、上体をうしろ手に縛り上げ、同じ縄で、あぐらに組ませた両足首も縛り、縄を締めつけると、足首が額にくっつくまで、まるで海老のように、体がひん曲るというやつだ。

男はともかく、女が海老責めに遭っている図は、見られたものではないという。その責苦を免れるため、女はよく小便をしたものだそうだ。

肌の色は赤くなり、次に蒼白になり、やがて紫色になり、ほっておけば死ぬ。

あれから三日目、舟にやってきた銀五郎に付いて行った先が、さほど遠くもない寺裏、冬木町の、見たところ植木屋で、町中ながらひっそりしていた。家は厚い植込みに囲まれた形だ。なるほどこれなら、女の悲鳴も外へは洩れまい。

ところで、家の中はガランとし、無人のようだった。戸締りもなく、不用心きわまるが、上ってみると、女が一人、柱につながれていた。

二

年頃ははたちほどの女で、細面、体もかぼそく見えた。顔色は透き通るよう、目鼻立ちも尋常だが、目がどこかうつろで、悪い酒に酔ってでもいるのかと思われるが、酒の匂いはしない。

小ざっぱりした着物に、衣紋の乱れはないが、横坐りになった腰付きが妙にぎこちなく、浮かし加減だった。

柱に結びつけてあるのは、細い鉄のくさりで、それが女のどことつながっているのかと見ると、前の合わせ目、それも帯の下から、くさりが入っているのだった。

女は帰ってきた銀五郎を見ると、喜びと怖れがごっちゃになったような表情を、一瞬見せ

たが、口は利かなかった。ただ、唇が開き、わないたばかりである。犬のようだ、とお新は思ったが、それでハッと気がついたのは、くさりの役目だ。くさりは、女のあの割れ目に、したたか喰いこんでいるに違いない。そればかりではなく、細工もしてあり、おそらく体内には、少し動いても耐え難いような異物が、くさりにくっついて入っているのだろう。

着物にかくされてはいるが、くさりは女の体の至るところを巻いているのだろう。うつろで、酔ったような目の色は、女が絶えることのない痛みと、奇怪な恍惚境の中にひたっているためなのだ。

お新は不覚にも、膝頭が震えだした。決して派手な見世物ではないが、これはずんと渋い、奥深い責め様ではないか。

「逃げちゃあいけねえから、こうしている」

と、銀五郎は見え透いた弁解をしながら、

「おとなしくしていたか？　いい子だな」

と女に言い、その前に行って身をかがめると、着物の外に出ているくさりを、ほんの少し引張ったようだったが、それだけで女の体はピクッと硬直し、笛を吹いたような声が洩れ、同時に、自由な両手が男の腰を巻いて、しがみついた。

男はわざと邪険に女を突き離し、女はこんどは、まぎれもない悲鳴をほとばしらせて、横倒しになり、手足を芋虫のように縮めた。

「だれだい、ありゃあ？　まさかお前さんの女房じゃあ……」

「かかあは死んじまった。おれが殺したようなもんだ。当り前の女だったが、おれの仕込みで、好きになったのだ。しまいにゃあ、かかあのほうから、もっとやってくれ、死んでもいいから責めてくれと、催促よ。命にかかわるからと言うんだが、聞かねえ。とうとう……」

めったに人に弱味を見せない男だろうが、この時は、つい本音が出たというものだろう。

「それでも止まねえんだね？」

「ああ」

銀五郎は苦しそうな笑顔になって、

「おれは前世で、何か大変なことをやらかしたに違えねえぜ。だからこのザマよ。業ってもんだ。……よそうよそう。クヨクヨしたって始まらねえ。お新、せっかく来てくれたんだ。おめえのもだえ様を見せてくれ」

「願い下げだと言ったじゃないか。第一、その人がいるのにさ」

「あいつはあいつだ。なあ、一両出すからよ」

「また一両かい？　ウンと言いたいが、命と引替えはお断りだよ。それにこないだの痛みも取れないんだから」

「なあに、縛りで、痛えのは飛び切りだが、その代りすぐ済む。いっとき我慢すりゃあ、今後二度とはねえ目にあったと、語り草だぜ」

それが海老責めだとは知らない。まず舟の中と同じようなものだろうと、承知したのだが、やられたのは、女の目の前だった。

素っ裸で大あぐらをかかされ、はずかしいところは丸出し。足首の縄が首へ回され、グイグイと引き上げられると、はだかった両足そのものが、上へ上へともち上り、遂には額にピタリとくっつく。

背骨の痛さ、両脚の痛さ、それに背に回された手首から肩までの痛さは言語に絶する。ことにお新は堅太り気味だから、まずその苦痛は人一倍と言ってよかろう。

女は茫乎とした表情で、もだえ苦しむお新を見ていたが、お新の発する叫び声、うめきに自分も和しはじめ、腰のあたりを、着物の上から掻きむしるようにした。

お新は気を失なわずに済んだ。というのは、銀五郎が早々に切り上げてくれたからだろう。海老責めは危険で、奉行所でもめったには行わぬ仕方だ。

銀五郎はふとんにお新を横たわらせ、全身をもみほぐしてくれた。さすがのお新が、一刻ほどは動けなかった。ようやく銀五郎は、通常の愛撫の手を加えてくる。それもみな、女の目の前だ。

「悪いねえ」

お新はニヤリとして、

「その人はお預けをくった犬のように、つなぎっ放しかい？　放して、こっちに呼んだらどうだい？」

「ほっておいて構わねえ」

と、銀五郎は冷たく言った。

「……おめえに女の責め様を見せるはずだったな」

「その人を見ただけで十分だ。ひどいいじめ様だ。……ほれ、あんなに腰をうごめかして、されたがっているよ」

女はねじれたような姿勢で横になり、泣いていた。

「そうか。まあ、もう一つ見せてやろうよ」

その女の名はお光。いまのところは女房代りで、かれこれ半年もここにいる。あれが好きで、体付きがまた向いているので、気に入っているのだと銀五郎は言ったが、どんな素性の者なのか、それは教えてくれなかった。

「ここにいるのは、お光ひとりかい？　あんなふうに縛ってつないでいるのじゃあ、家のこともできまいに」

「仕事をさす時には放してやる。時にはくさりも解いてやるが、お光は、自由になるのをあんまり喜ばねえのさ。病みつきだ。そろそろ入れ替えねえと、命を縮める。死なすのはかかあひとりで沢山だからな」

「ほかにだれもいないのは妙だね。お前さん植木屋だろう？　弟子か奉公人か、いそうなも

んじゃないか」
「人を置きゃあ、楽しみができねえ。おれは金はある。何かしねえと世間体が悪いから、植木屋らしくしているだけのことだ」
「本職があるのかい？」
「本職？」
銀五郎は目を細め、冷たい笑みをチラと見せた。
「本職は女衒だ。そう言ったろう？　おめえは思いの外、詮索好きだな」
お新はヒヤリとした。こっちを向いた顔が、捕り方のそれだ。
「お前さんのような人が、めずらしいからさ。それにしても……」
お新は床の中から、お光を見やった。
お光は元通り、横坐りになり、柱にもたれかかっている。からみ合った男女が目の前だが、嫉妬に眉根を釣り上げるでもなく、渇きに身をもむでもなく、ただトロリとうるんだ瞳が、二人に向けられているだけだ。
「どうだ、ちっとは痛みが引いたか」
「あれほどにされて、たやすく引きゃあしないよ。帰る時は駕籠を呼んどくれな」
「それにしちゃあ元気だな、おめえは。変った女だ」
「客はここへ寄越しゃあいいのかい？」

「そうだ。どんなやつだ？　口の軽い野郎は困るが」
お新は巽屋孫兵衛のことを、嘘八分で話した。無類の女好きだが、並みの遊びには飽き果て、この道に入ったが、これという女がいない。銀五郎が世話をすると話してやったところ、大喜びだった。
木綿問屋のあるじで、本人は少々のろまだが、金はある。身許を知られたくないと言うから、詳しいことは話せない……
「シンから好きなやつなら、占めたもんだ。たんのうさしてやるぜ。いいお得意になりそうだな」
「相手の女は……」
「おめえが案ずるにも及ばねえ。滅法いいのを用意する」
銀五郎は起き出すと、どこからか猫を一匹抱いてきた。かなり図体の大きな三毛だったが、それを見るなりお光が、ヒッと言って小さくなった。
猫は銀五郎にほうり出され、うまく畳の上に飛びおりると、お光を見上げてミャーと鳴いた。
お光がしきりに厭々をするのに構わず、両手をうしろ手に縛り、猫の首に付けた縄の先を、くさりにしっかり結び付けた。
猫はおとなしくしている。次に銀五郎が奥に入って持ってきたのは、ナマのいわしの六、

七寸もありそうなやつで、これを猫から大分離れたところに置いた。

ようやくお新にも、銀五郎の意図が飲みこめたが、猫はいわしを取ろうとあせるのだ。どっこい、首縄がくさりに結びつけてあるから、いわしに届かない。猫はしきりに飛びつこうとして、縄を引張る。それにつれて、くさりも前に強く引かれる。

引かれるたびに、お光は絶え入るような声を出し始めた。くさりを引き戻そうにも、手は縛られている。

くさりも、猫の首縄も、ピンと張った。猫の飛びつく動作は間断なしで、そのたびにおそろしい苦痛の波が、お光の股間に伝わるようだ。お光の声が絶叫になり、ぶるっと震えて悶絶した。

「死なないかい？」

お新のささやきも震えている。

三

「一体、うさん臭え野郎だね。素性が知れない。冬木町の家には、三年前から住み付いたようだが、もとはだれぞの妾の家で、家作をポンと即金で買い取ったそうだ。近所付合いは全くなし、植木屋らしくはしているが、迷い込んだやつに鉢物を売ってやるくらいのもので、

植えてある分は手入れもしねえ、掘り出して客のところへ運びもしねえから、近頃じゃあ買いにくる客もいねえ。何をするのか、時たまぶらりと出掛ける。女は何度か替ったようだが、みんな、まるっきり外へは出なかった。怪しいやつだから、町方から調べに来そうなもんだが、どういうわけか、ほったらかし……まあそんなところだ」

とお徳。卯平があとを受けて、

「あいつは八丁堀手下の岡っ引上りじゃあねえぜ。いろいろ、そっちのほうに当ってみたが、知ったやつがいねえんだ。お新の見当違えじゃねえか？」

「おいらの見当は、てめえより確かさ」

と、お新があざ笑って、

「調べが足りねえのよ、卯平」

「待ちな。おれはお新の話を信じるが、卯平の調べが不足とも思わねえ」

と、孫兵衛がとりなして、

「町方同心の手先ではなくとも、岡っ引の同類はいくらもいる。早え話、火付盗賊改ための手先が、似たものだ。町方が銀五郎を取り調べず、知らぬ顔でいるのは、そっちがにらみを利かしているせいじゃあるめえかな」

「なるほど、そうかもしれない」

とお徳が同意して、

「そう言やあ、訪れる者もめったにないが、何か武家奉公の小者のようなのがくることもあるそうだよ。火付盗賊改めと言やあ、御先手の加役だから、符牒は合うね」

西念寺横町、巽屋の奥の部屋に、例によって孫兵衛の一党が勢ぞろいだった。夜に入って、寒いほどに冷えてきた。

お京は酒を熱燗にし、一同に振舞っている。山賊の酒盛りのようだが、無雑作に大皿に盛られた肴は、安物ではない。

「こんどは、お京の出番はないそうだ」

と、お新がニンマリして、

「おめえをあの目に遭わせたかったね。おいらだから、五体がバラバラにもならなかったが、おめえならつぶれていようよ。その代り、銀五郎はよだれの流しっ放しだったろうが」

「その野郎は、どうかしているよ。お新は男を責めつけるのが似合いで、男にやられるなんぞは不似合も不似合、ねえ卯平」

苦い顔の卯平にへへと笑って、

「巴御前か滝夜叉のようなのが、猫をかぶって、ヒーヒーと責められている図は、さぞかし見ものだったろうね」

「無駄口を叩きやがる」

と、卯平がお徳をにらんだが、すぐ吹き出した。孫兵衛も苦笑した。

「岡っ引、御用聞きは、人を捕えちゃあ縛り、叩きをやる。白状させるためだが、しまいには白状より何より、痛めるのが楽しみになる。女とくりゃあなおさらだ。毒だなあ。そいつが体に回って、女と交わるだけじゃあ足りず、責めずにはいられなくなる。……十人が十人、そうでもあるめえが、下地のある野郎が、病みつきになるのだ。銀五郎がその口だろう。十手捕縄は捨てても、縛り叩きはやめられねえ、加役の手先だったろうって見当は、それからもつくのさ」

孫兵衛の言葉は道理で、一同はちょっと黙った。銀五郎は一面、のろわれた男でもある。

「それはそれとして、乗込むのはいいが、何しろ仕事が小さくはねえか？」

と、卯平が言った。

「捕り方上りの男が一匹。客に女を売り込んでもうけはしたろうが、タカが知れている。絞り上げて、いくらにもなるめえよ。これが大掛りに、女の数も責め道具もそろい、客が押しかけるほどなら話は別だが、小家に女がたった一人……別のを用意すると言ったそうだが、わかったものじゃねえ。こいつは、御大がネギを背負って行くほどのものとは思われねえが」

「余計なことをしたとお言いかい、卯平」

お新が口を尖らせて、

「一度に一両出したやつだよ。当り前なら、あんなことをさしたって、二分がせいぜいだ。

金はうなっているはずだ。一人ならいっそ仕末がいいってもんじゃないか。女をいろいろ知っているのも、嘘とは思えないがねえ」

「知っているなら、わざわざ相手探しに、てめえの苫舟にまでもぐることはあるめえじゃねえか」

と卯平。

「相変らず、うるせえ口喧嘩だ。銀五郎ひとりでしていることなら、なるほどおれが行くこともなかろうが、野郎は上とつながっていると、おれは見ている。小者が出入りするというのがそうだ。さしずめ、上と言えば御先手組の侍、威張るばっかりで金のねえ口だろうが、銀五郎の悪い癖を知り、弱味を握ったが幸いで、何やらからくりを思い付き、銀五郎を働らかしていやがる……確かにそうだとも言えねえが、突込んでみるだけのことはありそうだぜ」

「そんなことなら、話は違ってくるが」

と、卯平は腕を組んだ。

「お新という女から話を聞いて、やってきた者だが……銀五郎さんとは、お前さんですね？」

はやる気持を、愛想笑いにまぎらしたという孫兵衛の顔は、いかにも狡く、好色そうだ。

身なりはことさら地味に作り、物好きな遊びに大金を投ずる男とは思えないようだ。

出迎えた銀五郎の鋭い視線が、一瞬のうちに孫兵衛の頭から足先まで、なめた。

「こりゃあようこそ。お待ちしておりました」

と銀五郎が頭を下げたのは、まず安心と見た末だった。念のため、お新との仲、こんどはいつお新に会い、どんなふうに聞いたか、孫兵衛にしゃべらせてから、部屋に上げた。

「おや、こりゃあ」

と、孫兵衛は立ちすくんだが、お新が言った通り、お光というのが柱に縛られていた。

ところがきょうのお光は裸だった。かぼそい体に、くさりが縦横無尽に巻きつき、ことに腰回り、下腹の辺りは、まるで付け根を中心に、クモの巣を見るようだった。そこからくさりが出て、柱につながっているのが、あからさまに見える。

「かわいそうに」

と言うと、孫兵衛はお光に近付き、くさりを握ってちょいと振ってみたが、それだけでお光はのどを鳴らし、全身を雷に打たれたように突張らせた。孫兵衛の顔に笑いが広がった。

「わたしの相手はこの人かい、銀五郎さん」

「いえ、別におります。娘同然の若いので、どうされるのか、何も知りません。それも面白うございましょう？　教えてやる楽しみがございますからね」

「なるほど、そりゃあ新らしい。お前さん、この道には詳しい人だね」

「旦那、きょうご満足をいただけましたら、次はまた、一段といいのをお世話いたしますよ。場所も替えます。この家じゃあ、実のところ、ろくなおもてなしもできませんのでね。……まあ、お茶を一服さし上げましょう」

「いや、わたしは早いとこ相手を……」

「せくことはありません、旦那」

と銀五郎は笑って、

「しばらく、この女の御見物はいかがで？　いろいろやり様はありますが」

「いやいや、こうして見ているだけでけっこうさ。いかにも耐え難いようだが、何を入れているんだね？」

「なあに、張形の変ったやつ、それにいつもヒリヒリとくる塗り薬で。旦那、道具がお入用なら、麻縄、くさりをはじめ、首枷足枷の類、それに棒、鞭くらいのものなら、ございますぜ」

「縄を貸してもらいましょうか。ごく細いのがいい。ところで謝礼だが、いくらだね？　いま出しましょう」

並の遊びとは違い、女にもしやということもあるから、二両、と銀五郎は言った。

遊びの部屋は、また奥にある。広さは四畳、四方が壁で、高いところに小さな明り取りの窓が一つ。入口もただ一つで、分厚な板の一枚引戸、ねじ込みの鍵がかかる。この部屋なら、

泣いてもわめいても、音声はあまり外へは洩れまい。

部屋の中にポツンと、十七、八の娘が坐っていた。ふっくらした顔立ちで、目鼻もかわいい。肌色はやや浅黒く、全体にあどけなさが残っている。

気は強そうで、入ってきた男二人をにらみつけた。

「それじゃあ旦那、せいぜいお遊びなせえ」

銀五郎は孫兵衛に細引の縄を渡すと、女をチラと見て、出て行った。孫兵衛はゆっくり、鍵をかけた。

縄が女をひどくおびえさせたらしい。あとずさって、壁に張りついてしまった。

「何も怖いことをしやしない。安心するがいい。話をしよう」

と孫兵衛が近付くと、女はパッと身をひるがえし、反対側の壁に逃げた。

「お前をどうこうしようというんじゃない。聞きたいことがあるんだよ」

と言っても、女は頭から信じない顔だ。

「名はなんと言うんだ？　どうしてここへ連れてこられた？」

女は答えない。

戸の外で、微かな音がしたのを、孫兵衛の耳は捕えた。銀五郎はあくまで用心深いやつで、中の様子をうかがっているのだ。のぞき穴のようなものも、あるかもしれない。

孫兵衛は決心せざるを得なかった。追い駆けっこが始まった。

四

……無理無体に女を犯すって図だな。おれがその主役をするとは驚いた。

女を追っ駆けながら、孫兵衛は肚の中で、おかしさをこらえている。

……罪な話だが、まんざら悪くない。この手の罪科が跡を絶たねえのも、よくわかる。おれは、いい目を見ているってことになるかな。

女は息を切らしかけているが、逃げるのをやめない。帯がゆるみ、ずり下った着物の裾を踏んで、何度も倒れるが、また起き上る。

次第に立っていられなくなり、四つん這いになった。

……芳国に見せたかったな。やつめ、腹をかかえて笑い転げるか、それとも敵に出会ったような顔をして、絵筆を取るか……

女はとうとう動かなくなった。俯伏せに伸び、肩が波打ち、呼吸の音は泣声に近い。

帯に手をかけても、女はあらがうどころではなかった。わざと乱暴に、衣服を剝ぎ取ったのは、銀五郎の目を考えたからだった。

女はされるままで、色づいた肌はしっとりしてきた。それが次第に、汗で光ってくる。すらっとして、引き緊った体をしていた。

「若えなあ」

と、思わず孫兵衛がつぶやいたほど、初々しく、伸び盛りの体だ。まだ小さめに、こんもりした乳房、腰から太腿あたりの若竹のような肉付きは、銀五郎の言葉を裏書して、ほとんど男の味を知らないと言っていいだろう。

孫兵衛は下帯だけは締めたまま、女にのしかかり、その耳許に口をつけた。

「黙って、落着いて聞きな。おれは客を装って来た者だ。おめえを助けてやる。銀五郎をだますのに、それらしいことをするが、我慢して、上手に合わせてくれ。おれが何者か、どう思ってもいいが、とにかくおめえの味方だ。わかったら一つうなずけ」

女は下から、大きな目をして孫兵衛を見ると、うなずいた。

孫兵衛は女の下腹の、まだ淡い春草の一むらをつかみ、グッと引いた。不意を打たれた痛さで、女はキャッと言った。

「その調子。痛くはなくとも、派手にわめきな。まず、尻を打ち叩くぜ」

「厭っ」

と言うのを、起き上った膝へ、腰をかかえ上げて載せ、平手で叩き始めると、女はイタ、イタ、イターッと叫びだした。少しは痛かろうが、声を上げるほどでもないはずだから、調子を合わせているのだ。音だけは大きい。……それでも、叩いているうちに、女の尻は熟れた桃のような色になってくる。

「うめえぞ。もう少し痛くしてやろうか」
孫兵衛にもいたずら心が多少はあり、女の手足を曲げたり伸ばしたり、絞ったり広げたり、その間に、所嫌わず叩き、つねりで、そのうち、女の悲鳴やうめきが、本物か芝居か、聞き分けられなくなってしまった。
「どうも、勝手が違って、間が持てねえ」
ややあって、孫兵衛は手持無沙汰の体になり、また、ばかばかしく、飽きも来ていて、そうぼやいたが、女はむしろジックリ落着いてきて、夢見るような瞳を、孫兵衛に向けるのだ。手を伸ばして、孫兵衛の膝坊主をグッとつかみさえした。
「おい、しっかりしろ。みんな芝居だぞ」
と、孫兵衛は多少あわてた。
それにしても、時は大分経っている。このあと、縛りをやれば、たっぷりたんのうしたことになろう。
「銀五郎の悪事をあばくには、おめえの身上話を詳しく聞き取らなくっちゃならねえ。睦言のようにして、そっと話してくれ。承知か？　よし。まず、なぜ銀五郎に付け込まれた？　おめえ、何か手がうしろに回るようなことをやらかしたろう」
名はお辰で十七。色恋沙汰は何もないが、出来心で奉公先の店の金を盗んだ。親と弟、妹が極貧の暮しで、悪い事ながら、どうしても要る金だった。

それを番頭に見つけられ、黙っていてやるから、言いなりになれと脅された。番頭に身を任せているうち、そいつはよほど悪党で、また盗みをそそのかし、おれがうまくごまかしてやるという。聞かねば、ばらす……
せんかたなく、帳場の小金を盗んだが、大方は番頭が取上げてしまった。
しつっこくて、ゲジゲジのような男だった。この先ずっと、まつわりついて離れないだろうと思うと、人のいい主人に済まなくもあり、前後の思慮もなく、番頭を刺してしまった。その場から逃げたが、寝ぐらもなくうろついているところを、遊び人のような男につかまり、そいつから銀五郎に渡された。
銀五郎のツボを心得た、容赦ない調べで、あっけなく白状させられたところ、縛りも突き出しもしないから、しばらく客を取れ、稼ぎはわけてやるし、いっとき勤めれば、無事に家に帰してやると言われた。……だが、こんなこととは知らなかった。早く逃げ出したい。
「おれが初めての客かえ？」
「はい。お客さんでよかった」
「向うにお光って女が裸で縛られているが、口を利いたことは？」
「いいえ。二人にしておかないんです。それにわたしは、来て五日にしかならないんです。あの人も助けないと、死んでしまう……」
「むろん、助けるつもりだ。銀五郎は許さねえが、しばらくは猫をかぶっていなくっちゃな

らねえ」

そのあと、孫兵衛はお辰を縛った。あまりゆるく縛ると、縄目がつかないから、きつくする、痛いが辛抱してくれと、細引でやりだしたが、縛るのも縛られるのも苦手で、とても銀五郎のようにはゆかない。おまけにお辰があえぎ声を出して、

「もっときつくしていいんです、もっときつく……」

と訴えるから、ますます手許が狂う。

「お辰、こういう味を覚えるのはよくねえから、イヤというほどの痛え目を見せてやろう。こりるがいい」

お辰はヒーッと言った。

なんとかお辰を縛り上げた。これで無残な縄目は付くだろう。加減をせず、縄もごく細いものだから、痛さはひとしおのはずで、お辰は歯を食いしばって、うめいていた。

股に縄を通すのだけはやらなかったが、両足をそろえて縛り、うしろ手にくくった縄につないで締めた。お辰のうめき声が高くなり、低くなり、反りかえった体が、芋虫のようにうごめいた。

「もうよかろう」

と孫兵衛がお辰のいましめを解いたのは、小部屋に入って一刻半も経った頃だ。ぐったりした上へ着物を掛けてやり、孫兵衛は部屋を出た。

「銀五郎さん、いや久しぶりに、なんとも言えぬいい思いをしましたよ。このところ頭に悪い血が溜ったようで、気鬱と言うか、ハッキリしなかったが、これで頭の中が洗われたようだ。……それで、欲を言うようだが、あのお辰にはまた会うとして、飛び切りの別口というやつに、あすにでもあさってにでも、引き合わせていただけまいか。騎虎の勢いで、わたしの気持はもう、止まらないんだ」

「きっとご満足がゆくと思っておりましたが、ようござんした。そりゃあお客さんのお望みなら、なんとでもいたしますよ。それじゃあ、明後日……お新の苫舟のある辺りへでも、お出まし願いましょうか。刻限は暮六ツ（午後六時）ってことに。そこから、さる屋敷にご案内いたします」

「屋敷とは……」

「御旗本の持ち家でござんしてね。まず寮で。その旗本はいい加減な侍で、寮は賭場やなんぞに貸しておりますよ。こっちも金をやって、ちょいちょい使っております。外に洩れる気遣いはございません。少々荒れてはおりますが、なかなか広く立派で、道具、仕掛けもそろっております」

「わたしの相手になってくれるのは、どんな女で？」

「武家の奥方で」

「えっ？　そいつは剣呑じゃないかい？」

「そこは抜かりもござんせんよ。お会いになりゃあわかりますが、当然そこいらの女共とは品が違います。美しさも美しく、肌ときたら深山の雪……そのくせ、滅法責められるのが好きで、わたくしとはひょんなことからご縁が出来ましたが、月に二、三度は屋敷にお出ましで。ところが注文がやかましく、気に入った男でないと、口も利かずに帰っちまう。……だがお客さんは大丈夫、太鼓判を押します。いえ、お世辞じゃねえ、どこか並みでねえところがおありになる」

銀五郎の目がキラッと光って、

「野暮なふりをなすっても、わたしにはわかりますよ。しっかりして、強くって、いかにも奥方好みですぜ」

「そうおだてちゃあいけない。一体どのくらい持って行きゃあいいんで？」

「奥方だからと言って、べらぼうに高くはねえんです。奥方も好きでくるんですからね。三両、出していただけますかい？」

五

「銀五郎さん、わたしはお新と何度か会っているが、なにしろしたたかな体付きで、一向に興が乗らないから、このごろは御無沙汰だが、お前さんは気に入ったようだね。あれで、責め甲斐があるかい？」

「変っているから、かえっていいんで。なよなよとしたのは、いまにも絶え入りそうで、この道に入りはじめは、そのほうがいいんだが、こっちのように甲羅に毛が生えてくると、あまり順当で、つまらねえ。そこへ行くとお新は手答えがありますからね。兎をつかまえるより、猪をつかまえるほうが、厄介じゃああるが、面白えようなもんさ」

銀五郎の物の言い方は、微妙に変ってきている。孫兵衛を、客より仲間と見たところがのぞいている。その述懐も、商売気を離れた正直なもののようだった。

そのお新は墓守小屋にごろ寝をしているだろう。さすがに海老責めはこたえたらしく、一旦だらりとすると、稼ぐのが厭になったと見える。主のいない苫舟は、なんだか軽そうに揺れている。

梅雨の晴れ間で蒸し暑く、暮六ツでも熱気は去らない。

孫兵衛は駕籠、銀五郎は歩いていた。目ざす屋敷は深川霊巌寺の北、海辺大工町の一角というから、道のりはかなりある。

着いたのは追剝ぎでも出そうなところで、草茫々の空地が多く、囲りにポツンポツンと小ぶりな武家屋敷が見える。所々、倒れかかった板塀をめぐらしたのが、その家で、門の屋根瓦に草が生えている。

門番もいず、中へ入ると飛石が草にかくれている。ほこりっぽく、ガランとした玄関。

呼んでもだれも出てきそうになく、銀五郎はさっさと式台に上る。
「だれもいないんだね。薄っ気味が悪い」
と孫兵衛は言ったが、実は人の気配を感じていた。だれがどこにひそんでいるかはわからないが、かくれている。
「相手はちゃんと待っておりますよ。飲み食いなら、ちょいとしたものを用意しております。おっと、履物は持って行ったほうが……万が一の用心ですがね」
屋敷の中はさすがに広い。
「旦那、早速行きますか、それとも一休み……」
「早速がいいね」
「せっかちだねえ」
銀五郎はフフフと、うれしそうな笑い方をした。
「それじゃあ行きましょうが、その前に、のぞいてごらんなさい。あまり見られねえことをしているから」
「と言うと、わたしのほかに？」
「先客がひとりね。こっちだ」
昔は隠居所だったかもしれない、その離れは庭下駄で渡るようになっていたが、三方を竹の植込みに囲まれ、秘密めかしい。下駄を履いてそちらに回り、竹の隙間から目をこらすと、

妖しい光景が展開していた。
八畳ほどの座敷にいるのは、裸の男と女。女は手をいましめられた上、円い台の上にまたがされていて、膝、足首を脚にゆわえつけられている。その前にうずくまった男が、把手のようなものを回している。回っているのは心棒ですよ」
「ろくろを回しているらしく、右腕がゆっくり動く。
と、銀五郎がささやいた。
「じゃあ、その心棒が、女の……」
「その通り。ただの心棒じゃねえ。旦那が見たらたまげるでしょうよ。たまったものじゃねえ。だから女はああして」
銀五郎の声がくぐもって熱っぽい。
なるほど、女の苦しみ様は、まるで断末魔だった。すさまじい声を上げているに違いないが、口にはさるぐつわだ。
「股が張り裂けそうじゃねえか」
「それも地獄の痛みだ。その上、あの客は来た時からああして、ろくろを回し続けている。考えてみなせえ。女が水気って水気をみんな出し尽して、どうなっているか」
女が前へ倒れかかると突き放し、うしろへのけぞれば、首枷につけた紐で引き戻す。把手を回しながら、男はそんなこともしているのだ。

「興が乗ってきましたかい、旦那。それじゃあ行きましょう」

ほのめく灯りの中で仕置を受ける女。髪がざんばらだった。どこのどんな女かと、孫兵衛の目の中に、女の姿が残った。

案内された部屋は、母屋の一隅で、畳敷きと板の間とに分れていた。畳敷きはちゃんとした体裁で、床の間もついている。真中に夜具がのべてあった。

板敷きは簀の子の作りで、隙間があるが、一隅に水をたたえた玄蕃桶と、柄杓が置いてあるので、そのわけが推察できる。水責めがやれるのだ。

天井近くの壁に、滑車がいくつも、ずらりと並んで取りつけられ、縄が掛けられている。縄の一端は、滑車の真下の壁の鉤に結びつけてある。吊り責めに使うものだ。

ほかに各種の縄、くさり、竹や革、棕櫚縄らしい鞭も備えてある。

「何をしたっていいんだ、旦那。へへへ、犬猫のように扱かやあ喜ぶんだから」

女を間もなく寄越すと言い、銀五郎は消えた。

かなり待った。退屈して眠気がさしてきた頃、襖がスーッとあいた。ほとんど足音を立てずに、裾長を着た奥方が入ってきた。

鼻が高く、顔形はくっきりとし、なるほど上品だが、見下したような、きついところもある。

奥方はかしこまった孫兵衛を流し目にし、ややそっぽを向いてピタリと坐った。口許に冷

やかな、謎めいた笑みがある。

「あなた様がその……嘘のようでございますな。どうも、勿体ないようで」

奥方はなんとも答えず、つ、と立って板の間へ行き、革の鞭を選んできて、孫兵衛に手渡した。これで、と言うのだろう。鞭はおそらく舶載のもので、黒い色をし、しなやかで長い。先は糸のように細い。鞭はまるで生きもののように、奥方の体を巻いて、傷を付けるだろう。

奥方はみずから衣服を脱ぎ、背を向けて、板の間にすらりと立った。孫兵衛は鞭を取り、

「遠慮はいたしませんぜ」

と、不覚にも語尾が震えた。肌にはシミ一つなく……と言いたいところだが、微かに鞭の跡、縄目のあとが消え残り、肩口、尻などにアザが見られる。それがむしろ、なまなましい。

孫兵衛は鞭をふるいだした。小気味のいい音を立て、鞭は奥方の肌に吸いつき、まつわる。奥方は声も立てずに立ち、鞭が襲う一瞬だけ、ピクッとする。

最初は遠慮気味だったが、次第に力を加えた。速度も加えた。

「強く。もっと強く。もっとじゃ」

と、奥方は口走りだした。やがて食いしばった歯の間から、声が洩れ始め、白蠟の像のようであった体もゆらぎ、腰が落ちそうにもなった。……それから奥方は、クルリと前向きに

なった。孫兵衛は無表情、容赦なく正面に鞭をふるう。よほどこたえるはずである。奥方は口を大きく開き、ウッ、ウッとうめきだした。

「ひとつ、お見舞申そうか」

と言った最後の一振りは、背から回ってみごとに両の乳首を打ち、おそらく裂傷を作ったであろう。奥方はのどが破れそうな声を上げ、板の間にくずおれた。

「こうなりゃあ、容赦はしねえぜ。何がさむれえの……」

孫兵衛は裾をからげて帯にはさみ、ズカズカと出て行って、いきなり奥方の腕をねじ上げると同時に、横っ面を足で踏みつけた。キャーッと悲鳴。なおも板の面に額をにじりつけておいてから、

「おい、尻を立てろ。立てねえか、このアマ」

その剣幕に呑まれて、おずおずと立てたところを、したたか足蹴にし、またたまぎる悲鳴が上ったが、それを聞きつけたと見え、走り寄る足音がし、襖が蹴破られた。孫兵衛の一瞬の笑みを、だれも知らない。

「狼藉者め。神妙にせい」

と、飛び込んだ侍が、腰を抜かした形の孫兵衛に抜身を突きつけてどなった。

「火付盗賊改めの者だ。おのれは町人の分際で、武家の妻女をあのように……許さぬ。それへ直れ」

小者がひとり付いていて、これが銀五郎に縄をかけ、引いていたが、その引き綱を壁の鉤につなぎ、奥方の介抱にかかった。奥方は髪もがっくり、孫兵衛に踏みにじられた姿勢のまま、気を失なっているようだった。

「わたくしは何も、このお方に勝手に乱暴を働いたのではございませんので。言わば納得ずくの……」

「言い訳は無用。斬ってやる」

「そんな、あなた……どうかお許しください。お見逃がしください。出来心でござんして」

と訴えてから、

「わたくしはどうでも、このお方も生きてはおられますまい。ご内聞に願えましたら、このお方にも傷がつきません」

「うむ、痛いところを衝きおったな。この婦人はおれの知った人のご妻女で、その人に、見張ってくれと頼まれていたが、これだ。公けにはしたくない。町人、この仕末をどうつける？」

用心はして、引込んでいたのだろうが、まさか裏口から、孫兵衛とお新が顔を並べてヌッと出るとは露思わなかったらしく、ワッと叫んでのけぞるところを、孫兵衛の杖仕込みの細身の切先が、顎の下にピタリと付けられた。

「縛られちゃあいなかったな、銀五郎」
と孫兵衛は笑って、
「カラクリは初手から見透している。きのうの侍が御先手組の加役、つまり火盗の野郎だと、大仰に踏込む前からわかっていたんだ。その手先がてめえで、ひと頃は十手捕縄を持っていた。てめえはそいつにきんたまを握られ、いいように使われていたようだな」
「読まれていたか。おれもヤキが回ったぜ」
と、銀五郎は度胸を決めたようで、悪びれなかった。孫兵衛は抜身を杖に納めた。
「立っていちゃあ気ぜわしい。坐ろうよ」
とお新。先にべったり尻を落着けながら、銀五郎に向かって、
「なんの気まぐれか、おいらの舟に迷い込んだが不運さ、銀五郎」
「あやまった。おめえはいかにも殊勝に見えたが、ありゃあ芝居か」
銀五郎は、いっそサバサバしたような顔をした。
「いまさらかくすこともねえ。お新にも言ったが、おれはかかあをいたぶり殺した。かわいさの余りだが、殺しは殺し。死罪にもなるところを、あの野郎がもみ消し、その代り……ってわけだ。名は名瀬英三郎、二百俵取りの悪者さ。奥方というのは、名瀬の妾で、わざと客に責められる筋書だ。おれはずっと、名瀬の手先でね。あの野郎、取り込んだ金が、もう千両はあろうぜ。おめえは百両を吹っかけられていたな。どうするつもりだ？」

「見せ金で、屋敷に持っては行く。だが、帰りには、向うから百両もらってくる」
「そいつはいい」
銀五郎はギロリと、凄い目をした。
「名瀬にゃあ怨みがある。おれの癖は悪事とはまた別だった。そいつを名瀬が、悪いほうへひん曲げやがった。だからおれは悪者になった。いずれ、生かしちゃあ置けねえと思っていたんだ。お前さん、どこのだれだか知らねえが、金にこだわらず、野郎をバラさねえか？おれも助けるが」
「ばかを言いなさんな。おれたちは何もかも、金が目当てでやることだ。お辰はどうしたい？」
「いるにゃあいるが、寝ている。やり過ぎたかなあ。だが、味を知ってきたぜ」
「罪作りはやめるがいい。お辰の身の上は聞いたが、お光はどうだ？」
「あいつは金をやって帰したぜ。死なれちゃあ困るからな」
お光の身の上も、お辰と同じようなもので、これは奉公人との不義、駈落者の片割れだった。つかまれば非人手下だ。
「証拠はそろったわけかい。するとおれは命が危ねえ。夜逃げをするか」
お新が、
「あわてずともいいよ、銀五郎。それより、一両くれるなら、また言いなりになってやろう

じゃないか。どうだえ?」
「ありがてえ。本当か?」
「だが、ひと月待ちな。その時分にはピンピンだ。いい女を引き合わせてやる。百両出しても責めたくなるよ、お京って女でねえ」
「よさねえか」
と孫兵衛が舌打ちした。こんどの一件、なるべくはお京に詳細を知られたくない気持だ。名瀬英三郎宅での駆引は、むろん孫兵衛の勝ち。ひとり、手ぶらで出掛けたが、名瀬は百両取るつもりが、逆に同じ額をふんだくられ、紙のように白くなって、額にみみずを這わせていた。
「ま、何事もなく、大山鳴動だけで、おめでとうございますな。お忘れになるのが一番。銀五郎のこともお忘れなさいまし。裏切りは憎うございましょうが、もともとは殿様が悪い。ははは」

夜分に参上して、帰りがかれこれ四ツ（午後十時）になった。油堀沿いに、夜風に吹かれて歩いていると、背後に忍んだ足音がした。知らぬ振りで歩き続け、ヤッと斬り込んでくるのを外し、手刀で相手の刀を叩き落し、そのまま名瀬の首を襲った手が、刃金の輪のように、グッグッと肉に食い込んで、名瀬はもがくひまもなく、ダラリとなった。

「やっぱり大詰はこうか。思い通りの運びとは言え、おとなしくしていりゃあ、なんでもねえのに、修業が足りねえ」
と言いつつ、孫兵衛は名瀬を高々と頭の上にかかげ、一気に油堀に投げおろした。

第七話　極楽浄土を逆落し

一

「お寺はよしにしな。あんまり、ありきたりだ」
と、女髪結のお徳が手を振って、
「いまどきの坊主は、みんな生臭で、魚の食い放題、女の抱き放題が通り相場さ。スレていやがるから、ネタをつかんで脅したところで、鼻の先でせせら笑おうよ。逃げ道を造り、方方に金も撒いてあるから、ビクともするものじゃねえのさ」
「目くされ金で追っ払われるのが関の山か？」
と言って、墓守卯平がしゃがれた声で笑った。
「そこが工夫だ。坊主を手がけるのも、やり様じゃあ、捨てたものじゃない。格の高い、堅い一方の寺を狙うとしたらどうだ？」
巽屋孫兵衛が、盃を手にしながら、そう言った。
「堅い寺の、堅い坊主か。モノにさえすりゃあ、相手はウブだ、震え上って金を積もうが、さて、モノになるかねえ」

と、舟まんじゅうのお新。
「さすがのおめえたちも、手に余るか？」
孫兵衛がのんびり笑った。さし迫って、金が欲しいというのでもない。なにか仕掛けようというのは、いわゆる髀肉の嘆から来ている。正月この方、桃の節句のこのごろまで、つい泰平のまま打ち過ぎて、危ない橋を渡っていない。お互い、腕がなまって、身内が飽のようにだらけるというものだ。
「このお新さんも見くびられたね。お京、おめえの旦那が、あんなことを言うよ」
お京はチラと口許をほころばせただけで、答もなく、孫兵衛の盃に酒を注ぎ足してやる。
この部屋は十畳敷きで、一杯に敷きつめてあるのが緋毛氈。南向きの障子に、うららかな陽が射して、明るい。
絵師宇陀川芳国の仕事場だ。ちゃんと床の間があって、九谷の大きな花瓶に、七分咲きの桃の枝が、たっぷりと投げ入れてある。
軸は浮世絵の古画で、遊女と若衆の図。ゆかしく寄り添っているだけで、みだらなものではない。
みだらなのは下座の緋毛氈の上で、姫君と公達が組んずほぐれつの図だ。姫君は十二単衣、公達は狩衣めいたものを着ているが、いずれも袖に手を通しているだけで、下は素っ裸だ。
筆と画帖を手にした芳国が、二人の前後左右を忙しげに這い回り、ああしろ、こうしろと

注文をつけ、でかしたと手を打ったり、口汚なく怒鳴りつけたり、はた目には気違い沙汰だった。

その有様を見るでもなく見ないでもなく、なごやかに酒盛りをしているのが、孫兵衛一党。男女相愛の四十八態を、姫君と公達で描こうというのが、芳国の趣向で、事新らしくもないが、緋毛氈の色を生かしたからみ合い、また梅桃桜、あやめ卯の花朝顔と、季節の花をあしらい、花瓶もいろいろ取り替えて、背景に出すところが、新味と言えば言えよう。

それに、交合の有様を、それこそ臍のシワまで、細大洩らさず描き込むつもり。

「その辺でよかろう。こんどは横取りだ。男は女のうしろへ回りな。やり様は知っていような。なに、知らねえ？　なさけねえやつだ。ほれ、こうして……」

芳国が這って行って、公達を突きのけて代り、うしろから姫君の片足を抱えこんでグッと持ち上げると、

「キャッ、痛い！　股を裂くつもりかい？」

と、姫君がキンキン声を張り上げた。

「芳国も相変らずだ。おい、ちっとは二人を休ませろ。酒はどうだ？　おめえたちもこっちへ来ねえな」

と、卯平が声をかけた。

男は小平と言って、お新が拾い上げた色男、女はお紺で、これは常連だ。両人とも、前はだけたまま寄ってきて、はずかしげもない。

「なるほど、狙う寺によっちゃあ、物になりそうだ」

と、お徳がうなずいて、

「腕にヨリをかけてみるかい、お二人さん」

「寺はいいのがあるかい、卯平」

と孫兵衛。

「深川に寺は多い。さてね。永代寺、霊巌寺なんぞは、ちと手に余ろうし、因速寺、西念寺は小さい。堅くって金のありそうな寺と言やあ……」

卯平が思案するのへお徳が、

「いちいち数えていりゃあ日が暮れる。おいらが行き当りばったりに見つくろおうよ。なに、行い澄ましたような坊主ほど、色仕掛けには他愛のないもんだ」

「そいつは、お徳に任せよう。ところで計略だが……おっと、お紺に小平がいたっけな」

孫兵衛はニヤリとして続けた。

「おめえたちは、これから聞くことを忘れるんだ。いいな？」

孫兵衛の笑顔は、なにか底冷えがするようで、部屋は暖かいのに、お紺、小平は鳥肌立った模様だ。

海辺大工町の浄土宗知恩院末寺、正音寺の山門を、鋲打ちの女乗物がくぐった。身分ある女のお忍びと見え、供はわずかで、乗物の両脇に御女中が二人。老女らしき者と、お側仕えの者らしい。前に足軽体の者ひとり、うしろに御屋敷用人といった格の侍ひとり。

お忍びのため、いずれも軽装だが、身分は争えぬ、というところがある。

言わずと知れた孫兵衛一党だが、陸尺二人は例の小平と、その仲間六助というやつだった。

「卒爾ながら、お願いの儀がござる。われらはさる大名家の者で、奥方様の御供をし、富岡八幡宮に参詣いたしての帰りじゃが、奥方様が途中、急にご気分悪しくなられての。お苦しみのご様子であるから、われらも困惑いたし、折からご当寺の前を通りかかった故、こちらでしばらくお休みになれば、回復なされるであろうと、みなと相談いたし、ご無心を申上げることになった。いかがでござろう、ご承知くださるまいか」

というのが、庫裡を訪れた用人、山川大之進、つまり孫兵衛の口上で、付添ったのが老女楓ことお徳。

「なにとぞ、お願い申しまする」

と、楓も神妙に頭を下げる。どう見ても御殿でにらみを利かすお年寄りの風格十分であった。

最初応対に出たのは、二十六、七という年格好の、様子のいい寺僧だったが、客の身分が高そうなのに、いささか驚いた様子で、あるじを呼ぶからと、奥へ引込んだ。

代って出てきたのが住職。これは分別盛りの四十半ば、骨太い体格のいい人物で、顔付きはいかつく引き締っていた。

山川大之進、しかつめらしいあいさつを繰り返しながら、楓に使った横目は、

「こいつは難物だぜ」

というものだが、楓が返した目付きは、

「そりゃあそうだが、お京なら攻め落すね。用心堅固のようでも、こいつのいい体が承知すめえよ」

とでも解かれよう。

「それはご心配でございますな。お頼みの儀は、おやすいことでございますが、なにしろむさ苦しいところで」

と、住職は当惑気味で、

「お世話も行き届き兼ねましょう。しかも男世帯で、身分のあるお方様には、反って失礼かと……」

「いやいや、それはご謙遜。失礼ながら、本堂、客殿、書院などの様子を拝見するに、まことに立派なものじゃ。そのうち一間を、暫時拝借すればよろしい。……こうしているひまにも、奥方様はお苦しみであろう。よろしいかな？」

「ご尤も。では早速」

と、住職は山川大之進に押し切られた形だった。けだし住職の本音は、迷惑ということだったのだろう。奥方にせよ、御殿女中にせよ、お忍びで寺に来て、上りこむとなれば、人の口がうるさかろう。

それだけに、この正音寺は戒律きびしく、女人を避け気味なのであろう。

山川と楓は、本堂への石畳のほとり、芽を吹きだした柳の大木の陰に、ひっそりと置かれた乗物のほうへ戻る。住職と、取次に出た坊主の二人が、大急ぎで衣服を改ため、迎えに出た。側仕えの萩野ことお新が、乗物の戸を引き、履物をそろえて地面に置くと、奥方の手を取る。奥方ことお京は、春風にも耐えぬような力ない風情で、萩野の腕にすがって、乗物からよろめき出た。

すかさず楓と萩野が、左右から支えた。

折から木洩れ陽が、光の丸い粒々になって、奥方をいろどった。

顔は思い切った白塗りで、眉墨も濃く、唇は深紅に輝いている。チラチラとする光が、その白磁のような顔の肌にうつろい、白昼夢の美しさだ。山川大之進が、そっと唾を呑みこんだくらいだから、住職と弟子の坊主が、雷に打たれたようになったのも、無理ではなかった。まずこれで、一山越した。やれやれ、いつもながらお京はもうけ役で、こっちはいい面の皮だが……

「さあ、しっかりおつかまり遊ばして。じきに、ゆっくりお休みになれますゆえ」

と励ましながら、お新はいまいましさが半分だ。

二

本堂の西側奥に、別棟の書院がある。その玄関まで、わずかの距離だが、一行はかたつむりの歩みであった。奥方はいまにもくずおれそうで、足の運びがおぼつかない。その裾前が乱れ勝ちになるのを、楓が直してやる。

住職と年若の僧は、何度も立ち停り、振り返って待ち受けねばならないが、そのたびごとに、二人の顔色は尋常でなくなってくる。

奥方の悩み様は、いまにも駆け寄って、抱き締めたい思いを、男に起させる。あどけなく、悲しげで、しかも男の背筋を突き抜けるような色気がある。閨房の連想を避け難いのだ。

住職の案内で、女三人だけが奥書院に上る。用人と足軽は玄関で女たちを見送り、別室で待ちたいからと、僧に申し入れた。仮りの寝所とは言え、婦人の部屋に、男が入り込むわけにはゆかない。

「それではこちらへ」

と案内されたのが、いま一つの書院とも、客座敷とも言える部屋で、方丈の続きである。陸尺は台所で休むということになった。

小坊主が茶を出す。若い僧は、様子をうかがいに、奥書院へ行った。
「どうしてどうして。内福そうだなあ、この寺は」
と、足軽の卯平。
「お徳が目を付けた寺だ、ソツはねえ。住職には学があって道心堅固、悪い噂もねえから、反って女共が信心するようだ。従って檀家に裕福な家が多いってことだ」
「お京にはいまさらながら、舌を巻くぜ。家の中に入らねえうちに、住職の気を迷わしやがった」
「お新も負けてはいまいぜ。いまここにいた坊主をモノにするだろう」
主従が静かに茶を喫しつつ、主人の病状を案じていると、はたからは見えるだろう。
やがて、若い僧が戻ってきた。
「有り合わせでございますが、奥方様にはお薬湯をさし上げましたところ、お召し上りになり、ただいまは静かにお寝みのご様子で」
「それはよかった。なに、医者を呼ぶにも及ぶまい。元来お弱いので、よくこのようなことはござる。久しぶりの乗物で、お酔いになられたのであろう。一刻ほども休息なされれば、元通りじゃ。ご厄介をかけるの」
「どうつかまつりまして。わたくし共も安心いたしました。間もなく、あるじもごあいさつに参ります」

奥書院では、奥方が白無垢の下着姿で、取っておきらしい立派な絹夜具の中に寝ていた。枕元に楓と萩野。ほかにだれも居ず、次の間も廊下も無人である。街中ながら、物音一つしない。時たま聞えるのは、筧の水音、小鳥の声くらいのものだ。
「さあ、どうする」
と萩野がニヤついて、
「住職はよだれでも垂らしそうだが、いきなりしがみついてくるとは限らねえよ。下手をすりゃあ、亀の子のように、首をすっ込める。キッカケがむずかしいやね」
「なあに、しなだれかかりゃあそれまでさ」
と、楓が事もなげに言った。
「おめえはあがっているから乱暴を言う。そうはゆくものか」
「きょうのことにはならないね」
と奥方が言った。パッチリ開いた目に、憂い、苦しみの陰もない。むしろいたずらっぽく笑っている。
「そいつは悠長だわ。お京もさすがに、持て余しかい？」
「そうじゃないけれど、きょうはきれいごとで引揚げるのがよさそうだ。先様は油断をなさるし、お預けを食わしておけば、この次が扱いやすいだろうよ」

「お預けか。言われてみりゃあ道理だ。それならこっちもそのように」
と萩野。楓が聞きとがめて、
「おめえ、あの若えほうの坊主を、即座にたらし込むつもりだったのかえ？」
「当りめえさ。あの野郎は、大分女にも慣れている。澄ました面をしているが、色好みだね。流し目をくれてやったら、ブルッとしやがった。奥方はほしいが高根の花、そこへ汁気たっぷりの御女中が控えているのさ。ちょいと誘いをかけりゃあ、犬のようになってのしかかってこようが、ここは足並みをそろえるほかはあるめえね」
「大したうぬぼれだ。それにしてもあいつら、遠慮が過ぎるね。おっかなびっくりだ。……奥方様、そろそろお身を起しになりましては。寝乱れ姿で、床の上にお坐りなさりませ」
と楓が言った。

「いまごろは座敷で……」
と、小平がグスグス笑いだした。手にした茶碗の中味は般若湯だ。
「のぞきに行くか。見えねえかな」
と相棒の六助が、目を鈍く光らせて言った。
「よしなよしな。見付けられちゃあ、万事ブチこわしよ。おめえにはまだ、よくわかるめえが、孫兵衛は怖え」

「そうかい。そんなに怖えか」
と、六助は素直でない言い方をして、
「それで、言い付けられるままに、片棒担いだのか」
「そうじゃねえ。どうぞ仲間に入れてくれと、こっちからせがんだのよ。この話を聞いたからには、おとなしくすっ込んじゃあいられねえ。それで、こんどに限らず、おれの働きを見てからってことになっているんだ」
陸尺四人は大仰で目立つから、二人。小平は兼ねてから知合いの六助を引張り込んだ。
六助の素姓はわからないが、悪事はひと通り、場数を踏んでいるらしい。
孫兵衛は六助に会うとすぐ、使うことにしたが、面魂を買ったという。いつもの孫兵衛にしては、軽はずみのようで、このおれは、なんのかのと入れてくれねえくせに、と小平は不満だった。
「六助、仲間がいるだろう」
「へえ、そりゃあ何人か」
「四、五人、掻き集めてもらうようになるかもしれねえが、みんな役に立とうな」
「任しておくんなさい。命知らずばっかりだ、へへへ」
「それはけっこう。頼りにするぜ」
笑顔で六助を見ながら、孫兵衛はそう言ったものだ。

二人が腰をかけた台所は広い。板の間の大火鉢で、茶釜が湯気を吹いている。前にうしろに、頑丈な棚が造りつけてある。タタキにはかまどが四つばかりも並び、流しがまた大ぶりで立派だ。

「坊主に奥方は、いい取合わせじゃねえか。芳国はさぞ描きたかったろう」

と六助。

「まさかそうもできねえが、この次には芳国が付いてくるかもしれねえよ。ところで、おめえの仲間はなんに使うつもりだろう。孫兵衛ばおれには話してくれねえんだ」

「ま、そのうちに分らあな。礼はたっぷりもらうつもりだ、孫兵衛さんにな」

六助はまた、気になる笑い方をした。

「わたくしは英信と申し、当正音寺八代目の住持でございます。開基は正保年中と申すことで、大分古うございます。これにおりますのは、弟子の良雲で、わたくしの代りをいたします。何せ、高貴のお方のお相手には慣れませぬ故、不行届にて……」

と、住職の英信が言った。

「われらの身許の儀は、ちとはばかりがあるので、ご容赦願いたいが、殿はともかくも一国のあるじでな。屋敷は浜町河岸近くでござる。このたび、お忍びの富岡詣では、まず気散じ……ははは、大名家と申しても、いろいろとござってな。奥方様はいささか気鬱のご様子

で、われらも心を砕かねばなりませぬ。思いがけなく、このような塵外境に少憩がかなって、何よりの仕合せ、奥方様も伸び伸びとなされましょう」

「失礼ながら、あのようにお美しく、お心にかなわぬことなど、ございますまいに」

「いやいや」

と、山川大之進は苦笑して、

「ご住職、奥方様のお悩みを聞いていただけぬかな。そうして、教えさとしていただければ、これに越したことはないが。これも衆生済度のひとつ……そうではござるまいか。実は、奥方様には心の悩みを打明ける相手がおらぬ。御家の恥を申したくはないが、ご夫婦仲がよろしくない。病気を理由に、奥へお渡りもない。うら若い奥方様の御身として、まことにお気の毒での」

「めっそうもない、教えさとすなどと、そのように大それた……」

「そうではない。ここは浮世を離れた場所で、身分などはどうでもよろしいのじゃ。休んでおられるのは、ただひとりの女性。そう思うて慰さめていただけぬかな。そのほうが、奥方様もお喜びであろうし、心の中を吐き出せば、楽にもなられよう」

ところへ、奥書院から渡ってきたのが萩野で、敷居の外に手を突き、奥方様が御住職にお礼を申したいとのことだ、と言った。

「おお、もうご気分は？」

と山川。

「はい、もう大分、およろしいようで、お床の上に坐っておられます。御住職様……」

と、萩野は目でうながしながら、まばゆそうな視線を良雲に走らせ、良雲がそれと気付いて、首筋から耳へと、紅くなってきた。

一方英信も、

「お礼などと、とんでもございませんが、お呼びでございますとな？」

と、いささか逆上気味になっていた。

三

良雲は寝所へは入らず、次の間に控えた。

萩野が先に立ち、英信がかしこまって、そのあとに続く。間の襖をあけると、床の上の奥方は羞恥の情を面にあらわし、居ずまいを正そうとした。

のぼせ顔の英信が平伏するのへ、

「お手をお上げください。こちらへ」

と、奥方は声をかけた。どこかたどたどしいような、甘く低い声である。

「さあ御住職、ご遠慮をなさらず、近うおいでなされ。お礼も申さねばならず、打解けた物

語もしたいとおっしゃります。堅うなられては、反って迷惑」

と楓。この老女も、きらびやかに装えば、まんざら捨てたものでもなく、萩野の総模様の衣装、奥方の脱いだ縫取りのかいどり、長着と共に、殺風景な奥書院を華やがせている。寺に似ぬ匂い袋や髪油の香りも、そこはかとなく漂っている。

英信はこわばった顔で、近くに進んだ。

奥方は言いにくそうに、礼をのべた。その声が、英信の耳にまつわり付くようだ。奥方の白無垢の下着の、そのまた下に、肌着か、緋の色が見え、奥方が身じろぎするごとに、それが裾前、襟のつくろいから、かくれたり現われたり、英信の目に痛い。

伏せた目を上げれば、奥方の顔が無邪気にこちらを向いている。ほの暗い部屋の中でこそ、思い切った濃化粧は映えて、うっすらと微光を放つようだ。

「奥方様、もうご気分は……」

と、英信の声はしわがれている。奥方はニッコリして、

「お陰様で、ようなりました。こちらはほんに、よいところじゃ。静かで、なんの気兼ねもなく、心が晴れます。屋敷に戻りとうないような」

英信はハッとして、奥方の顔をまともに見た。微笑にかくした悲しみの影。

「それは何よりでござりました。いま、お茶などを進ぜまするで……こちらには、小さな庭もございます。お目汚しではございましょうが……」

やや落着いてきた英信は南側の障子を明け放った。濡れ縁の向うが庭で、池の回りの岩組がみごとだ。奥方は放心したように、深山の趣きのある庭を見やる。英信はその横顔を盗み見て、妖しい戦慄を覚えた。見れば見るほど美しくなる。胸が掻き乱される。

「御住職どの」

と、奥方が急に英信を見据えるようにしたので、目をそらす暇がなく、英信は狼狽した。脇の下、背中が汗ばむ。

「そなたは悟りすまされたご出家の身、この世の煩悩など、全くないのでありましょうなあ。うらやましゅう思います」

「い、いえ、奥方様、わたくしなどはまだ、修行が足りませぬ。至って凡愚でございます」

と英信は答えた。突然舞い込んだ、どこぞの奥方に、これほどまでに魅入られるとは、とわが身を責めたのであろう、顔付きが引き締り、口調も少しきつかった。

「いいえ、そのようには見えませぬ。おすがり申したいような……」

奥方の好もしそうなまなざしは、大胆であった。英信は返す言葉がない。

「奥方様、わたくしは山川殿のところへ参っております。あのご仁も、一人残されて徒然でございましょう」

と楓が言って、ゆっくり立ち上った。すると萩野も、

「では、わたくしはお次の間へ。お弟子の坊様と、お話でもいたしましょう」

「そうしや」

と奥方。そうしやもねえもんだと、肚の中で笑いながら、楓が立ったあと、萩野は次の間に引込んだ。

「お互い、宮仕えは気苦労をいたしますね」

と、萩野はそこに控えている良雲の前にすらりと立ち、あふれるような媚を見せてから、思わせぶりに裾を分けて坐った。

「お前様もお師匠様に仕えて、辛いことがおありだろうねえ」

「それはございますよ。大きな声では言えませぬが。なにしろ、きびしいお方で」

と良雲は小声。日ごろは遠くからでもおがめぬ御殿女中、それも桜花爛漫という風情の萩野を目の前にして、わくわくしているのが、手に取るようだ。

「お前様、なんとお言いだえ？」

「良雲と申します」

「わたしは御殿では萩野、本名は菊と申しますよ。親は微禄の御家人で、高貴のお方とは大違い、ほほほ。気安う思うてくだされ」

と言ったかと思うと、サッとすり寄り、良雲の手を両のたなごころに包みこんでいた。

「情の深そうな、暖かい手じゃ。その男ぶりでは、ほれた女も何人か、おありだろうねえ」

一方、奥方と英信は、ただ二人取り残され、バツの悪いこと極まれりという様子だった。

お互い、何か言いかけようとして、言葉が出ず、目と目が会っては、また離れるというふうだ。

「おかいどりをお召しになりましては。それではお寒うございましょう。それとも、障子をお締めいたしましょうか」

と、ようやく英信が言って、かいどりを、と奥方がつぶやいた。重いかいどりを持ってうしろへ回り、肩に着せかける英信の手が震えた。何気ないように、奥方の手のひらが上に重なった。

「お暇の折りには、何をなさいます？」

と、奥方がこれも何気ないように聞いた。

「は、何と申して」

英信はしどろもどろになっていた。

「……坊主の身で、気の利いたこともできませぬ。無芸でございまして、腰折れの歌を詠むくらいのもので」

「わたくしも好きじゃ。聞かせてほしい。そなたのこと、きっとよい歌に違いない。さあ」

奥方ははじめて、少し声に出して笑った。

それから五日目、前と同じ昼下りの時刻、女乗物がひっそりと、正音寺の山門をくぐった。一人だけ供がふえて、これは宇陀川芳国。絵師の姿のままであった。

この日は冬に逆戻りという寒さで、時折り白いものさえちらついた。

足軽の卯平が前の日に正音寺を訪れ、あす、おいでになると知らせたので、用意は万端整っているはず。

あの日、細工は流々というところで、きれいに別れはしたが、英信も良雲も、体内に灯された色欲の炎が勢いを増し、せき止められた川水のごとく、もう溢れ出ねばどうにもならぬという頃合いであった。

英信はじめ、寺の者は、一行が大名家の正室と、供であることを、露疑っていない。用人山川大之進は、辞去する時に、礼として金五両を英信に手渡していたから、金目当ての芝居と疑われるわけもなかった。

奥方を出迎えた英信の顔には、やつれがある。いくらか頬がこけて見えた。この五日というもの、奥方を恋い、おのれを責め、色情の火を消すに由なく、夜もろくろく眠れなかったに違いない。

乗物から出た奥方は、そういう英信をヒタと見詰めていた。奥方の瞳にも、激しく燃えるものがある。苦渋に満ちた英信の表情が、うつけたようにゆるむ。それから底抜けの喜悦……ええい、もうどうにでもなれという心境だろう。

奥書院には大火鉢が据えられて、炭火がよくおこり、部屋を暖めているほかに、やぐらこたつがしつらえてあった。

「おや、これは珍らしいもの。御屋敷にはないものでございますよ。あれはさぞかし、暖かであろうと、われわれはよく噂をしたもの。御住職どの、ようお気が付かれましたなあ。早速賞翫いたしましょう。奥方様、このような折こそ無礼講、お作法も何もありませぬ。お入りなされませ。御住職どのも」

と、楓は口から出放題、もともと大の寒がりで、真先にもぐりこんだ。

奥方もためらい勝ちに膝を入れてから、はずかしげなそぶりで、英信も、と暗にうながした。

「いえ、わたくしは……」

「いいえ、ぜひ」

と、奥方はこの時ばかりは、有無を言わさぬような、強い口調だった。英信は呪文でもかけられたように、スルスルとこたつへ進んだ。

曇天のため、部屋は暗い。向い合った二人は、長いこと無言であった。互いに目を伏せている。

「そうじゃ、わたくしは山川どののところへ参り、お酒でも酌み交しましょう。いえ、般若湯であったな。お二人はごゆっくり物語を遊ばせ」

汐時を見て、楓がこたつを出た。

次の間も、座敷と似たような光景で、炭火のおこった火鉢に、やぐらこたつ。やぐらは座敷のものより、やや小型と見え、そのためか、膝を入れている良雲、萩野の両名は、まるでくっついているようだ。

「萩野どの、あちらをよろしくお願い申しますぞ」

と、楓はサッと流し目をくれただけで、次の間を通過した。

次の間のほうが話は早えや。もうその気でいやがる。

とは胸の内。すでにくっつき合っていたのが、離れたのかもしれない。こちらの二人もまず無言で、見合わす顔の、目と目に物を言わせていたようだ。

「英信どの」

「は、はい」

「わたくしはあの日お会い申して以来、そなたのことばかり、思うておりました。恋しゅうございました」

「奥方様、いけませぬ、めったなことを仰せられては……」

「構いませぬ。わたくしは、生まれてはじめて、殿方のことを思いつめました」

「奥方様……」

「そなた、わたくしをさぞ愚かな女と……」

奥方の低い声は、しめりを帯びた。

「心の中でお笑いであろう。御出家は冷たいものじゃ。女の心など、おわかりにならぬ」
「……それでは申しましょう。わたくしは地獄の苦しみでございました。僧侶の身でありながら、奥方様の面影が、まぶたに焼きついて、離れませぬ」
「では、英信どの、そなたも」
奥方の冴え冴えとした瞳が、深い色をたたえて、うるんでくる。

四

「萩野様、萩野様」
と、良雲はあえいだ。こたつの中で良雲の袴は脱がされ、萩野の手がその裾を割って入り、脛から膝、太腿へと、手触りを楽しむように這い回っていて、時には男の中心を柔らかに包み込みもする。
萩野の裾も、もちろんはだけられていた。良雲の手を股間にみちびいて、しっかり締めつけている。
「いけません。人が来ます」
その口を唇でふさいで、
「ビクビクなさるな。楓様が心得て、だれもこちらへはやらぬ。御殿勤めで長らく男を断たれ、ようやく念願かなって、お前さんとこうしているうれしさ。ほれ、探ってごらん、熱くなって、濡れているだろう」
萩野は半ば良雲に乗りかかり、良雲の一方の手を捕えて、ズイとわが胸に引き入れた。
「あるじが……お師匠様が……知れたら破門されます」
と、すすり泣きのような声だ。萩野は熱い息を良雲の耳許に吹きかけて、
「心配無用、あちらでも御住職と奥方様が、しっぽり濡れておいでさ。どうやら相ぼれのご様子、無理もない。奥方様の何よりの薬は男。これまで、尼様同然のお暮しで……だから、大っぴらでよいのさ、良雲さん。フフフ、覚悟を決めたかえ？」
溜息ともうなり声ともつかず、のどを妙に鳴らして、良雲は萩野の胸の白いものをグッと握った。

宇陀川芳国は、お出入りの絵師と名乗って、お上品な役者絵、美人画のたぐいを英信に進呈し、境内各所の写生の許可を得て、勝手に飛び回っていたが、目当てはむろんのこと、坊主と御女中秘戯の図柄だ。
「滅法冷えやがる。なんて馬鹿寒むだ」
うぐいす色の縮緬の襟巻を頬かぶりにし、ぼやきながらも、こと春画とあっては熱心な男で、庭を写しているふりで、首尾よく奥書院に上りこみ、次の間の障子の隅っこに穴をあけた手際は、慣れたものだ。

こいつはちょうどよかった。真最中か。お新め、けっこう興が乗って、お楽しみらしい。それにしても陰気で抹香臭え部屋だ。半間床に達磨大師の軸ときた。部屋にそぐわねえのが、こたつぶとんの派手な色。もう一つそぐわねえのが、薄黒い坊主頭に白の綿服と、飾り立てた黒髪に色もあやな女中の衣装……かんじんのところが見えねえのは玉に傷だが、そこはなんとか工夫がある。不二を見ぬ日ぞ面白き……と。こいつは変った絵になるぜ。

口の中でつぶやきつつ、芳国の筆先はサッサッと紙の上に躍っている。

なるほど、障子の穴からのぞくかぎり、両人はちと妙なふうに向い合っているだけに見える。抱き合ってもいず、お互いに反っくりかえって、萩野などはうしろ手に体を支えているが、下のほうはむろんピッタリ、水も洩らさぬようになっているはずだった。そして、あるかなしかに揺れ合っている……

芳国は第一の素描を終り、座敷に取りかかった。

おやおや、不首尾かい？　なんの変哲もねえが。まるっきり怖い顔で話し込んでるじゃねえか。

芳国が失望したのも道理だが、実はこの時、奥方、英信の自制が、跡形もなくケシ飛ぼうとしていたのだ。

次の間のひそかな語らいが、いやでも二人の耳に入る。とは言え、何を話しているのかはわからない。ただ語らいの合間に、萩野様とか、良雲さんとかの、耐え兼ねたような呼びかけが入り、良雲の荒い息使い、萩野の鼻にかかった溜息もまじる。

「ああ、もう気が遠く……」

と、こんどは萩野の声がはっきりした。

奥方がスッと立った。不意を打たれて茫然とした英信を尻目に、障子まで小走りに来て、カラリとあけた。芳国が胆をつぶし、縁先から地面に転げ落ちた。

奥方は障子にもたれるようにして、うつろな目を庭に投げていた。肩が大きく波打っている。

「奥方様、どうなされました。……お風邪を召します」

と、英信もこたつを出てきた。その手がおそるおそる、奥方の肩にかかった。

奥方が英信の胸の中に倒れ込んだのが先か、英信が奥方を抱き締めたのが先か、その辺の植込みの陰に這いこんで、目を皿にしている芳国には、よくわからなかったが、ともかくも御両人は、この上はできないというほど、ピッタリ、一つになっていた。とうとう、堰が切れたようだ。

それから重なり合って、くずれるように畳の上に倒れこんだ。芳国は目の色を変え、大急ぎで濡れ縁まで這い寄る。

……か弱い奥方だったのが、夜叉のようになって、狂おしい手付きで帯を解き、衣装を脱ぎ散らし、雪白の下着、腰のものまで外してしまった。

仰向けで、金縛りに会ったような英信は、もう唖同然で、

「ああ……ああ……」

と言うのみ。奥方は誇らかな裸身を、男の目の前にさらし、おのれの乳房に手を当てて、掻きむしるようにしたが、こんどは英信を裸にむきはじめた。英信は全く受動である。

こいつをなんとか、絵にできねえか、なんとか……

と、芳国の手先はわなないた。まるで女、男を犯すの図だ。あのお京がこれほど荒々しくなった姿を、芳国はまだ見たことがない。男の上に伏せた五体のあらゆるところが、男の肌にこすりつけられ、うごめき、もだえている。世にも美しい野獣だ。嚙みつき、なめている。

英信の声はヒーヒーと、息も絶え絶えになった。

方丈の客座敷。芳国がふらふらと帰ってきた。山川大之進、楓、卯平、それにいま一人の寺僧、良慶という若いのが接待で、ささやかな酒宴の場になっている。

「芳国どの、何やら魂が抜けたようなお顔じゃが、よいものが描けましたかの」

と楓。その毒気に当てられた様子じゃあ、あっちはうまく行ったらしいね、という問いだ。

「いやはや、じつによい景色」

と、芳国はにわかに元気になり、山川がさした朱塗りの木杯に、良慶がなみなみと注いだのを、一気に飲み乾した。

良慶は年の頃二十をわずか過ぎたばかりだろう。切れ長の目に油断のならぬ鋭さがあり、坊主になる前は、いっぱしの悪さもしていたろうと思われる。兄弟子の良雲とは違っていた。

「山川様、あちらへはまだ、何もさし上げておりませんので、ご様子を見に参ろうと存じますが」

と遠慮勝ちに良慶が言ったが、男にしては形のよすぎる唇の端に、あるかなしかの冷笑があり、何が起っているか、薄々承知のようだった。

「いえ、間もなく萩野どのが参りましょう。それからでも」

と、楓が少々あわて気味でとめたが、山川大之進はジロリと良慶の不敵な顔を見てから、

「ははは、野暮なことは言わぬものじゃ、良慶どの」

「は？」

「白ばっくれちゃあいけねえよ。おめえの肚は読んでいるつもりだ。だが、住職や良雲を脅すのはともかく、おれたちから何かせしめようというのはいけねえ。お門違い、役者違いだぜ」

山川大之進のガラリと変った口調に、良慶は蒼白になった。

「この子は、いるかいないかもわからなかったが、そうかい？　おい、良慶さんとやら。この男にタテをつかぬがいいよ。おめえは若いから、命は大事にしな」

と、御女中楓の仮面をかなぐり捨てたお徳。

卯平はさっきから、何事も知らぬ顔で、飲み続けていたが、
「どうやらおめえは、寺小姓上りだな？　寺々を渡り歩いちゃあ、和尚に釜を掘らせ、ねだったり脅したりで、大分せしめたろう。ここの英信はどうだえ？」
と良慶に聞いた。そこまで見透かされたかと、良慶は観念した面付きで、
「お師匠さんはいけませんや。女の誘いがあったって、これまではハナも引っかけなかったが……」
「むこうの女たちにかかっちゃあ、弘法様もコンニャクになったろう」
と孫兵衛が言って、
「ところで、頼まれてくれねえか。損はさせねえ。英信、良雲にたかるよりゃあ、みいりが多かろうぜ」

五

さらに五日経って、三度目の正音寺詣りでは、女乗物はなく、一行は徒歩だった。実は町駕籠を雇って、裏門の外に待たせてあった。そこは道端に草なども生えた寂しい細道で、向いはやはりお寺の塀である。
奥書院の座敷、次の間では、二度目と違って大っぴらに夜具がのべられ、それぞれの男女

が、だればばかるところなく、生まれたままの姿でもつれ合い、戯れ合っていた。
酌めども尽きぬ毒酒の妙味、堕ちるところまで堕ちてやれと、英信は覚悟をきめたらしい。情欲の強い男で、しかも女の体は特上、むさぼって飽きる様子もなかったが、ふとんにおさまって一刻余りも経った頃、方丈からあわただしい足音がドカドカとして、
「あれ」
と、奥方が英信にしがみついた時、駆け込んだ山川大之進が、
「奥方様、早く……わけはあとで。英信殿も衣を着られい。チョッ、油断であったな」
奥方も萩野も、素っ裸の上にあわてて衣装を引っかけ、帯をする間もなく、腰紐でただグルグル巻き、濡れ縁から飛びおりて、庭伝いに裏門に回り、外へ出るまでが早かった。
英信と良雲は茫然自失、衣を身に付けるのがやっとだったが、そこへ良慶が飛び込んで、
「お侍が四人、こっちにやってきます」
と言う。この場を見られてはと、英信、良雲があわただしく方丈へ戻る中途で、その四人にぶつかった。
「なにをなさいます、ご無体な」
「なにが無体だ。そっちこそ無体だろう。どけ」
といったもみ合いがあって、坊主両名はまた押されてきた。なにしろ、四人とも刀を左手につかんでいて、いつ抜くかわからない形相なので、英信らは生きた心地もない。

彼等は勤番侍という風体で、年の頃は二十四、五から四十前後とまちまちだが、中のひとりが陸尺であったと、気付く余裕も寺側にはない。

「坊主、きさまらが何をしていたか、そのふとんでもわかる。言い開きはできんぞ」

と、陸尺の化けたの、つまり六助が英信をにらみつけて、

「奥方に女中が二人、侍は山川大之進。ちゃんとわかっているぞ。兼ね兼ね怪しいと思い、跡を尾け、見張っていたのだ。きさま、奥方をよくも……」

六助はとうとう、刀を抜いて、英信に突きつけた。英信も良雲も、平蜘蛛になってうち震えるばかり。六助はおっかぶせて、手引をした山川は、追っつけ、斬り捨てるか腹を切らせるが、きさまらも生かしておくわけにはゆかんと言った。だが、ややあって、六助は思案顔で刀を鞘におさめた。

「きさまらを成敗するのも考えものだな。それで事が公けになっては、藩名に傷が付く。奥方ともあろう御身分で、寺の坊主と乳繰り合っておった仕末では、悪くすればお家は取り潰しだ。きさまらは憎いが、生かしてやるのは、ただお家のためだぞ」

「何を弱気な、御同役。こいつらは斬ろう。それが世のためだ。山川も女中も斬る。奥方は殿が成敗なされよう。それで家中は大掃除になる。こんな寺など、打ちこわしてしまうがいい」

と反対したのは、浪人上りでもあろうか。

「臭いものに蓋をするな」

ともう一人。

「待て待て。おのおのの言い分もわかるが、お家が取り潰しになっては、万事窮すじゃないか。早まってはいかん」

六助は二人をなだめてから、

「住職、別室でじっくりと話し合おう」

あとは小声で、

「あいつらをなだめねばならんぞ。なに、忠臣面をして、実はこれがほしいのさ」

六助は他の連中に見えぬよう、指で丸の形を作った。

「あ、あなた様はご無事で？　あの、奥方様や御女中は」

「無事も無事。われらは謀られたわ」

山川大之進は歯噛みせんばかりで、

「やつらは家中の者ではない。市中無頼の奴どもが、うまく化けおったのじゃ。どこぞで見張りでもしていたのだろう。英信どの、いかほど、かたり取られたな？」

「五十両ほどでございます。それも檀家のお方にご寄進を仰ぎましたもので」

英信はあまりのことに、うつけたようになっている。

「五両もくれてやれば退散したろうに。いや、弱味があっては止むを得ぬ。こちらも逃げ急いで、醜態であったわ。だが、やつらはもう姿を見せまい。五十両……なんとかしたいが、早急にはのう」

「いえ、山川様、すべてはわたくしの罪でございます。仏罰と申すものでございましょうよ。わたくしはとうとう、破戒僧になりました、ははは。何十年、人並み以上の修行をいたしたつもりが、この有様。奥方様が、あまりにもお美しく……」

「お察し申す。では、最早奥方様とは会われぬおつもりか。あのお方はさぞお嘆きになろうが」

英信の顔が苦しげにゆがんだ。

「会いたい……」

「いま一度、お会わせしよう。以後はすっぱり、思いあきらめるのが、お互いのためであろう。ついては英信殿、困ったことが起きた」

「と申されますと？」

英信はキョトンとした。

あの騒ぎのどさくさに、奥方はたいまいの花こうがいをなくされた。それは高価で、また古いもので、悪いことに、お家重代の伝わりもの。代々、奥方が用いられる由緒付きの品だ。奥書院のどこかに落したはずだが、見当らぬらしい。疑いたくはないが、寺のだれかが拾い、

金にでもしたのではあるまいか。こうがいが紛失すれば、奥方はただでは済まぬ。また、市中の店から見出されでもすれば、どんなわけで店に流れたのか、きびしく詮索されるだろう。そうなる前に取り戻さねばならぬが、当時のことを思えば、疑うべきは良慶という若僧ひとりだ。

奥方以下は別、英信、良雲も別とすれば、あの時奥まで来たのは良慶である。彼はわずかの間だが、ひとりになった……

「あの者の行状はどうじゃの、英信どの」

「まさかとは存じますが」

英信の顔色は、灰のようだった。

良慶を呼びつけての厳しい吟味は、呼吸がピタリと合っている。のらりくらりの逃げ口上に気をいらった山川が、刀を抜いて振りかぶった勢いは、真に迫ってすごく、良慶は本当に斬られるかと、歯の根が合わなくなった様子だった。

「申します、申します。二両で売りました」

と、良慶は蚊の泣くような声で白状した。

たいまいの花こうがいなど、もとより奥方は挿していない。卯平が見つくろって買い、良慶に渡したものだ。

店は佐賀町、永代橋詰の古物屋。付添いの英信に、山川がまた付いて行ったのも、計略で

あった。一寺の住職と、身分ありげな武士が、ぜひ買い戻したいと、欲深そうなおやじに談じ込んだのだから、わけありと見たおやじは、一旦買ったらこっちのもの、お断わりだとニべもなかった。

値段はせり上って、とうとう三十両で、おやじは手を打った。

英信は、持ち合わせの三両余りを払い、残りはあす持参するからと言った。

「そこもとの弟子は、とんだことをしてくれたの。三十両など、どこからも出ぬ」

と、山川大之進は苦り切った。

「ご心配なさいますな。良慶の不仕末はわたくしの不仕末。山川様にご迷惑はかけませぬ。寺宝を売りましても整えます。どうせ裸になりついでございますから」

と、英信はいっそサッパリした面持ちで言うと、口を一文字に引き結んだ。

「おい良慶、英信からいくらせしめた？」

「いえ、わたしはそんな」

「かくすな。てめえのことだ。行きがけの駄賃か餞別代りに、英信のみならず、良雲からも取ったはずだ。なにしろ、弱味はむこうにある」

と卯平が言って、

「しかも分け前をほしそうな面だ。若えくせに臆面もねえぜ」

「まあいい。約束だ、分けてやろう」

と、孫兵衛が手許の小判を三枚、チャリンと良慶に投げてやった。

「おまえ、これからどうするつもりだい」

とお徳。良慶は金をふところにおさめてから、

「手下にしてくださいな」

と言った。

「そいつは無理さ」

畳に片肘を付き、いぎたなく足を投げ出したお新が、のろくさい口調で、

「おめえは小泥棒向きさ。もうちっと修行してから来な」

西念寺横町、巽屋の居間である。お新は粋で伝法な商売向き、お京はくすんだお内儀に逆戻りだった。宇陀川芳国は、いまごろ坊主と奥方の枕絵完成に夢中だろう。

例の三十両は、英信がおやじにきれいに払ったのを、あとで孫兵衛が苦もなく巻き上げた。わけを話せば空おそろしい悪事で、巻き込まれてはと、おやじは蒼くなった。二両だけは返してやった。

「小平はこねえな」

と、孫兵衛が言った。

「裏切りやがったのだ。それとも、六助らに脅され、足止めをくっているのだろう。あの野

郎は意気地がなくっていけねえ。この良慶のほうがマシさ。小平なんぞを連れてくるとは、お新もヤキが回ったぜ」

卯平がお新をからかうと、

「あいつはもともと、芳国の絵の男役さ。女にからませりゃあ、悪くねえよ。そりゃあそうと坊さん、芳国のところへでも行ってみねえかい？　女が選り取り見取りだよ、フフフ」

「……出向こうか。逃げられちゃあコトだ」

と思い出したように孫兵衛が言ったのは、六助一味のところへ乗込もうかとの意味だ。やつらの裏切りは勘定に入れてあり、卯平があらかじめ、その寝ぐらを探り当てていた。古石場の安宿で、一切百文の女郎が三人ばかりいるが、大方はお茶を引いていて、奥がやつらの溜りだ。

五十両はまだその手許にある。異屋に届けにくるはずが来ず、小平までが姿をくらました。

孫兵衛はただひとり。塗りこめた闇の中に、軒行灯が一つ。近付くと、格子窓の内に女郎が二人坐って、あくびをしていた。

「お客さん、寄って行きな。チョンの間八十文に負けるぜ。泊りならたっぷり遊んで三百文……」

と、入口から首を出して言いかけた若い者が、ギョッとして口をつぐんだ。

「みないるかい？　例のものをもらいに来たが」

旦那風の温顔で、孫兵衛はズイと入った。仕込杖も手にしていない。奥の間に六助以下、侍に化けた面々がたむろしていた。

「一度、おれに渡してもらおうか。あとで手に入った分もある。それから分けるが、どうだ？　そのほうが、おだやかだろうぜ」

「てめえひとりで乗込んだ度胸だけはほめてやるがな。見ねえ、命しらずに囲まれた形だろう」

六助は嘲笑した。

「おめえも年さ。足許の明るいうちに帰りな。命は一つしかねえぜ」

「その通り。その命を散らすのは、おれも厭だが」

六助の顔がサッと険しくなった。目配せで、ほかに四人いるのが、一斉にドスを抜き出し、孫兵衛を囲んだ。

孫兵衛はふところから、妙なものを出した。金輪のような品だが、把手めいたものがついている。それを握ったと思うと、輪は強い勢いで、一直線にピンと伸びた。長さは一尺五寸くらい、幅はせいぜい三分、先細りで端は針のようだ。たやすく丸められるほど、刃は薄い。

六助はおびえた目をしたが、下手な強がりが悪かった。孫兵衛は無雑作に、一人に向かってその武器を突き出し、そいつがびっくりしてあとすざり、いま一人にぶつかり、重なった

ところで、上体を前に倒すようにして、右腕を一杯に伸ばした。次の瞬間には抜いていた。

二人が芋刺しになったとわかったのは、しばらくのちである。二人は畳に尻餅を付き、不思議そうに、自分の胸を見ていた。

奇妙な剣は、うしろになった男の背から、切先を一寸ほども出していたはずである。

六助が悲鳴を上げるのと、二人が倒れるのとが同時だった。

「無益な殺生をさせたな、六助。さあ、金をお出し」

と孫兵衛は言った。

英信は上体を起した。奥方は深い呼吸をし、明るく英信を見上げていた。

何度抱いても、まだ足りない体だ。英信は涙を流した。それからまた、奥方の胸にしがみつき、乳房を口に含んだ。大きく奥方を抱き込み、何度も頬ずりをした。

再び身を起した時、英信の右手には短刀があった。左手はしっかりと、奥方の肩を捕えている。それに、体の重みをみなかけていた。

英信は刃先を奥方の左の乳下に擬した。

「わたしを殺し、おまえも死ぬつもりかえ？　仕方がない。おやり。ひと思いにお刺しなさい」

と、奥方は言った。静かに笑顔をたたえていて、身じろぎもしない。瞳は透き通って見えた。

英信はうめき、奥方の横に身を倒した。その時、短刀の切先は、奥方の肌を少し傷付けた。

……それから英信は奥方を離れて起き上り、首を垂れていたが、短刀を取り直し、おのれの首を掻こうとした。その手首を、奥方の手刀が打った。短刀は枕元に飛んだ。

「これでお別れだ、お坊さん。何もかも、未熟だねえ。乞食坊主に戻って、托鉢でもなさい。それとも、分相応の極悪人か女たらし……死ぬのはまだぜいたく、ホホホ」

奥方の裸身がすらりと立っている。胸の辺りから血が一筋。下腹の茂みの一むらが、斜めうしろからくる明りの中に浮かび上って、ピッと輝いた。

第八話　怨(うら)みの的(まと)は生人形(いきにんぎょう)

一

「お前さんは、いい肌をしておいでだね」
「いいえ、色がくろくって」
と、半分は口の中で言いながら、お京は小さくなった。
「わたしは生っ白いのは嫌いさ。男だってそうだよ。お前さんのは、くろいのじゃない、卵色の、ぐっと薄いような色で、しかも澄んでいる。さぞかし手入れが……」
顔を伏せたお京は、はにかみ笑いをしながら、声をかけられた相手から、少しずつ遠ざかった。
その相手というのは、年の頃四十いくつ、全く見知らぬ顔の女だった。小太りで色は白く、手先、足先がきれいだから、長屋の山の神という部類ではない。
お京はさっきから、女の目に気付いていた。女湯の流し場は芋を洗うようで、前もかくさぬ裸ん坊が右往左往し、赤子が泣き叫び、餓鬼共が走り回り、お引きずりがあたり構わず、大口開けてさえずり合い、戦場の騒ぎだから、お京の姿など、混雑にまぎれてしまうはずだ

が、忘れた頃に、どこからかその女が見ている。
色っぽいのを探しているとすれば、女の素姓も見当がつく。お京には迷惑な話だった。
煤けた古女房のつくりも、銭湯では化けの皮がはげる。なにしろ、素肌に細工を加えるわけにはゆかない。顔も、洗えば生地が出るのだから、なるべくは家の中で体を拭くなり、行水を使うなりして、済ませているが、それでも五日に一度は、どうしても銭湯の世話にならずにはいられない。
銭湯も、顔なじみができては困るから、一つ所には通わないようにしている。裸になっても目立たぬように、いつも体を縮め、流し場では端のほうに寄る。
そうして用心をしていれば、まず人目を引くことはない。もともとお京は、ちょっと見にはごくありふれた女なのだ。
真白で餅肌で、胸や腰回りが得も言われずあだっぽい女なら、いくらもいて、これ見よがしに糠袋を使っている。
お京はその女のことをすっかり忘れて、銭湯を出た。いつものように、夜になっている。
夜なら顔もはっきりせず、体は粗服に包んでいるのだから、すれ違う男たちも気付かぬと思えばさにあらずで、必らず声を掛けられたり、袖を引かれたりする。
どうやら、化粧をせぬ顔ながら、ほのぼのと上気して、血の色を散らしているのが、夜目にも鮮やかに浮かび上るせいのようだ。

その女に尾けられていたのを、お京は知らなかった。

西念寺横町、巽屋孫兵衛の店に、一人の男客が入ってきたのは、その翌日の昼過ぎ。師走まであと十日で、寒さもめっきり厳しくなったが、この日は珍らしく小春日和であった。

さるお屋敷に奉公する者だが、お女中方に頼まれて、買物にやってきた、というのが、客の口上だった。ついては、やさしくて女受けのしそうな草双紙、読本のたぐいを見せてもらいたい、また役者絵もほしいという。

孫兵衛は、若い女が喜びそうな、綺麗で読みやすいのを、あれこれと選び出しながら、お屋敷とはどんなお屋敷かと、見当をつけ兼ねていた。

客はお店者とも見えず、二本差しとも見えず、若党、中間の類でもなさそうだ。

女中衆は何人もいるから、どっさり買わねば間に合わぬと、客は言う。

「わたしも用で出たのに、迷惑な話さ。だが、お女中はめったに出られぬ身の上だから、聞いてやらねば気の毒でね」

なにか重そうな風呂敷包みをぶら下げている客は、そうも言った。

……とするとやはり、屋敷のあるじは御大身の旗本あたりか、とも思うが、いま一つ、ピッタリこない。客は質素だが羽織袴姿で、腰に脇差を帯びていた。

全体、武張ったところはない。年は三十そこそこであろう。色白、やさ男の部類で、商家

の帳場にでも置いたほうが似合いそうだが、根っから柔弱そうでいて、時々は険のある、図太い目付きをする。油断のならない人相と言っていい。

選ばれた草双紙類は、けっこう一山になった。

「お屋敷まで、わたくしがお持ちいたしましょう」

と孫兵衛が言うと、

「それはありがたいが、なろうことなら、お内儀に……」

女中が選んで、返すものがあろうから、奥まで入ってもらいたい。そのためには、持参するのは女でなければ困る。自分は奥まで入れぬし、こんな買物をしてやったのが、主人に知れたら、叱られる……

「なるほど、ご尤もで。そういたしましょう」

と孫兵衛は承知したが、客の言い様が、弁解めいてくどい。雲行きが妙だな、と心の内で眉をひそめた。

お京は奥で着替えをした。だが、着替えて映えるといういで立ちではない。くすんだ綿結城の縞の袷に黒の繻子帯、髪はほんの申しわけに櫛を入れただけで、もとより化粧っ気はない。

「うさん臭え野郎だが、どうする？」

と、小声で孫兵衛。

「行きましょうよ。うさん臭い場所には、えてして面白い話があるもの」
「だが、お前の身が、ちと気になる」
「おや、なぜ？」
「なぜと聞かれても困るが」
お京はニッコリして、
「心配なら尾けておくれ。わたしはまた、一仕事できそうな気がするのさ」
「なるほど、それでは言うまい。だが用心しろよ」
孫兵衛は苦笑しつつ、お京の頬を軽く叩いた。
「これはおかみさん、ご足労だね」
お京が店に出てあいさつすると、客はそう声を掛けたが、表情に、案に相違という、失望の色がある。お京は風呂敷包みを、胸に抱いた。
孫兵衛は客を店の外まで送って出てから、奥に入ると素早く着物を脱ぎ、押入れから大工の半天、股引をひっぱり出した。

「この先に駕籠が待っているから、それに乗っておくれ」
と、客が言った。
「駕籠？　わたくしが？　そんな、もったいない。お客様がお乗りなさいまし。わたくしは歩いて参ります」
「いやいや、ちょいと遠方だから、女の足で、しかも荷物を持っちゃあ無理だ。わたしは男で、歩き慣れてもいるんだ」
「あの、お屋敷はどちらでございます？」
「本所の外れさ。ほれ、あの駕籠がそうだ」
西念寺横町から北へ、細い道を曲りくねり、客はちょいちょい、うしろを気にしているようだったが、孫兵衛が姿を見られる気遣いはなかった。
駕籠は行手の小橋のたもとに待っていた。橋は黒江橋、橋下は淀んだ水面を見せる油堀だ。
「おかしなことを聞くようだが、お前さん、本当に巽屋のおかみさんかい？」
足をゆるめながら、お京の顔をジッと見返って、客が聞いた。
「はい。ほかにはおりません。なぜでございます？」
「いや……なにね。ご亭主とは年が違いすぎるように思ったからさ」
お京は答えず、微かな笑いを漂わせたばかりである。どこへ連れて行って、何をさせようというのだろう？
お京は駕籠に乗った。垂れがおり、スッと持ち上る。どうしたわけか、のぞき窓は用をなさなかった。
「急いでくれ」

と客は駕籠かきに命じ、先に立った。

やたらに角々を曲り、遠回りをしているようだが、順路をお京に知られまいというつもりだろう。

お京も土地に詳しいわけではない。垂れを動かせば、外は見えるものの、小名木川を渡ったまではわかったが、あとは五里霧中だった。お京はあきらめて、目をつぶった。

……息杖をトンと突く音がして、駕籠はジワリと地面におりた。

大きな屋敷内である。方々に、亭々たる老樹が枝をさし伸ばしていて、庭は昼なお薄暗く、植込みは深い。

「こうおいでなさい」

と導かれた正面に小門があって、その左右は竹垣だ。

開いた門の下に、腰元という風体の女が立っていた。お京が小腰を屈めて近付くと、無表情で、こちらへという身振りで背を向け、奥へ歩きだした。

「それじゃあ、わたしはこれで」

と、うしろで男の声がした。

二

長い廊下を、よほど奥へきた。屋内は深山のように静かで、物音がしない。人の気配もないようだ。花やいだ女中たちの姿は見えず、旗本屋敷の奥向きとは思えない。

腰元風の女は、ずっと無言だったが、鉤の手に折れた突き当りに板戸があって、女はそれを押しあけながら、

「お入りなさい。旦那様にお目通りを」

と言った。

旦那様？　ではやはり、殿様ではないのか。それに、女ばかりのように言われたのに、「旦那様」が鎮座していて、お京に会うというのも、不思議な話だった。

そこはおそろしく広い部屋のようで、襖の立った外回りが、畳廊下になっている。

女は畳廊下を進んでお京を導く。片側には明り障子が立っている。

女は最も奥の襖を、膝をついて開けた。黙ってお京をうながす。中に足を踏み入れると、女は静かに襖を閉め、自分は入ってこなかった。

「こっちにおいで」

という男の声がした。

床柱を背に、脇息に寄りかかりながら、その男はこちらを見ていた。盃を手にしている。上体が微かに揺れているのは、深酒をしているせいかもしれない。そう言えば、顔色がひどく蒼い。

左の壁にれんじ窓があり、そこから柔らげられた光が射している。それがなければ、部屋は全く暗いだろう。

お京は下座で丁寧に頭を下げ、礼を言ったが、さっきの客が、女中衆のために、草双紙類をもとめたのを、この男……旦那様は一向知らないはずであった。

だが旦那様は、なんのことだととがめもせず、黙って酒を飲んでいるだけだ。お京のあいさつなどは、聞いてもいなかった様子だ。

陶製の大火鉢に、炭火がよくおこっていて、室内はむし暑いほどだ。

「そこではよくお前が見えぬ。ずっと寄るがいい」

と旦那様が言った。

「わたくしはもう、これで……あの、お女中衆は」

「ずっと寄れと言っている。ここへこい」

目がすわって、縁が赤い。冷たい炎が、その目の中で燃えているようだ。薄く、赤い唇がゆがみ、好色な笑いとも、冷酷なあざけりとも取れる。

額に青筋……浮き出してはいないが、透いて見える。

年は四十に間があろう。面長の顔立ちはなかなかのものだが、表情は普通でない。酒乱かと思えるが、もっと悪いかもしれない。

「寄れと言うに」

旦那様は声を震わせた。

お京は素直に膝を進めた。

「顔を伏せるな。上げろ」

と言う。お京はその通りにしたが、視線は避けている。羞恥もおびえも、怒りもなく、つつましやかに、平然とした顔だった。

どちらも無言。ただ、旦那様の息使いが、やや荒くなった。前の膳部に載っているのは銚子と、なにかわずかな肴だけで、盃に酒を注ぐ手は、休むことがない。

と、旦那様はうしろに反り返り、低い、うなるような声を出した。笑いとは受取りにくいが、笑いだ。そして二、三度手を叩いた。

その時にお京は気付いたのだが、旦那様は隻脚であった。左脚がなかった。いままで気付かなかったのは、膝にびろうど様の布を掛けていたからだった。

この部屋へお京を案内した女中が、こんどはさっきとは反対側の出入口から姿を現わし、お京を目でうながした。

旦那様の部屋を出ると、また畳廊下。少し行った左手の部屋の一枚戸を、女は重そうに引いて、

「ここでしばらくお待ちなさい」

と言った。入ると、戸がしまった。広さは四畳半そこそこ。三方が壁で、半間の床の間、

押入れがあるほか、半間幅の板敷きが付き、桐箪笥が置いてある。

部屋は広間に向いている。広間との仕切りはガラス障子で、広間の様子がよく見える。

障子は頑丈にできている。桟などは牢屋格子を思わせるほどだった。

おかしな部屋だよ、まるで広間を見物しろとでも言うようだ、と思いながら、お京は風呂敷包みを横に、くつろいで坐った。

相変らず女中たちの姿はなく、物音、人声もしない。

お京は退屈しのぎに、広間の様子を、ガラス越しにうかがった。

左右はずっと襖で、襖の外は、あの畳廊下だろう。襖は一様に白いだけで、なんの趣きもない。鴨居の上は壁ばかりで、欄間がない。天井が変っていて、一面漆喰塗り。それに、天窓が二つあった。外光はそこから入ってくる。

最も変っているのは正面奥で、壁の前に高さ六尺、間口一杯の幅の金屏風が立ち、さらに金屏風の前に、なんの必要あってか、巨大な衝立が据えてあった。

衝立は縁のない一枚板で朱塗り。高さ六尺余り、幅五尺ほど。ベタ塗りの板の上下左右に穴がいくつもうがってある。台はしっかりして、押しても小ゆるぎもすまい。

衝立は厚地の緋毛氈の上に据えてある。

ようやく背後の一枚戸があいたが、入ってきたのは腰元風の女ではなく、意外にも、銭湯で声を掛けた、例の四十女と、巽屋にきた男客だった。

意外とは言い条、全く予期していなかったわけでもない。おや、という表情を軽く見せただけで、お京が静かに居ずまいを正したのは、そのためだ。

「憶えておいでかい？　きのうはひょんなところでお目にかかったが」

と、四十女がお歯黒の口許をゆるめて聞いた。

「憶えておりますよ。わたしの体を買いかぶって、ほめてくだすったのだから。こちらにいらっしゃるとは存じませんでした」

「ほほほ、まあお前さんをだましたようで、あやまりますよ」

「それはともかく、持ってきたものをお買いになってくださいな。お女中衆はどちらです？」

「みんな買ってやるから、心配しなさんな。いくらだえ？」

と男が聞いた。

「二分と一朱、いただきます」

「うむ。……お前さん、二分の三分のじゃなく、二十両もうけたくはないかね？」

「二十両……」

お京はちょっと目を見張るようにし、そのまま男を流し見、ややうつむいて笑顔になったが、どういう意味の笑いか、見定め難い。ご冗談ばかりというのか、どうせそんなことだろうというのか、金のためなら、なんでもいたしますよというのか……

男がお京のその笑顔を見ていて、溜息をついた。

「なるほど、お前さんは不思議な女だぜ。だんだんよくなる。いや、とてつもなくいい。お春、おめえはやっぱり目が高えや」

「確かなものだろう。肌はもっといいよ。女のわたしが、つい抱きしめたくなるようだから。ようやく探し当てた人だから、悪かろうはずがない」

「巽屋で見た時は、おめえの目がどうかしているのかと思ったが……いや、あやまった」

男はお京に向いて、

「お前さん、名はなんと言った？」

「お京と申します」

「お京さん、ぜひ頼まれてくれ。ことによっちゃあ二十両どころじゃない、倍にもなろう。旦那の気に入り次第じゃあな」

「相手をしろというのじゃありますまいね」

「そうじゃあねえが……実は旦那が、おかしな道楽をなさっていてね。そら、正面に見える衝立を背に、立ってもらいたいのさ」

「早い話が、的代りに立ってほしいのさ」

と、お春と呼ばれた女が言った。

それで衝立のことはわかる。女を裸にむいて、衝立に縛りつけるのだろう。穴は縄を通すためのものだ。身動きできぬように手足、胴体をくくりつけ、こっちから矢を射る。女は生きた心地がなく、叫び、もがくがどうにもならない。気を失なっても、身近かに突き立つ矢の衝撃で吾に返り、さらにもがき叫ぶ……旦那様は、その阿鼻叫喚をじっくりと楽しみながら、矢を射続けるのだ。

のどが張り裂けるまで泣きわめこうとも、声は屋敷外には洩れまい。部屋にその配慮がしてある。

「旦那様は子供の時分に大怪我をして、片脚を切り取っておしまいなすった。それからはずっと閉じ籠りっきりで、気晴らしと言っては弓しかなかったのさ。ただの的で済んでいる間はよかったが……」

と、お春の話によれば、最初のうちは女中をつかまえて的にし、矢もタンポ付きを使い、驚き騒ぐのを喜んで、大笑いしていたくらいのものだった。だが、女の的を使うのが病みつきになり、さらに嵩じてくると、裸にせずには済まなくなったし、女中では満足できなくなった。若く美しい女でなければならない。矢もタンポを取り、矢尻をつけ、弓勢は強くなる。間違って体に当れば、突き通して衝立の板に立つ。

だが、そこは手練だ。なにしろ、子供の時分から弓を使い続けているから、手許が狂ったとしても、かすりがせいぜいで、急所には決して当らない。

若い裸の女を的にしだしたのは、十六、七の頃からで、また選り好みをし始めたのは、妻

を迎えてからのことだ。

「奥様との間が、うまくないこともあるんだよ。それに奥様はご病身だ。旦那様はあの通り、並みの五体じゃない。まず坐りっきりだから、夫婦の交りもついついとどこおる。それやこれやで、旦那様は酒びたりになり、的の注文が、いよいよむずかしくなるのさ。当り前の女じゃあ、振り向きもしなくなった。さあ、こっちは大変、足を棒にして馳けずり回らなくっちゃならない。……お前さんをめっけた時には、手を合わせたくなったよ」

旦那様はお前さんが、とてもお気に入ったそうだ。危険はないし、万一の場合に備えて、医者もいる。ぜひ的を勤めてくれ。旦那様の気を鎮めるには、そうして女の的をあてがってやるほかには、方法がない。

「それで、わたしをかどわかしたんですか」

お京は涼しい声で言って、

「お前さんたちのやり様は、解せませんねえ。ご奉公はほかに仕方があるはず。お断わりいたしましょう」

三

「場所は竪川の三ツ目橋を渡って、その先の四つ角を左に曲ったところだ。家は旗本らしい

触れ込みだったが、怪しんだ通り、違っていた。町医者さ。だが、滅法大きな構えだったよ」

因速寺本堂裏手の墓番小屋。話しているのが孫兵衛、寝そべって聞いているのが、舟まんじゅうお新と、亭主の墓守卯平だ。

同じ日の八ツ刻。お新はちかごろの寒さで、苫舟の稼ぎをおっくうがり、ずるを極めこんでいることが多い。

卯平はもともと暇ばかりで、墓場の掃除は、そこいらの腹を減らした悪たれ共に駄賃を与えて、やらせてしまう。

小屋は夜になると氷室の中にでもいるようだが、天気のいい昼間は、晩秋のようなさわやかな居心地だ。もっとも火鉢はあって、粗悪な炭が煙を立て、パチパチはぜている。

蘭方の外科で、楠見庸軒。三十半ばというが、永患いとかで門外不出、患者も見ず、診療に当っているのは、専ら代診の大高なにがしだ。この大高なにがし、悪い腕というのでもないが、それほど評判は香しからず、はやっているとは申しかねる。

不景気でも、楠見家ではあまり痛痒を感じないらしく、屋敷には大高はじめ弟子三名、用人格の男一名、それに女中も四、五名は住み込んでいる模様だ。

なにしろ、敷地が二千坪はあろう。建物もちょっとした小大名の屋敷に匹敵しそうだ。

孫兵衛が抜け目なく聞き込んだところによれば、庸軒の祖父が盲人で、検校の位をもって

いた。これがあくどい金貸しをして大もうけ、その時に地所を買い込んだ。せがれを医学修業に長崎にやった。これが庸軒の父で、業成って帰り、屋敷を建て増して外科の看板を上げた。この頃はなかなかはやったものらしく、大名家へも招かれていたそうだ。

この父親が十五年ばかり前に卒中で死去、後嗣ぎの庸軒は、医学、医療の手ほどきは受けたに違いないが、一向患者の前には現われず、業病だ、気がふれている、足萎えで動けないと、うわさとりどりだった。

ただ、死んだという話はないから、屋敷内のどこかにいるのは確かだろう。

庸軒の妻はあいという名で、両国辺に住む御家人の娘だが、手の傷の治療に通っていたのを、父が見込み、庸軒の嫁にしたそうだ。

気立てよく、しかも稀に見る美形ながら、これも蒲柳の質で病い勝ちなのが難点だ。

「草双紙を買うというのは嘘かい」

とお新。着ぶくれて、しかもよれよれで、ふくらはぎなどをニョッキリ出し、顔の白塗りも剝げ放題というていたらくだが、反ってそんな姿から、ねっとりした色気がにじみ出すのがお新だ。

「口実さね。女世帯だから女がこいというのも口実。なんのためだか、お京がほしかったのだ。かどわかしは、おれをまくつもりのグルグル回りが証拠だ。……得体の知れぬ野郎だとは思った。お京にそう言ったが、行くという。言い草がよかった。怪しげなところには、うまい話があるものと」

「すすんで行ったのか」

とお新がウフッと笑って、

「それじゃあお京に任せな。てめえの始末をつける才覚はあろうよ。こう、卯平、孫兵衛の心配面を見な。鼻の下の長い心配面だ。呆れたもんだ」

卯平はお新に構わず、

「お京はどこで目を付けられたろう。あのやつしは、なかなか見破られるものじゃねえが」

「そう言えばゆうべ、湯屋で妙な女に世辞を使われたそうだ。なるほど、それで読めた」

孫兵衛は膝を打った。

「目利きはその女で、湯屋からおれの店に、お京を尾けたのだ。男女が対で動いている。医者の家にいる者共だな」

「すると、庸軒って野郎が、みめよい女を所望か。かどわかしまでしなくっちゃならねえとすれば、庸軒はまっとうには女を呼び込めねえのだな。体が膿みただれている口か」

「卯平、よしな」

とお新が珍らしく弱音を吐いて耳をふさぎ、

「それだけは身ぶるいが出る」

孫兵衛も心なしか、顔から血の気が引いたようだった。

「またお新に笑われそうだが、こんどは気になる。まさか切り刻みはすまいが、うまい汁を待ち受けてもいられぬようだ」
「中に入りゃあよかった」
と卯平。
「そうも思ったが、お京が今夜にでも無事に帰りゃあ、それまでのことだ。帰さねえつもりでも、まだ命に別条はあるまい」
「どうやら、庸軒に人見御供と決まったね。どう扱いやがるかだが」
お新はだるそうに身を起して、
「おいらが乗り込んでみようよ。生酔いの六方を踏んで、難題を吹っかけりゃあ、なんとか相手になってくれようじゃないか。これでも男に毒気を吹っかけて、なまこ同然にするのはお新さんの得手だ」
「毒気でも熱でも、勝手に吹きやがれ」
と卯平はせせら笑ったが、
「それで様子はわかろうってもんだ。万が一、女が二人、枕を並べて冷たくなりゃあ、こっちも運の尽きよ」
「ほう、ちょうどいいところへ、お徳だ」
孫兵衛が、障子の隙間から外を見透かしながら言った。女髪結お徳が、両袖を前で合わせ、

首を縮めてやってくるところだった。
「おやおや、お頭みずからこんなところに」
と、お徳は孫兵衛をからかって、
「お新もお茶ひきか。世間は不景気と見える。金もうけの相談かい？　それなら乗るよ」
そう言わずに、よく思案しろ、すんなり的になってくれれば二十両、旦那様が気に入り、二度三度と重なれば、礼金はさらに殖え、無事に送り返してもやる。せいぜい三日か四日のことだ。あくまで断るなら、承知するまで帰さず、気は進まぬが手荒なこともしなくてはならない。お前さんの所在は、だれも知らぬ。
そう言い置いて、お春と男は部屋を出た。ピシッと錠をかける音がした。どうやら閉じこめられたようだ。
正面のガラス障子は、ビクとも動かなかった。
女の的を見物することになったのは、それからわずかあとのことだ。命に別条はないことを、お前の目で確かめろというつもりだろう。
男二人に両腕を扼され、いま一人に腰を押されて、金屏風の一方の陰から現われた女は、すでに一糸も身にまとっていなかった。
土壇場に引かれる女囚が、あの通りだろう。尻ごみし、ずりさがって膝を突き、また引立

てられては、甲斐もなく足をふんばる。恐怖のあまり、顔は無表情に近い。

朱塗りの衝立を背に大の字。手首足首、二の腕と膝の上、みぞおち、胸から両脇下、首と、細い麻縄でくくられ、穴を通して向う側に結ばれる。

女の体は、背の朱色との対照で、ことさら白蠟のように見える。胸の張りがみごとで、はたちを過ぎてはいまい。腰の円み、豊かさも申し分ないが、下腹のくさむらは、やや淡い。全体にぽってりとした肉付きをし、肌目の細かさは、お京の位置からも、よく見てとれる。あどけない顔付き、ふっくらとした受け口。だが唇の色はない。おそらく歯の根が合わず、ガチガチと音を立てているに違いない。

右側の奥の襖があいて、旦那様が入ってきた……と言うより、転げ入った。一旦突伏したが肘を立てて身を起し、少しいざってから、またふらりと横に倒れる。こんどは這い出す。衝立の正面、隔り五間ほどの場所にくるまでの道中が長かった。

そこで旦那様は、また片肘を畳に突いて、肩を波打たせた。よほど酔いが回り、これで弓が射られるかと危ぶまれる。

的の女が突然、なにか叫びだした。声は響くが、言葉は聞き取れない。だが、旦那様にやめてくれと訴えているのは確かだろう。

旦那様は女を見た。背後の位置のお京からは、せいぜいその横顔がうかがわれるに過ぎないが、色気違いの舌なめずりなら、まだいい。そうではなく、満面の冷笑だ。蒼白な頬に、

すさまじい憎悪の情が読み取れる。

女を引きずってきた三人の男は、一旦消えたが、そのうち一人が、弓と矢を運び入れて、旦那様の右脇に置いて去った。弓は半弓で黒漆塗り、矢場で使うような、チャチなものではなさそうだった。矢は五十筋ほどはあろう。丸い筒に、無雑作に投げ込んである。

女の泣き声が長く尾を引いた。旦那様はふらふらと揺れながら、弓を取り上げ、矢を筒から抜いて、つがえた。そのままグッと引き絞ったが、狙いを定めているようにも見えない。

女の黒目が吊り上り、体がピクリと動いた。もう声は失なっている。お京は女の股間から、清水がちょろちょろと、太腿から膝頭へ伝うのを見た。

瞬間矢が放たれていて、それは鋭い口笛のような音を立てた。かぶら矢の一種なのだろう。矢は女の前髪を貫いて立った。女の頭が前に垂れ気味になったのは、失神したのだろう。

……しゃくり上げるような笑い声が、旦那様の口から洩れはじめた。口からよだれを垂らし、笑い続けながら、旦那様はいまにも倒れそうに揺れつつ、次の矢をつがえている。

四

無茶な弓の引き様からすると、矢の何本かは、女の体に突きささっていて不思議はなかったが、次々に射られるかぶら矢は、芸人の短剣投げさながらで、紙一重に肌を避け、上から

下まで、裸の輪廓をなぞって、十本余り立っていた。

女は夢うつつの間をさ迷い、ふと正気になっては糸を引く泣き声を上げ、またダラリとなった。流れ出る清水は尽きた。身もだえの余地はほとんどないが、腰だけはわずかにうごめき、手足がヒクついていた。

これで二十両。怪我もせずに済むとすれば、悪くないもうけかもしれないと、お京が思った時、旦那様がヒョイと振り返り、お京と目が会った。その笑顔は、的の女に向けたのとは、少し違っていた。陰鬱な目には、ひとかけらの笑いもなかった。お京は興味をもって見返した。

旦那様はすぐ的の女に向き直り、矢をつがえて放ったが、それは女の内腿の肉を削り取り、血がしぶいた。さすがのお京が声を上げた。

旦那様は再びお京を振り返った。こんどは目が、嘲弄に満ちて笑っていた。お前の番だが……と言うように。

女は衝立からおろされ、畳の上に横たえられた。医者にしては若すぎる男が、どこからかやってきて、応急の血止めをし、さっきの男たちが女をかかえ上げて去った。旦那様はその場に伸びてしまった。

お京はその光景を、見るともなく見ていた。……孫兵衛が案じた通りになった。一仕事どころではない、悪くすれば、ここが死場所になる。しかも半狂人の手にかかって。

だが、相手は正気だろうが、気違いだろうが、死ぬのは同じことだ。寿命だと観念すれば、悔むことはない。捨てて惜しい命とも思わない。

お春たちにしてみれば、お京を安心させようという当てが外れたに違いない。まさか矢が、女の内腿を深く傷付けるとは思いも寄らなかったろう。旦那様は、それほど上手だったはずだが、あの泥酔ぶりでは……

それで、お京の抵抗を予期したのだろう、錠の外れる音がして、例の三人の男が踏み込んできた。有無を言わさぬという様子だが、お京はただ静かにしていた。

「度胸のいい女だね、番頭さん」

と、あとから入ったお春が言った。

「聞き分けがいいのさ。お京さん、いま見たようなことは、千に一つもありゃあしないんだぜ。その千に一つを見せちまったのは、しくじりだが」

番頭と呼ばれたのが、お京を連れ込んだ例の男で、医家に番頭はおかしいが、事務雑事万端を受持って、仮りにそう呼ばれているのだろう。お春とはわけのある仲かもしれない。

「お前たちの手は借りなくてよさそうだ。お京さん、お湯に入ってもらおうか。よく磨いて、生地を出しておくれ」

と言い、番頭はお春に目くばせした。お春がお京の腕を取った。

楠見庸軒屋敷の堂々たる屋根門をくぐったのはお新で、茶屋の座敷女中とでもいう身なり、黄八丈に黒襟の抜き衣紋、碁盤縞の入ったひわ茶色の帯と、着たものは小いきだが、酔余の足許もよろよろと、赤い蹴出しをちらつかせ、白い腓も露わに、玄関へ直進した。

玄関番が驚きあわてて止めにかかるのを振り払い、盲目滅法に奥をめざした。

なるほど広くて、どこがどこやらわからず、玄関番は追いすがる、弟子らしいのが飛び出して引き止めようとするので、襟は広くはだけられ、裾も開いて、男の目には毒という風情になったが、委細構わず、突きとばし、すり抜けて、飛び込んだ部屋に、代診の大高なにがしらしい男がいた。

居間とでも、休息室とでも呼ぶべきところらしいが、大高なにがしは茶碗を手に呆然とし、横に美しい御新造が、依り添うようにいた。

ほう、これが話に出た庸軒の女房、蒲柳の質とかの、おあいさんかい。なかなか蒲柳でもなさそうだが、お安くない図じゃないか、と、それは胸の中で、お新はやにわに大高を取っつかまえ、胸が苦しいの、胃がせくの、下腹が痛いのと、出まかせを並べ立て、果ては、お前さんは医者だから、ほれ薬もあろう、出してくれとせがむ始末だ。

お新をつまみ出しに、若いのが二人顔を出したのを見ると、こんどは、ほれた男がわたしを袖にして、この屋敷に逃げ込んだから、追ってきたのだ、出せとわめきだし、それから急に静かになったかと思うと、苦しい苦しいと、横になって転がりだした。

みんなめんくらって、手をつかねていたが、そのうちにウトウトしだした模様だ。

「悪酔いでしょうよ。ああ驚いた」

と、あいは胸を撫でおろす仕草をし、大高なにがしに艶っぽい目まぜを送った。

「どこかに寝かしておやりなさい。一眠りすれば、よくなるでしょう」

「へい」

と若いの二人は、待っていたように、お新の頭と足に回った。

「いい女じゃありませんか。熟し切って、色気が溢れるようだ」

大高が御新造に小声で言い、

「こんなのにまといつかれちゃあ、命がもてまいな。だが、あの人の好みにはどうかな」

「お黙りなさい」

御新造おあいは、大高をたしなめて、ニッとした。

お京は湯殿で、いっしょに入ってきたお春に、体の隅々まで磨き立てられた。お京は一言も発せず、なすがままだった。

「お前さん、怖いような女だよ。俎板の上に乗せられるというのに、鳥肌も立たず、ふるえもしない。いえ、色艶が一段と増すようだ」

と、体を拭いてやる時に、お春がふと不安気に洩らした。

湯殿を出ると、裸のままで、浴衣を上から掛けられただけ。若いのが前後に付き、手も取られずにお京は歩いた。

金屏風の陰から出ると、浴衣が剝ぎ取られ、両腕をつかまれて、衝立の前へ。

旦那様は、また盃を手にし、白痴の笑いを見せながら、全裸のお京をなめるように注視していたが、額の青筋が目立ち、顔色もいよいよ青く、まなこが不気味に坐っていた。

お京は素直に縛られ、大の字になった。縄目の食い込みは、さほど痛くはない。ただ、首の縄に呼吸をややさまたげられ、息苦しいだけだが、なにしろ身動きができない。突張ればなおさら苦しく、お京は全身の力を抜いた。

お京の肌は、まだ人手に触れない、ごく淡い色の素焼の壺のそれに似ていて、湯上りの紅らみが、わずかに加わっている。

非の打ちどころのない体の均整、肉の締り、誇らかな胸、敏捷な腹部のくびれから、豊かで深い腰へ。お京は身じろぎもせず、旦那様の視線をおだやかに迎えていた。

旦那様のカッと見開いた目に、憎悪がみなぎるようだった。……女が憎いそうな。ごく微かな笑みが、お京の目に宿ったかもしれない。旦那様は弓を取り、矢をつがえた。その顔が大きくゆがみ、強い勢で一の矢が放たれる。的になってみると、ヒュッという音は魂がけし飛ぶほど怖い。

お京は出かかる悲鳴をようやく呑み込んだ。矢は首の付け根あたり、肌すれすれのところに突き立っている。

全身が硬直し、意識が遠ざかったのは、一瞬である。お京はやはりシンと落着いたまなざしで、旦那様を見返していた。恐怖の名残りと言えば、波打っている胸と腹部であろうが、それも大波ではない。

旦那様は酒を盃に満たして一気に飲み干し、弓矢を取り直した。不安定に、ひどく揺れながらだ。顔から笑いが消えていた。

番頭は見えなかったが、お春は旦那様の斜めうしろに控えていて、お京と旦那様を、交互に見くらべていた。いつもと違い、息詰まるような気がするのか、時々そっと吐息をついた。

こんどこそは、どこか体へ……と、お京も思わざるを得なかったが、二の矢は腰へ、三の矢は脇下に立って、身をかするには至らなかった。

お京は目まいと戦った。意識もスーッと遠ざかろうとする。下半身の感覚が心細くなっている。さっきの女のように、失禁だけはしたくなかった。そして、旦那様を見返すことはやめない。どうして女を憎むのだい？

矢継ぎ早やというが、あの女の時はまずそうだった。だが、こんどは暇がかかる。手許が不確かなせいでもあろうが、旦那様は肩で息をし、うめいていた。

四の矢は膝の横、五の矢は足先、六の矢が頭上、七の矢が二の腕の上、八の矢が股間。この時だけ、お京は歯を食いしばった。

旦那様は二十本でやめ、弓を投げ出した。しばらくは夢の中にでもいるように、お京を見詰めていたが、

「杖」

とひとこと、お春に命じた。

五

「おい、おとなしくしていろ。騒ぎやがると命がねえぞ」

声と共に匕首がグサリ、お新の枕をかすめて、畳の上に突き刺さった。

「ヒャッ」

ぶざまにおびえるお新でもないが、

「助けて。命ばかりは」

と殊勝に声をふるわせて、

「おとなしくしているから」

そいつは、女が眠っている間に、と上首尾のつもりだろうが、お新は眠ったふりをしただけだ。胸乳をかい出し、臍から下をむき出しにし、両脚をかかえておっかぶさるまでの手順を、百も承知だった。

お新をこの小部屋に運んだ若造二人のうち、どちらでもよかった。目の色から、必らず忍んでくると踏んでいたのだ。

もうそろそろ夕景だろう。薄暗くなっている。

「あっ、痛い。痛い……後生だからお前、もっとやさしく……」

お京はどこだろう。まさかお陀仏じゃあるまいが、こう広くっちゃあ大弱りだね、とお新が思案しているうちにも、若造はいまのセリフに触発され、騎虎の勢いになっている。

「お前さん、立派なものをお持ちなんだねえ。もう、と、とろけそうさ」

と、お新はいい気なもので、派手な泣き様もジックリ見せるつもりだ。

「……本当に、お前さんのような人は初めてさ。これっきりじゃあ厭だよ。怨むよ。それにしてもお前、むごく責めつけるんだねえ。体の節々が痛くってたまらないじゃないか」

とお新が言ったのは、小半刻もあとのことだ。

「おれもおめえが、たまらねえ、いい。どこぞで会おうぜ」

「それじゃあ、いつでもいいから、一ツ目橋のたもとの、曳舟ってお茶屋にきておくれよ。なあに、金はわたし持ちさ、ほれっちまったんだもの。だが、足腰も立たなくなるような責め折檻はあやまるよ」

「そんなものは責め折檻のうちには入らねえや」

と、若造は得意気に、

「めっぽう美しい女を裸にして、がんじがらめにくくりつけてよ、そいつが弓の的だ。見たことも聞いたこともあるめえ？」

お新が若造にしがみついて、ぶるぶる身をふるわせ、

「お前、見たのかい？　わたしにも見せとくれ。ねえ、見たいのさ、お前さんといっしょに」

「おいおい、止さねえか。そいつはちょいと、工合が悪いんだ」

「見たいんだよう、ね？　お願いだから。どこでしているのさ？」

「驚くな。この屋敷うちだ。真最中だろうぜ。よしよし、見せてやるから、今後はてめえ、おれの女だぞ」

「うれしいよ。弓を射るのは、一体だれだえ？」

「旦那だ。酒びたりの気違いさ。こっちは手伝いをして、金に有りついている。このことはよそで一口もしゃべるんじゃねえぞ」

「わかってるよ。さっきのは旦那じゃないんだね？」

「ありゃあ代診の大高という悪者さ。さ、起きて帯でも締め直しな」

曳舟という茶屋なんぞ、ありはしない。

旦那様が杖を使うことは、めったにないらしい。その証拠に、お春が持ってきた松葉杖はほこりだらけだった。酔いどれた一本足で、立つつもりかと、お春は怪しんだようだが、旦那様はうまく杖にすがり、立ち上ると、ゆっくり的のほうへ進んだ。杖の使い様、体の運びが、意外に着実だった。

「あ、お前さんたち、縄を」

と、お春は彼女に付いてきた若造二人に言いつけたが、

「縄はおれが解く。邪魔をするな」

と、旦那様が強く言った。物言いも酔払いのそれではなかった。それにしても、若造が一人足りない。

旦那様は、お京と、至近の距離で向い合った。お京の表情は茫乎として、瞳は透明だ。旦那様のまなざしは沈痛ながら、どこか、これまでになかった優しみが加わっているようだ。

「旦那様、そのお体で……」

と、お春がハラハラした様子だが、旦那様は無言で、衝立のうしろに回った。

番頭が広間に入ってきて、お春と並んだ。

お春が番頭に耳打ちし、番頭はむずかしい顔になった。なにやら様子が妙だ、というのだろう。

手首、足首、膝上、二の腕という順に、縄が解けた。最後が胸から両脇への縄だったが、それだけを残して、旦那様は前へ回り、ふところから小柄様の刃物を取り出し、縄を切った。

お京に意識はある。だが体がさすがに言うことを聞かず、崩れかかるのを、旦那様は胸で受け止め、左手を松葉杖から離してお京を抱きかかえたまま、しばらく動かなかったが、おそらく必死の努力だろう、一本足と片方の杖を支えに、少しずつ体を沈め、無事にお京を横臥させた。そこは毛氈の上である。

お京の呼吸は安らかになっていた。旦那様、楠見庸軒はかたわらに坐り、お京の頬や首筋を、軽くなぶった。

「寒いかい？」

と庸軒が聞き、お京は寒くないと目で答えた。

「旦那様、お気に入りましたか」

番頭が寄ってきて、そう聞いた。

「大気に入りさ、番頭。手放したくない」

「そりゃあようございました。お春も苦労の甲斐があったと言うもので」

「番頭、弓矢をこっちに運んでくれ」

天窓からの明りは薄れた。いつの間にか灯が入った。広間の四隅と真中に燭台を置いたのは、お春が使っているらしい、あの腰元風の女であろう。

「……まるっきり正気じゃないか。おかしいね」

「なあに、たまにそんなこともあろうて」

「わたしゃなんだか、胸騒ぎがして」

「ばかなことを」

弓矢を庸軒のそばに運んだあと、お春と番頭はそんなささやきを交した。若造二人は、お京を用意の部屋に運ぶため、金屏風の前に控えている。

「彦三はどこへ行きやがったんだ？」

と、番頭がつぶやいた。

「おれは生母を知らん。浮気者だったという。おれが片足を失なったについては、だれもわけを教えてくれなかったが、わかっている。幼ないおれが浮気の現場を見つけたので、口を塞ごうと、おれを深い井戸に突き落したんだ。その母は、男と駆落ちした。結構な医者の妻を棒に振ってだ。……母を怨んではおらん。むしろ思を通して天晴れだと思っている。親父は医者としては立派だったが、男としては、なっていなかった。継母が入っての。これがおれの心を、底の底まで踏みにじった。おもちゃにされたのさ。十三の年から、はたちを過ぎるまで。おれが虚弱で、うまく動けもせぬのを幸い、いいように犯され、なぶられ続けた。この苦患は、口で言うてもわかるまい。思い出すと、おれはヘドを吐く。いまでもな」

前置きもなく、庸軒は独り言のように小声で話しだした。視線はお京の裸形の上を這っているが、好色のほむらはない。

「おれは女に欲が起きなくなった。妻が来たら、と思ったが、これはさらに悪かった。たぶん継母は、妻に毒でも盛られたのであろう、ゆるやかに利く毒をな。妻にくらべれば、継母のほうがまだしもであったな。……繰りごとだ。言うてもそなたへの詫びにはならん。ただ、聞いてほしかっただけのことさ」

「むごいもんだねえ。それでも、女が無傷でホッとしたよ。ねえお前、あんなものを見たら、体中が熱くなって……きっと来ておくれよ」

お新は彦三という若造に身をすり寄せ、べったり頬っぺたに吸いついてやってから、はずかしいから、玄関からは帰らない、庭を通って裏口から出るから、お前は知らぬ顔で表に帰りな、と彦三を追い払うと、明るい方へ明るい方へと廊下を歩き、突き当りの戸口から庭におりた。

広間の位置を確かめ、裏口へ回ろうとすると、

「お新、お新」

とお徳の声が降ってきた。高い土塀の上に黒装束。プッと吹き出そうとした時、お徳は一躍、榎の枝に取り付いて、ひらりと地上に降り立った……はずだが、尻餅をついて大儀そうに起き上り、

「年は取りたくねえもんだ」

とぼやいた。

「なんだい、そりゃあ。御金蔵破りでもあるめえし」

「無事かい、レコは」

「運のいい女さ。行きゃあわかるが、素っ裸で的にされるのさ。的からはおろされたようだが、旦つくはまだお京に取り付いていやがる。孫兵衛たちは？」

返事の代りに、お徳は鳩笛を取り出して吹いた。

「さすがに間合いがいい。孫兵衛もこんどはあわてたね。いい気味だ」

広間に踏み込んだ一同は、釘付けにならざるを得なかった。お京は庸軒の手中にあり、庸軒は弓を握っている。動けばお京が刺されるか、矢が飛んでくるかだ。

「じっとしていろ。その杖は仕込みか。こっちへ寄越しやがれ」

と、番頭が近付いて、孫兵衛持参の仕込杖を取り上げた。

「アマめ。計りやがったな」

と、彦三が言いつつ、匕首を抜いて寄ってきた。他の二人の手にも刃物。お春は素早くお京のそばに馳け寄り、胸の上に匕首をかざした。

「気の毒だが、生かしておくわけにはゆかねえ。てめえの刃物で殺されるのは皮肉だな」

と、番頭が言い、孫兵衛の仕込杖を抜いた。庸軒は矢をつがえ、こちらを狙っている。

「お京を殺せば、お前たちも皆殺しだ。こっちも死人は出ようが、一人二人は生き残る。おれたちは、てめえら素人が考えるほど、ヤワにできちゃあいねえのだ。助かりたかったら、おとなしくお京を渡すがいいぜ」

と、孫兵衛が沈んだ声で言った。番頭の顔におびえが走り、わめきながら仕込みの刀を振りかぶった。

ヒュッという音がした。矢は番頭の首をみごとに貫いていた。声もなく倒れかかる手から、孫兵衛は仕込みを奪い返し、投げた。仕込みの切先は、五間離れたお春の胸に深く突き立った。

若造三人は、雇い入れたあぶれ者だろう。彦三だけが、手傷を負いながら逃げて行った。逃げたのはもう一人、代診の大高なにがしで、はだしで玄関から飛び出した。

庸軒は腰の抜けたあいに当座の金を渡し、どこへなりと行くがいいと、引導を渡した。

「わたしは廃人同様になってから、はじめて女というものに会った。身代をみな、お前さんにやるが、お京さんを譲ってくれまいか」

「身代をいくらお持ちか知らないが、お断りだね」

「ははは。無駄なことを聞いた。だがお京さんは、おれを生き返らせてくれた。それではあきらめるが、せめて絵姿でも持っていたい」

「そりゃあ、宇陀川芳国という、うまい絵師がいる。お京を描くなら、タダでいいというやつでね」

「いや、お詫びも兼ねて、高く買わせてもらおう。高いほうがいい……」

「お前さんはお京を射殺したかもしれねえ」

「いや、半狂人は真似、生酔いも半分は芝居だった。的にした女は数え切れないが、傷を付けたのはわざとさ。わたしは五間離れて、壁に蠅を縫いつける。お京さんの前に太腿を刺した女……あれも、お京さんに見せつけ、気を転倒させてみようためだった。だが、そうはゆかなかったよ」

大高とあいは、楠見の大身代が目当てだった。殺すのは露見しやすく、幸い庸軒の悪癖が嵩じかかっているところで、番頭やお春を使い、いやが上にも弓矢遊びを助長し、酒びたりにもさせて、真の狂気に追い込む目算だった。

「知ってはいたが、このおれが本当に気違いになりたかったのだよ。身代など、要るものか……ほしいなら取るがいい、そう思っていた」

「お前さん、外科の療治はやれるのかい」

「すぐにとはゆかんが、追い追いにやれよう。怪我をした女は、吉原に売られてすぐ逃げた者だが、罪ほろぼしに、これといっしょに暮すのもいい」

お徳が口を入れて、

「おいお新、おめえが的になったら騒々しかろうねえ。ギャアギャアわめき立てた上に、白目をむいて泡を吹くのはまだしも、日光は華厳の滝という勢いで、垂れ流すよ」
「おめえの悪口も古いや。お医者さん、論より証拠だ、やっておくれかい？　ビクともするもんじゃねえや」
お京を見に行き、戻ってきた卯平が、
「すやすや眠っているぜ」
と言った。お京の体は絹布団の下だ。

解　説

宮部みゆき

主要登場人物全員、悪いやつら。
一口で御紹介するならば、この作品はそういう小説であります。
映画でもお芝居でも、そしてもちろん小説でも、悪役に魅力がなくては面白くない——と、よく言われます。正義の主人公対非道の悪党。この組合せで、双方の知力・体力・能力が伯仲していればしているほど、物語も白熱するというわけですね。
そして、この格言めいた言葉がもっとも的確にあてはまるのが、時代小説、時代劇の場合ではないかと、わたしは思います。逆に言うならば、読者が思わずページの上からつまみとって捨ててしまいたくなるような悪人が生き生きと存在し得るのは、時代物の舞台の上だけになってしまったのではないか——と思うのです。
現代物の場合でも、もちろん善悪を問わず、キャラクターが魅力的でなければ読んで面白くないことに、変わりはありません。現実にそういう素敵な娯楽小説はたくさん書かれています。ということは、その小説の数だけ素敵な悪役がいると言ってもいいでしょう。ただ、

現代を描いている現代の娯楽小説の中には、特定の個人として、物語全体をしょって立つほどの「悪」を放射している人物像が、どうも見当らないな……という気がするのです。

これは、ほかでもない「現代」には、はっきりした「悪人」がいなくなってきつつあるからじゃないかと思います。犯罪にしても、社会問題にしても、事故にしても、なんとなく常に責任の所在がはっきりしてなくて、誰か一人を、あるいは企業ならある特定の部署なりその管理職なりを断罪すれば済んでしまう、という構造になってないのです。それほどまでに、一人一人の日常生活が複雑になってしまっているのだと思います。

だから、たとえば、いちばんストレートに犯罪と犯罪者を扱う推理小説にしても、「まったき悪人」が犯人である——という作品は、まずないんじゃないかと思うのです。たとえどんなに残虐なことをやってのけた犯人だとしても、彼もしくは彼女には言い分があり、罪を犯した理由も、動機づけもあります。「狂気」や「悪」にも複雑な原因がないと、「お話」が成立しなくなってきている。一面、これは、現代物の推理小説にとって、とても幸せなことでもあるのですが。

ただ、そういう「現代」を背景にしては、純粋な「悪」がきらきらと結晶しているような人物を娯楽小説のなかに描くことは、かなりしんどいだろうと思うのです。その背中の向こう側に、家族とか育ってきた家庭環境とか、初恋のひとの顔なんか、絶対に想像することのできない人間、それほど真っ黒の人間。そういう人間は、現代物の娯楽小説のなかでは、もうずいぶん昔から失業しているような気がします。

ところが、時代小説のなかでは、彼ら「仇役」はしっかりと商売を張っているのです。しかも、相当繁盛しているのです。

だから面白い。現代物の小説に触れる時とはまた別の胸のときめきを、時代小説は与えてくれます。

さて。

この小説のなかには、実に多種多様な「悪党」と「悪人」が登場します。「悪党」とは、本編の主人公である絵草子屋の孫兵衛と、その一味の面々。そして「悪人」とは、彼らにこっぴどくやっつけられる、すけべな町医者や旗本の奥方や生臭坊主や……とにかく、「真っ黒」な連中です。

ここでは、ごく当たり前の定石である「白対黒」の図式がありません。どっちも「黒」です。ただ、その黒の種類が違います。上下があるのではなくて、種族が全然異なっているのですね。

「毒をもって毒を制す」というとありきたりな言葉ですが、孫兵衛たちは実に見事に、「悪人」連中をぺっちゃんこにしてしまい、しかもちゃんとそこから「上がり」を戴くのです。

この水際だった手口。一つの話が終わるごとに、孫兵衛一党の背中に、「持ってけ、ドロ

ボー！」と叫んでしまいたくなります。

ひょっとするとそういう読者は案外たくさんいるのかもしれませんが、わたしは小説を読むとき、必ず「あて読み」をします。登場人物に、自分だけの配役をするのです。普通、役者さん、タレントさん、プロ野球選手に「出演」してもらうことが多いのですが、時には、電車の中で本を読んでいて、ふっと目をあげたら、前の座席に座っているおじさんが、小説中の悪巧みばっかりしている家老にぴったりはまっていた、などという楽しいこともあります。

（あ、あれだね、あの顔）と、思わずつぶやいたりして。なかなか面白いことで、やめられません。

ところが、今回のこの小説では、配役がとても難航してしまいました。孫兵衛は緒形拳かなあ……上手な俳優だからうまく演ってくれそう……などと考えていたのですが、お京のところで、はたとつまってしまった。

ふだんはくたびれた女将さんなんだけれど、肌を見せる場合にはがらりと変わってしまう、という女です。第八話で、お京が銭湯で妙な女に目をつけられる場面が出てきますが、ここはもう、駄目押しのように、彼女の凄い女ぶりが描かれているところだと思いました。

わたしは自分も銭湯の愛好者なので、実感として思うのですが、女風呂って、男の方たちが想像するほど魅力的な場所じゃ、ないです。そうそうモデルさんみたいな女性ばかりはいませんし、てんでにノビノビと身体を洗ったりしているわけですから。

でも、ときたま、思わず目で追ってしまうような美しい女性が、いることはあります。本当に数少ないけれど、いるんですね。そして、銭湯で美女だということは、本物の美女だということです。

お京はそういう女なんです。それで、根っからのワル。色好みで、でも頭が切れて、しかも度胸がいいときてる。こんな女を演じることのできる女優さん、いるでしょうか。

彼女の仲間のお新にしても、同じです。第六話、「心の闇に狂い花」に登場する銀五郎という男、これがまあ八つ裂きにしてやってもあきたらない、とんでもない男なんですが、彼とよつに渡り合ったお新も、よくよく肝っ玉の座った女です。第六話に限らず、読みながら思わず「イテテテ……」と言いたくなるような場面がたくさんありますが、お京もお新も、まずまあタフでワイルドな女たちであります。

「配役」に困ったのは、女性陣ばかりではありません。

絵師の芳国。彼も一筋縄では演じきれないキャラクターでしょう。天才肌なんでしょうけれど、「狂気と紙一重」と表現するには、あまりに俗人すぎます。三国連太郎はどうかな、でもちょっと体格が良すぎるかしらなどと考えて、ずいぶん悩んでしまいました。それと、これは「悪人」の側で、第一話に出てくる浪人の、柳逸平。彼も困ります。ひょろっとしてぬぼーっとして、「斬ってやる」とぼそりと言える、「ばかに老けて見える」若い男。お京に

執心するくらいですから女嫌いではないんでしょうが、彼は女に言い寄る時でさえも、抜き身の刀のように冷たくて、危ない感じがする男のように思えます。ふさわしい俳優さんの顔、ちょっと思い浮かびません。

さて、次の第二話に関連して、ひとつ、この話のなかに登場するある人物が、わたしは大好きになってしまいました。分類すれば「悪人」の側にいる男なのですが、実は、孫兵衛たちに脅されて裏切るのです。この解説から先に読んでおられる読者のために、名前を書くことはできないのですが。

彼のこの裏切り方が、実に楽しくて、可愛らしい。「ばかに律儀に約束を守り」、孫兵衛に仕込み杖を渡しに走ってくるかと思うと、「悪く思うな。負ける方に付く阿呆はいねえ」などとうそぶいてみるくせに、一件落着のあと、「おれはどうすればよかろう」なんて、卯平に尋ねて鼻であしらわれたりしているのです。第二話は、題名からもわかるような恐ろしい水車が回るお話なのですが、彼の存在でほっと息が抜けます。この人も、誰が演じてもぴったりこないでしょう。活字の力だ、と思います。

いろいろと勝手なことをたくさん書いてきましたが、最後に、駆出しのミステリー書きであるわたしが、この小説の解説を書かせていただくことになった理由について、少し。

もう何年か前のことになりますが、わたしはある小説教室で、多岐川先生に習作を見ていただいたことがあるのです。楽しくて、有意義な経験でした。だから、わたしにとっては常に、「多岐川先生」です。

初めて、先生の講義を受けたとき、時代小説の話が出ました。そして、先生が質問されたことを、よく覚えています。

「このなかで、時代物を書いてみたいと思っている人はいますか?」

生徒が数人、遠慮がちに手をあげました。わたしも実は、その一人でした。

すると先生は、こう言われました。

「今手をあげた人たちは、とにかく書いてごらんなさい。時代考証や歴史の勉強は、書きながらでもできる。怖がらないで、まず面白い話をつくることを考えて、書いてごらんなさい」

その言葉は、そのまま、先生の時代小説のなかに、一本通っている背骨なのではないかと、わたしは思います。面白く、読者を楽しませ、納得させ、酔わせる——ページをめくる読者を、決して、決して裏切らない、という意味で。

だからこの作品でも、安心して、錦絵のような絵草子のなかに飛び込んでしまいましょう。この錦絵には、朱色の部分に、少しばかり人の血の色が混じっていますけれど、でも大丈夫、それは読者の血ではありませんから。ぽんと飛び込んで、堪能して、五体満足で出てくることができます。

そして、この危ない錦絵に魅せられてしまった方。まだ正編を読んでおられないならば、そちらの方も、ぜひどうぞ。

（平成二年七月、作家）

発表誌一覧

「箱入娘はお目の毒」　小説新潮昭和51年11月号
「女が回る水車」　〃　昭和52年7月号
「死んだ夜鷹が福の神」　〃　昭和52年12月号
「夢路の果ては地獄の図」　〃　昭和53年3月号
「行き暮れて雀のお宿」　〃　昭和53年6月号
「心の闇に狂い花」　〃　昭和53年9月号
「極楽浄土を逆落し」　〃　昭和54年3月号
「怨みの的は生人形」　〃　昭和54年12月号

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。
四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

多岐川恭著　**用心棒**

過去は捨てた、未来も捨てた。色と欲の泥沼の中で、明日をも知れぬ用心棒——骨の髄まで腐った奴らを南無三宝と捨て身斬り。

多岐川恭著　**色仕掛　闇の絵草紙**

巽屋孫兵衛が率いる、ひと癖もふた癖もある面々が色欲に呆けた悪党どもを、あの手この手で引っ掛ける。江戸のピカレスク・ロマン。

新潮社編　**時代小説大全集**

白石一郎、早乙女貢、隆慶一郎、津本陽、夢枕獏……。まだ夜の闇が深かったころを描く十七人の名手による時代小説アンソロジー。

新潮社編　**勝者と敗者**
—時代小説大全集2—

ゆっくりと流れてゆく時間に生きた、武将、剣豪、商人たちの姿を鮮やかに映し出す、15の名篇。『時代小説大全集』の第二弾！

赤川次郎ほか著　**ミステリー大全集**

赤川次郎、佐野洋、栗本薫、森村誠一ら13人の人気作家が趣向をこらした13編に、各作家のプロフィールを加えたミステリー決定版！

新潮社編　**ミステリー日本地図**
—ミステリー大全集2—

旅はいつもミステリー。阿刀田高、辻真先、都筑道夫ら名手11人があなたを危険な旅へ招待するミステリー・アンソロジーの決定版。

永井路子著

日本史にみる女の愛と生き方

美しい女とは、賢い女とは？　小野小町、清少納言など、歴史に名を残す女性33人を新たな視点で見つめた、ユニークな女性史探訪。

永井路子著

絵巻

栄枯盛衰のめまぐるしい源平時代――常に変わらぬ人間の欲望と、変転きわまりない時代の流れを〝絵巻〟にたとえて綴った連作小説。

永井路子著

悪霊列伝（正・続）

菅原道真、楠木正成、平将門、伴大納言……熾烈な権力闘争に敗れ、悪霊となった人間たち。彼らの怨念とその背景を探る人物評伝集。

永井路子著

からくり紅花

口紅の原料紅花の売買を一手に取扱う御用商人轟屋の番頭貞吉の失踪には、からくりがあった。表題作などミステリー時代小説7編。

永井路子著

この世をば（上・下）

三男坊で大人しい性格だった藤原道長は、血族の熾烈な権力争いに巻き込まれて行く……。〝王朝カンパニー〟の構造を描き出す傑作長編。

永井路子著

わかぎみ

素姓の知れぬ男の子を預かった新兵衛夫婦。戦乱に巻き込まれた少年の悲哀を描いた表題作など、江戸時代に材を取った時代小説8編。

池波正太郎著

忍者丹波大介

関ケ原の合戦で徳川方が勝利し時代の波の中で失われていく忍者の世界の信義……一匹狼となり暗躍する丹波大介の凄絶な死闘を描く。

池波正太郎著

男（おとこぶり）振

主君の嗣子に奇病を侮蔑された源太郎は乱暴を働くが、別人の小太郎として生きることを許される。数奇な運命をユーモラスに描く。

池波正太郎著

俠客

「お若えの、お待ちなせえやし」の幡随院長兵衛とはどんな人物だったのか――旗本水野十郎左衛門との宿命的な対決を通して描く。

池波正太郎著

剣の天地

戦国乱世に、剣禅一如の境地をひらいて新陰流の創始者となり、剣聖とあおがれた上州の武将・上泉伊勢守の生涯を描く長編時代小説。

池波正太郎著

食卓の情景

鮨をにぎるあるじの眼の輝き、どんどん焼屋に弟子入りしようとした少年時代の想い出など、食べ物に託して人生感を語るエッセイ。

池波正太郎著

闇の狩人（全二冊）

記憶喪失の若侍が、仕掛人となって江戸の闇夜に暗躍する。魑魅魍魎とび交う江戸暗黒街に名もない人々の生きざまを描く時代長編。

藤沢周平著

用心棒日月抄

故あって人を斬り脱藩、刺客に追われながらの用心棒稼業。が、巷間を騒がす赤穂浪人の動きが又八郎の請負う仕事にも深い影を……。

藤沢周平著

竹光始末

糊口をしのぐために刀を売り、竹光を腰に仕官の条件である上意討へと向う豪気な男。表題作の他、武士の宿命を描いた傑作小説5編。

藤沢周平著

時雨のあと

兄の立ち直りを心の支えに苦界に身を沈める妹みゆき。表題作の他、江戸の市井に咲く小哀話を、繊麗に人情味豊かに描く傑作短編集。

藤沢周平著

冤罪

勘定方相良彦兵衛は、藩金横領の罪で詰め腹を切らされ、その日から娘の明乃も失踪した……。表題作はじめ、士道小説9編を収録。

藤沢周平著

橋ものがたり

様々な人間が日毎行き交う江戸の橋を舞台に演じられる、出会いと別れ。男女の喜怒哀楽の表情を瑞々しい筆致に描く傑作時代小説。

藤沢周平著

神隠し

失踪した内儀が、三日後不意に戻った。一層凄艶さを増して……。女の魔性を描いた表題作をはじめ江戸庶民の哀歓を映す珠玉短編集。

新潮文庫最新刊

三浦綾子著

わが青春に出会った本

青春時代を振り返った時、そこにはいつも本があった。著者の生き方に大きな影響を与えた東西の名作について綴った読書エッセイ。

山本周五郎著

酔いどれ次郎八

上意討ちを首尾よく果たした二人の武士に襲いかかる苛酷な運命のいたずらを通し、著者の人間観を際立たせた表題作など11編を収録。

丸谷才一著

裏声で歌へ君が代

息づまるような国家論の応酬。大人の恋愛。最上のユーモアとエロティシズム。スリリングな展開のうちに国家とは何かを問いかける。

辻井喬著

不安の周辺

広告会社の社長交替劇の背後には何があったのか？ 現実に大企業のトップにたつ著者が経営者の内面を赤裸に描く異色の企業小説。

北杜夫著

マンボウの素人乗馬読本

乗馬は貴族のスポーツではない。達人になるためではなく、馬に親しみ、楽しく馬に乗るための、素人による素人のための乗馬読本。

多岐川恭著

色仕掛深川あぶな絵地獄

巽屋孫兵衛一党が、色欲に狂った男どもを鮮やかな手口で欺き、身代残らず巻き上げる。痛快無比の8編を収めたシリーズ第二弾！

新潮文庫最新刊

田中康夫著　ファディッシュ考現学 2

ディスコ、パーティー、「フライデー」、ホテル、JAL……。現代社会の様々な断面を皮膚感覚で切りとったフィールドノート第二弾。

梅原猛著　黄泉の王 —私見・高松塚—

華麗な彩色壁画を持つ高松塚は亡霊の復活を拒絶した古墳!? 律令制定前後の血塗られた粛清劇と、一人の悲劇の皇子の姿を明かす。

桑田佳祐著　ただの歌詩じゃねえか、こんなもん '84—'90

「人気者で行こう」以降のサザンのアルバム3枚+ソロアルバム。リリカルな58詩とインタヴューで紹介するポップスター桑田の全貌。

三光長治著　ワーグナー —カラー版作曲家の生涯—

ワーグナーほど毀誉褒貶の振幅の激しい作曲家はいない。稀代の風雲児の複雑に織りなされた生涯を底流するものは何であったか?

岩本隆雄著　星（ほしむし）虫

〝星虫〟を守れ! 高校一年生の友美と広樹が最後の〝星虫〟所持者になったとき、全世界を巻き込んだ二人の大冒険が始まった……。

岡崎弘明著　月のしずく 100%ジュース

月と地球が陸続き!? できそこないのシナリオ世界に飛びこんだ春子の運命やいかに。奇想天外抱腹絶倒ミュージカル・ファンタジー。

新潮文庫最新刊

武良竜彦著　三日月銀次郎が行く

イーハートーボの世界に迷いこんだ宮沢賢治先生と二匹の不思議な〝エレキやなぎ猫〟三日月銀次郎、三味線の桃次郎の冒険譚。

K・グリムウッド
杉山高之訳　リプレイ

ジェフは43歳で死んだ。気がつくと彼は18歳——人生をもう一度やり直せたら、という窮極の夢を実現した男の、意外な、意外な人生。

S・M・カミンスキー
田村義進訳　反逆者に死を —ロストニコフ捜査官シリーズ—

裁判を目前に控えた反体制学者を襲った猟奇的な殺人事件。東西関係に波紋を呼び兼ねない難事件を解きあかすロストニコフの捜査。

R・ケスラー
岩元巌訳　スパイ vs. スパイ —米ソ情報戦の内幕—

東西の緊張緩和が囁かれる中、今も続けられるソ連とFBIとのスパイ合戦の内幕を、元ワシントン・ポスト記者がレポートする。

池波正太郎著　まんぞくまんぞく

十六歳の時、浪人者に犯されそうになり家来を殺されて、敵討ちを誓った女剣士の心の成長の様を、絶妙の筋立てで描く長編時代小説。

C・S・ガードナー
山田順子訳　バック・トゥ・ザ・フューチャー 3

ドク・ブラウンを救え! ウエスタン・スタイルに身を包み、マーティは単身一八八五年の西部へ! 大人気シリーズ、ついに大団円。

色仕掛(いろじかけ) 深川(ふかがわ)あぶな絵地獄(えじごく)

新潮文庫　た－48－3

平成二年七月十五日　印刷
平成二年七月二十五日　発行

著者　多岐川恭(たきがわきょう)
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六－五一一一
電話　編集部(〇三)二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Kyô Takigawa 1990　Printed in Japan

ISBN4-10-109913-8 C0193